

A146
4



0012871-000

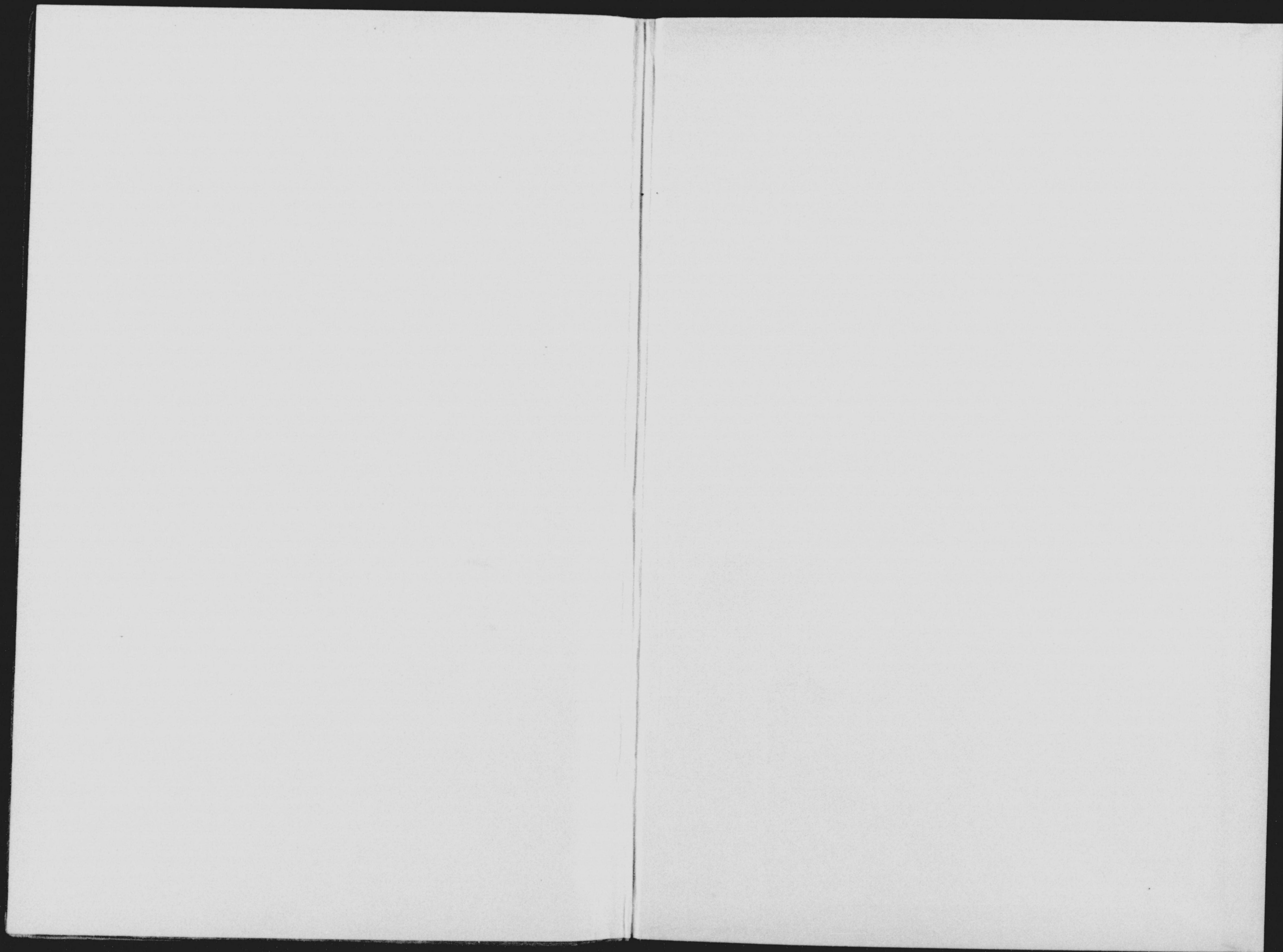
A 1 4 6 - 4

蒙古民族の慣習法

興安総署総務処調査科

1 9 3 4

ACC



調査資料第四輯

蒙古民族の慣習法

文書科保管

興安總署調査科

H23P-6

A146
4



980911

序 文

民族の本質を知らんとせば必ずや其の慣習法を探究せざるべからざるは今更喋々を要せざる所なり。蒙古行政の衝に在る興安總署として其の管内原有民族の慣習法を古きに求めて其の本質を究むるは蓋し當然の事に屬す。然り而して一九二九年V・Aリイザアノフスキー氏著す所の「蒙古民族の慣習法」は其の持つ内容は概して叙上の要求を充すものあり。仍て茲に之を譯して世の求めを同ふする機關及び人士に頒たんとす。

康德元年七月十日

興安總署調查科

蒙古民族の慣習法

目次

序文

第一編 蒙古人の慣習法

第一章 蒙古及び蒙古人

一、歴史的資料

二、蒙古の行政組織

三、蒙古の現状

四、人種學的資料

第二章 蒙古法の起源及其の記録

一、成吉思汗ノ大法典

二、成吉思汗帝國時代の記録

一

二四

二〇

一九

一六

一四

一一

一

一

一

三、元王朝の法典……………二五

 A、元王朝の法典の簡約なる内容……………二六

四、ヤルリツク（布告）巻物及びバイズ……………二七

五、オイラート時代の立法記録……………三〇

 過去のツアチンヅイチク……………

六、一千六百四十年ノ蒙古オイラート法規……………三二

 新ツアチンヅイチク……………

七、喝爾丹—クン・タイチの補足的布告……………四一

 A、ヤールリツク……………四三

 B、銘字……………四三

 C、アバカンスクの銘字……………四三

 D、銘字の譯……………四五

 E、シヤラボリンスクの銘字……………四七

 F、テツシの銘字……………四八

八、北蒙古人の慣習法の記録（喀爾喀人）……………四八

A、喀爾喀チロム……………四八

九、蒙古に對する支那の立法府……………六五

十、理藩院第一法規……………六六

十一、理藩院第二法規……………六七

第二章 慣習法の條項……………七一

 第一款 成吉思汗及び其の繼承者時代の一般法……………七二

 第一項 成吉思汗の大法典及教訓……………七二

 一、成吉思汗の教訓……………七七

 二、成吉思汗帝國時代の教訓……………八〇

 三、ブラノー、カルピニ及びローブルツクの蒙古人の迷信に關する報告……………八三

 第二項 オイラート時代ノ立法……………八九

 一、舊ツアチン、ヅイチク……………八九

 二、一六四〇年の蒙古オイラート法規及喝爾丹、汗、台吉の補足條項……………九一

 三、部族相互の關係……………九六

A、攻撃及び防禦組織……………九六

B、家畜牧養及び狩獵……………九七

C、郵便通信及び馬車の義務的提供……………一〇〇

D、氏族生活及び相互諸關係……………一〇一

四、私法……………一〇四

A、財産法……………一〇四

B、債權、債務……………一〇五

C、親族法……………一〇六

D、相続法……………一一〇

五、刑法……………一一〇

A、刑法制度……………一一〇

B、宗教僧侶に對する犯罪……………一一三

C、國及び政府に對する犯罪……………一一四

D、官吏の犯罪……………一一四

E、社會に對する犯罪……………一一六

F、個人に對する犯罪……………一二六

G、財産に對する犯罪……………一二〇

六、裁判制度及び裁判權……………一二三

第二款 蒙古に對する支那の法制……………一二三

第一項 理藩院第一蒙古法規……………一二三

一、行政法規……………一二三

A、租稅、義務、人頭稅及び徵兵……………一二三

B、糧食の強制的提供……………一二三

C、僧侶に關する法規……………一二三

二、私法……………一二四

A、財産及び義務……………一二四

B、土地の使用……………一二四

C、家族法……………一二四

D、相続財産法……………一二六

三、刑法……………一二七

A、刑罰制度……………一二七

B、國家及び政府に對する犯罪……………一四一

C、公衆保安及び道德に對する犯罪……………一四二

D、官吏の犯罪……………一四三

E、個人に對する犯罪……………一四四

F、個人の自由に對する犯罪……………一四六

G、傷害……………一四六

H、言葉又は行爲による侮辱……………一四七

I、財産に關する犯罪……………一四七

J、竊盜……………一四八

K、放火……………一五〇

四、裁判制度及び訴訟手續……………一五〇

第二項 理藩院第二蒙古法規……………一五一

一、私法……………一五二

A、商業取引……………一五三

B、家族及び相続法……………一五四

二、刑法

C、養子……………一五五

D、相続財産……………一五五

A、宗教に對する犯罪宗教制度宗教宣誓及其教義……………一五九

B、國家に對する犯罪……………一六一

C、官吏の犯罪……………一六一

D、社會に對する犯罪……………一六二

E、個人に對する犯罪個人の自由に對する犯罪……………一六三

F、殺人……………一六四

G、傷害……………一六五

H、言葉又は行爲による侮辱……………一六六

I、財産に關する犯罪……………一六六

J、竊盜……………一六七

K、放火……………一六九

三、裁判制度及び訴訟手續……………一七〇

第二編 ブリアート人の慣習法

第一章 ブリアート人……………一七五

一、歴史的資料……………一七六

二、行政組織……………一八一

三、人種學的資料……………一九一

第二章 ブリアート人の慣習法に關する歴史的記録……………一九五

一、ブリアート法……………一九六

第一款 南方(トランスバイカル)ブリアート人……………二〇二

一、ホリ種族……………二〇二

二、セレンガ、ブリアート人……………二一六

第二款 北方ブリアート人……………二二一

一、バラガンスクのブリアート人……………二二一

二、バラガンスク、イチンスク、タンキンスク及びクチンスクのブリアート人……………二二三

三、ヴェルホレンスクのブリアート人……………二二五

第三章 慣習法

第一款 トランスバイカル(南方)ブリアート人、即ち、ホリ種族及びセレンギン種族……………二二六

一、宗教及び僧職……………二二六

二、行政……………二二二

三、租税……………二二九

四、家畜牧養及び狩獵……………二四一

 A、家畜牧養……………二四一

 B、狩獵……………二四三

 第一項 私法……………二四四

 一處分能力の制限……………二四四

 A、法規……………二四六

 二、財産權……………二四六

 A、不動産……………二四六

- B、動産……………二五〇
- C、狩獵及び漁獵……………二五一
- D、増殖家畜及び家畜の屍骸に對する權利……………二五一
- E、發見……………二五二
- F、物の所有及使用……………二五二
- G、動産の返還請求權……………二五三
- 三、債務……………二五四**
 - A、損害及び損失に對する債務……………二五四
 - B、信用取引と負債に對する義務……………二五八
 - C、寄託……………二六二
 - D、奉公の雇傭契約……………二六二
 - E、貸付……………二六四
 - F、協同團體……………二六四
 - G、贈與……………二六五
- 四、家族法……………二六六**
 - A、婚姻法……………二六七

- B、兩親と子供間の關係……………二七三
- 五、相続法……………二七四**
 - A、遺言狀……………二七六
- 第二項 刑法……………二七七**
 - 一、刑罰の制度……………二七七
 - 二、宗教に對する犯罪……………二七九
 - 三、官吏の犯罪……………二八〇
 - 四、共同社會に對する犯罪……………二八一
 - 五、個人に對する犯罪……………二八五
 - A、傷害罪……………二八六
 - B、言語動作による侮辱……………二八七
 - C、法律の濫用……………二九二
 - D、讒謗……………二九三
 - 六、財産に關する犯罪……………二九三
 - A、竊盜罪……………二九三

- B、詐欺罪……………二九七
- C、放火罪……………二九七
- 七、裁判制度及び法律手續……………二九八
- 第二款 北方ブリアート人イルクトック州……………三〇三
- 一、宗教……………三〇四
- 二、行政……………三〇四
- 第一項 私法……………三〇六
- 一、財産……………三〇六
 - A、土地の使用……………三〇六
- 二、義務……………三〇七
- 三、親族法……………三〇八
 - A、婚姻法……………三〇八
 - B、親子間の關係……………三一七
 - C、遺産相続……………三一八
- 第二項 刑法……………三一八

第三編 カルマツク人の慣習法……………三三七

- 第一章 カルマツク人……………三三七
 - 一、歴史的資料……………三三七
 - 二、人種學的資料……………三五〇
- 第二章 カルマツク人の慣習法の源泉及び記録……………三五五
 - 一、カルマツク汗ドンダクダツシの時代に於て起草せる一六四〇年の法規への補足條項……………三五六
 - 二、一八二二年―一八二七年のカルマツク法律の彙集……………三五九

第三章 カルマツク人の慣習法の條項

第一欸 汗ドンダクダツシの時代に於て起草された法律（即ち一六四〇年のオイラート法規に對する）補足條項……………三六三

一、宗教及び僧侶に關する條項……………三六四

二、攻撃及び防禦の組織……………三六五

三、氏族生活相互の關係道德……………三六六

四、荷馬車の義務的供給……………三六八

五、はぐれ家畜に關する規則……………三六八

第一項 刑法……………三六九

一、政府及び社會に對する犯罪及び役人の犯せる犯罪……………三七〇

二、個人に對する犯罪……………三七一

三、財産に對する犯罪……………三七二

 A、強盜……………三七二

 B、竊盜……………三七二

C、家畜に對する損害……………三七三

四、裁判制度及び法律手續……………三七四

第二欸 ジンジリに於けるカルマツクノオエン、ザイサン喇嘛及びゲルン
グ達の會議に於て改正し完成せる蒙古カルマツク人民の法律……………三七八

一、人權……………三七八

二、人民（氏族制度）の構成……………三七九

三、軍規……………三八一

四、家畜牧養……………三八一

第二項 私法……………三八二

一、親族法……………三八二

二、相續法……………三八四

三、債權法……………三八四

四、財産權……………三八五

第二項 刑法……………三八五

一、宗教の教規、教義、及び僧に對する犯罪……………三八六

二、國家行政に對する犯罪及び職務執行に際して役人の犯せる犯罪……………三八七

三、社會及び善良なる慣習に對する犯罪……………三八八

四、個人に對する犯罪……………三八八

 A、殺人……………三八八

 B、無禮及び侮辱……………三八九

五、財産に關する犯罪……………三九〇

 A、竊盜……………三九〇

 E、秘密の竊盜……………三九二

 C、擅有……………三九二

 D、財産に及ぼせる損害……………三九二

 E、詐取……………三九二

 F、詐欺……………三九三

 G、放火……………三九三

六、裁判所及び法律手續……………三九三

結 論……………三九七

第一編 蒙古人の慣習法

第一章 蒙古及び蒙古人

「参考書」バラース著「史的報告文集」第二卷。プラノールカルビニ著「蒙古の歴史」(一九一一年)。ロブルツク著「東洋諸國の旅行記」(一九一一年)。ミナエフ著「マルコポーロの旅行」(一九〇二年)。ファーザイオアキンフ著「蒙古に關する年記」第二卷。チニコフスキー著「蒙古より支那への旅行」第三卷。(特に第三卷目)

ホコチロフ著「明時代の東蒙古の歴史」。ホツドニエフ著「蒙古年代記」。「ヂヤンガリアのカルマツク人の歴史」。「佛教修道院の生活様式概観」。「蒙古及び蒙古人」第二卷、第三卷—古文書プロツクハウスエフロン

の百科辭典中の論文「蒙古」及び同著者其他の著作物。

メンホウユイムシ著「蒙古帳幕地帯の年記」(支那譯、譯者ボボフ)。ラシツドエツチン著「成吉思汗の歴史」第二卷。コトヴィチ著「蒙古の歴史簡單なる觀察及び現政治状態」。オゴロドニコフ著「西比利亞の歴史の輪廓」(一九一九年)。

一、歴史的資料

蒙古は北緯三十度三十分より五十三度四十五分、東經八十五度二十分より百二十四度の間に、凡そ三百三十三萬七

千二百八十三平方杆の面積を有する廣大なる土地である。其の地勢より言ふならば、蒙古は三つの部即ち平地（蒙古ゴビ）と二つの山嶽地帯（即ち蒙古ゴビの北西地帯と東南地帯）とに分ち得る。平地蒙古又は外蒙古に對し、後者は内蒙古と稱せられてゐる。蒙古の歴史は未だ充分に調査されてゐない。蒙古には太古より、奪略的遊牧の民が住んでゐた。彼等は家畜の牧養によつて、生活を送つてゐた。それが爲めに凡ての家族又は血縁家族の群（即ち民族）は夏の放牧地と冬の放牧地が必要であつた。斯る放牧地は、或る處より他の處に移行するには可成りの巨離があつた。而もかゝる放牧地を所有するために、蒙古人は民族又は全部族として、此處より彼處へと、蒙古包（キビトカ・ユルタ）及び家畜群を引具して、移動しなければならなかつた。之等の放牧生活に於て、遊牧民は屢々他の遊牧民と相會し放牧地の支配の爲め、激しい戦を交へなければならなかつた。斯うした闘争は、遊牧民をして、好戰的精神及び奪略的本能、習慣を發達せしめた。一部族が他の部族に對して武器が優越するに従ひ、或は又共同の敵と闘ふ爲めに、同盟を結ぶに従ひ―後者の手段によつてよりは、前者の手段によつて―遊牧民の大きな國々が蒙古に起つた。彼等の勢力は國境を越へ、遙か遠く被征服住民の上に押し擴がつて行つた。然しながら、之等の國々を構成してゐる種族の間に統制、確固たる教化、一致共同の性質が欠けてゐた。そして内亂相次いで起り、彼等が勃興したと同じ速度を以つて、急速に没落してしまつた。唯其中極少數の國が、確固たる基礎を築いたが、其の中自らの勢力を蒙古に擴大したに止まらず、或る時には中央亞細亞のみならず、全亞細亞又は歐羅巴の一部をも包含する擴大なる地域に、勢力を扶植したものに匈奴の國（匈奴人）があつた。―韃靼人の起源―（紀元前三世紀より紀元始めまで）。次に起つたのは、サンビス（紀元一世紀より八世紀）とジュンジャンヌス（四世紀より六世紀まで）である。―ツングース人及び

タタール―ツングース人の起源。―其後起つたのは土耳其ツグ（五世紀より八世紀まで）である。土耳其ツグ國はトルコ種族である所の回紇人の爲めに亡ぼされた。（八世紀中葉より九世紀の中葉まで）。之を繼いだのは、ハーン人であるが―混血人の起源―ハーン人はキンダヌス人に征服された―ツングース人の起源。キンダヌス人は七世紀の始めに、滿洲人の爲めに追ひ拂はれ、代つて滿洲人は蒙古人の爲めに追ひ拂はれた。

蒙古人は多數の種族に分かれて居る。傳説と古い記録に依れば、蒙古人は初めアンガラ河及び其の支流よりやつて來たものであると想像される。紀元前三世紀或は又四世紀に於て、蒙古民族の或る者はサヤン山を横切り、漸次オルホンセレンガ、オノン河を含む現北蒙古（喀爾喀）に落着き、アルゲン河の上流にまで延びた。支那王朝、唐（六一八―九〇七年）の記録中に、二つの蒙古種族が記されてゐる。即ちシウスイメング（彼はアルゲン河の南に住んでゐた）と、シウエイロートン（アルゲン河の北）とが記されてゐる。尚キダン王朝ラオ（九一六―一二二五年）の記録には、今一つの種族（ダアダア或はターター）が記録されてゐる。（彼等はインシヤンの近くに住んでゐた）秦朝（一一二五―一二三四年）の時に於て、多數の蒙古人は、東はアムール河の中流、北はセレンガ河とバイカル河の廣大な地域に擴がつた。十二世紀に於て、著名な族長であり又組織者である鐵木眞が蒙古民族の中に現はれた。鐵木眞は成吉思汗と言ふ名で有名である。鐵木眞は蒙古の覇者となり、蒙古を統一する爲めに、數十年の間激しい戦をなさねばならなかつた。彼は蒙古の大部分を、自らの主權下に統一し、未だ五十才に至らずして、大汗（皇帝）の稱號とジンギス又は成吉思汗の名を獲得した。それ以來、彼は常勝軍の名をほしいままにした。ウイグル、キンダヌス及び喀爾喀は自發的に此の覇者に從屬した。彼は全蒙古、南シベリアを征服し、支那を蹂躪した。此より土耳其の回回教

國、ベルシヤ及び其他ボクハラ、サマルカンド、クホーラツン、クーヒスタン、ヘラートアゼルバイジャン等を征服した。彼の軍隊は遠くアルメニア及びジョウジャまで進入し、一二二四年には、成吉思汗の軍隊は南ロシアに現はれカルカ河の戦鬪に於てロシア軍を撃破した。

成吉思汗は一二二七年に世を去つた。彼は國を四人の息子に分與し、其の中、窩闊台が大汗の稱號を授けられ、首席に指定された。窩闊台は南北支那の大部分、トルキスタン、アルメニア及びジョージヤを征服し、彼の甥、拔都はボルガ、ブルガリアの王國を倒ぼし、ロシアを従屬せしめ（モスコは一二三七年に奪掠された）次いでポーランドハンガリアに侵入した。窩闊台の繼承者クダツク、ムンキイ、忽必烈の諸汗はよく成吉思汗の事業を承継した。クダツクは朝鮮及びコウカサスの一部を征服し、ムンキイはベルシヤ、シリア、メソポタミア、西藏及び印度を蹂躪し忽必烈は全支那の支配者となり、宋王朝を顛覆し、ボクドウクン（皇帝）を宣言し、新しき元王朝を建てた。（一二七一年）彼も亦徹底的に西藏、印度を服屬せしめた。

成吉思汗及び上述の繼承者等の時代は、其文化の發達は勿論軍事的、政治的勢力に關し、蒙古の歴史に最も輝やかしきページをつくつてゐる。『成吉思汗及び其の繼承者の王國は、ウスリーとアムール地方、トランスバイカルとイルクツク地方、エニセイの南部、トムスク及びトルスク地方等を含め、歐洲に於ては其の北方國境を殆ど五十五緯度まで押し擴げ、ボルガ地方南部ロシアを包含し黒海に達し、クリミア、コウカサス、小亞細亞、亞細亞の一部を征服し、ヒマラヤ山脈に沿つてシヤムの國境にまで及んだ。』と（註）オゴロニコフ教授は言つてゐる。

註 「シベリア歴史の輪廓」一四一頁

亞細亞に於ては—支那、蒙古、西藏、印度、ベルシヤ、トルキスタン及び其他の國々は凡て、この有史以來未曾有の大蒙古帝國の一部を構成してゐたのである。

支那人とか又は西域人とか、蒙古民族より文化程度の進んだ民族を征服した事は、蒙古人の支配階級の文化の發達及び統治組織に甚大なる影響をもたらした。

大蒙古帝國の主要なる武力となつた遊牧的蒙古種族の族長組織の質樸な民習、成吉思汗が採用し其の後繼者が保持せし軍事組織、此れ等遊牧民に好戰的精神及び無限の征服慾を燃やした幾回となき遠征——之等のものは亞細亞人、歐洲人をして蒙古人は恐るべ敵であり無敵の征服者なりと思はしめた。

蒙古人の侵略は恐る可き荒廢をもたらした。一度侵入すれば、住民を殺戮し、町を焼拂ひ、あらゆる地方を掠奪し、より高き文化國を破壊する等廢墟と死と化せしめた。彼等は斯うした破壊手段を以つて、殆ど凡てのものを滅ぼし、漸次大なる國土を地球上に獲得して行つた。蒙古人の侵入は他民族を滅亡せしめた。征服者と混合する爲め且人間型を變化せしめる爲め、新生活様式、新しき言語、新しき習慣及び新文化に適應する様他民族に強制した。尙他の民族は蒙古人の抑壓下に耐へかね余儀なく自己の土地を捨て、代る可き他の土着地を探し求めねばならなかつた。

廣大なる版圖、構成分子たる人種の雜多及びそれ等の間に確固たる經濟的、文化的連關の缺乏の爲めに、さしも驚くべき大帝國も、統一體として永く存在する事は出来なかつた。忽必烈の時代に於て（一二六八—一二九四年）蒙古帝國は既に分裂し始めた。崩解の初期に於て、成吉思汗時代の主權の基礎たる支那及び其近隣が分裂し、他方西方に於て獨立國がつくられた。即ち亞細亞に於てはイラーベルシヤ國、トルキスタンに於ては察合台國、西部西比利亞及

び東部歐羅巴原野に於ては欽察汗國又はゴールデンホードが獨立した。ゴールデンホードは後にクリミア、コウカサス、カザン王國に分裂した。

六

蒙古王朝は支那に於て、其の主權を永く持續することは出来なかつた。一千三百六十八年最後のボグド汗たる成吉思汗の後裔トゴテムールは支那を去り、蒙古にしりぞかねばならなかつた。

蒙古後半の歴史は、一方に於ては殆ど支那との絶えざる争闘であり、他方に於ては、蒙古それ自體中の異種族間の分裂の歴史であつた。其後東部蒙古は三部に分裂した。北部(喀爾喀)南部(蒙古)及び西部(ジャンガリア)の三部分に分裂するに至つた。三部は相互に敵視し合つてゐたのみならず、各部内にも十分な協和もなければ共同一致の精神にも欠けてゐた。支那との争闘中に蒙古人は、或る主權下に統一し、或る時には支那に對し重大打撃を與へ、年來の敵に多大の動搖を來たせしも、以前の如き状態を再び取戻すことは出来なかつた。之は支那が絶えず自國の勢力を伸張させた爲めに阻止されたのであり、殊に滿洲王朝支配の下に於て然りである。又蒙古民族の中の絶えざる不統一と内亂の爲めであつた。

東部蒙古と西部蒙古との争闘は、特に必死、執拗なものであつた。西部蒙古はジャンガリアを主として占め、十四世紀の後期に於て、政治的同盟を結んだ。其の主なメンバーはチヨロス、トルゴト、コンヨフト及びコイト等であつた。「デルベン同盟」四國同盟)。十五世紀の前半、該同盟の好戰的なコンタイシユ(諸汗)ヤホムツド、トゴゴン及び殊にエツセン(エイスン)は、全蒙古を征服し、之を統一し、絶えず支那に對し重大なる打撃を加へた。然しながらエツセンの死後(一四五三年)オイラート同盟は破れ、其の指導國は再び東部蒙古人の手に歸した。十六世紀の

前半、ダヤ汗は支那の度々の侵略を阻止し、大打撃を加へたのみならず、全蒙古を統一し得たが、彼の死後再び蒙古は分裂し、獨立せる部(アイマーク)になつてしまひ、其後再び統一を見る事はなかつた。ダヤ汗は蒙古を十一の封土に分割し、之を息子達に與へた。長男は南蒙古の封地を與へられた。弟達の一人ゲレスセンザは喀爾喀に於て十三オトクを授けられた。

最初は南蒙古人が指導的役割を演じてゐた。南蒙古にはダヤ汗の子孫が移住してゐた。其中七人の著名な指導者、例へば、チユメツドのアルタン汗(一五八五年死没)及び察哈爾のリンダン汗が居た。然し滿洲族の勢力が増進するにつれ、十六世紀の終に至つて南方蒙古種族の大部分は、滿洲族に從屬せしめられた。滿洲族の支那征服後、南蒙古は全く屈服せしめられた。滿洲人族に對するリンダン汗の抵抗も、一千六百六十三年全く失敗に歸した。それ以來、南蒙古は完全に支那の支配下に落ち、其後程無く支那の一藩部の中に含められた。(内蒙古)

北蒙古にはゲレスセンザ部族(一万以上の家族よりなる)が住んでゐた。而してゲレスセンザは喀爾喀に於ける現在の王公の祖先である。彼は世を去る前、自己の部を七旗に區分し、各旗に息子アンヘイ、ノヤンタイ、ヌヌフ、アミン、タルニ、ダムダン及びサム、バンバを配置した。ゲレスセンザの息子達は、更に自分の息子達に、自己の封土を分與せしめたため、喀爾喀の封土(旗)は絶えず増加して行つた。之等封土(旗)に關する盟約は、甚だ無力なものであつた。ポツドネゴフ教授は次の如く言つて居る。「彼等の國內生活に就いて言ふならば、各旗は全く相互に獨立してゐた。即ち各旗は共通せる法律を有してゐなかつた。又各旗結合の基礎は、喀爾喀人を育てた所の民族生活の原則であつた。喀爾喀の各旗を統一體に結合させるとか、又は種族の調和ある聯合を形成するとか言ふ約定はなかつた。各

七

王公は勝手氣儘な行動を取つてゐた。王公は自主的に彼の臣民を支配し、唯習慣と出來心に従ひ、意のままに人を裁き、自由に他の王公と修交を結び、或は敵對した。何か一度問題が惹起したり、又は共同利益に關する特殊なる事件が突發すれば、喀爾喀の諸王公は王公總會議を召集し、同盟を締結した。然しながら、之等の會議の決議は、それに不満を懷く者を別段束縛はしなかつた。若し同盟者の一人が自己に對し、不利益な行動を取るか、又自己の要求に従はざる時は、盟約の各員は同盟より脱退する事が出來たのである」と。

喀爾喀の支配的王公の中で、最も秀でた者は、ゲレスセンザの子供（アンヘイ、ヌヌフ、アミン）であつた。アンヘイの孫スフデイは、達頼喇嘛よりチャサクト汗の稱號を賜り、ヌヌフの孫ゴンボはトシエツ汗の稱號、アミンの孫シヨロイはセツセン汗の稱號を賜はり、彼等の周圍をその種族の旗の小王公連が取巻いてゐた。斯くして北蒙古即ち喀爾喀は札薩克圖汗、トシエツ汗及びセツセン汗の三汗部（三部族）に分かれた。

北蒙古は、漸次滿洲人の勢力の伸張を認めざるを得なくなり、林丹汗の敗北後、セツセン汗は滿洲太子と（一六三四年）修交關係を結んだ。續いてトシエツ汗及び、其後には札薩克圖汗は滿洲太子と修交關係を結ぶに至つた。やがて此の修交關係の結果、蒙古王公は彼等の上に滿洲太子の主權の及ぶ事を認識した。けれども、最初の中は滿洲太子の主權は、唯單に形式的性質のものであり、自國を強力な隣國の攻撃より、安全に阻止する一手段に過ぎないものと認識してゐたのであつた。又それは事實上、依然、自治的な蒙古の内政に何等の脅威も與へず、又滿洲との關係は甚だ薄弱なものであり、確固たるものではなかつた。然しながら、蒙古人の内部の不一致、西北兩蒙古人の鬭争が惹起し、十七世紀の後期に於て北蒙古は完全に支那に從屬してしまつた。

十七世紀の初頃、西蒙古（ジャンガリア）に於て勢力あるチヨロスのコンタイシャス（汗）、カハラクラ及び其の子バツルは、再びオイラト種族を自己の指導下に置いた。此の爲め、若干の秀でたるタイシャは、彼等一族と共にジャンガリアを去り、異なつた方面に落ちのびた。コウ、ウルツクは、最初は東部西比利亞、次いでボルガ河の下流のステツブに移住した。（カルマツフ族）。

滿洲族の勢力伸張、林丹汗の敗北、南蒙古人の滿洲族に對する屈服、滿洲族の北蒙古に加へる不斷の壓迫、喀爾喀に於ける内部の不和、オイラト人の他地方に轉住する爲めに起る衰亡——之等の凡ての爲めに、北蒙古、西蒙古の諸王公は國內の平和の保持、外部的危機の脱出等に對する何等かの手段を講ぜねばならなかつた。此處に於て、一千六百四十年諸汗、西北兩蒙古の諸王公を始め、ククノール及びロシアの諸王公すらも集まり、總勢四十四人の蒙古種族より成る會議が開催された。此の會議に於て、バツル汗の大いなる力に動かされて、新たに同盟が締結され、且新蒙古法規——所謂一千六百四十年のオイラト法規——が發布されたのであつた。然しながら此の同盟及びオイラト法規によつて樹てられた國內の平和は、僅か四十年しか續かなかつた。

バツル汗、台吉は正妻の子九人、妾妻の子二人（センゲとガルダン）計十一人の子を残し一千六百五十四年に没した。長男ツセツセンは、自己の指導下に全同盟を統一し得なかつた。そして又、兄弟達間の不仲、チヨロス部族の諸王公間の仲間割があつた。一千六百七十一年には、センゲはツセツセンに殺害された。之が爲め喀爾丹はステツブに歸國した。喀爾丹は以前西藏へ行き、一寺院に入つて居つた事があつた。一千六百七十六年遂にツセツセン及び其の援助者と戦端を開始し、完全に緦滅し、此處にセンゲの復讐を遂げたのであつた。

熱情家噶爾丹は、自己の支配下にオイラートを統一し、東部トルキスタンを従へ、全蒙古の覇者たらんと努力しつゝ領土を喀爾喀に擴大した。此の企圖遂行の爲め、進んで喀爾喀王公討征に向ひ、一千六百八十八年喀爾喀の完全に敗亡するに及び、遠征は終りをつげた。噶爾丹は此の遠征に際し、喀爾喀をひどく蹂躪し、隸屬せしめたが、之れが爲め北蒙古の一部―凡そ一千家族―は家財を持つて北方ロシアに移入しセレンガ河岸に身を落着けた。(セレンガ河のフリアート民族)。他の大部分は―二萬家族に上る―南方に向かひ、支那人の支配下に從屬した。

蒙古及び支那人の記録には、次の如く記されてゐる。政治的方面に於て、指導的役割を演じたのはウンデル、ゲグエンであつた、彼は胡圖克圖(哲布尊丹巴菩薩の化身)―蒙古に於ける最高僧―である。喀爾喀が支那に屬するに至つたのは、一千六百九十一年多論諾爾の會議に於て、正式に確定されたものであつて、支那は強力なる滿洲皇帝の下にあつてこそ、オイラート人の攻撃に對して、蒙古人を保護することが出来たのであつた。噶爾丹は支那に向かひ、戦端を開き連勝を續けたにも拘らず、結局打破られ遂に自刃した。(支那に隸屬するを欲せず、一六九八年毒杯をかたむけ自害した。)支那は喀爾喀の後援を得、オイラートを北蒙古より放逐し、それより長い間西蒙古と戦を交へた。熱情家オイラート汗のツセベン、ラフタン(一七二七年死没)及びツエレン、ガルダン(一七四五年死没)等は、ジャンガリアの支配下にあるを欲せず、全蒙古を征服し、支那の勢力を減さんと企圖せしも、遂に失敗に歸し、支那は此の一戦に勝利を得、十八世紀の中葉、執拗な戦闘と恐るべき廢墟を殘し(アムールサ・ハンの時代に)再びヂヤンガリアを征服した。(一七五五―一七八年)。斯くして、全蒙古は支那によつて敗亡に歸せられ、全く其の膝下に從屬せしめられ、一千九百十一年兩國家間の關係に一變化が起るまで、此の状態は持續した。

二、蒙古の行政組織

蒙古の行政上の諸改革は、支那人の手により徐々になされた。支那は先に蒙古を隸屬せしめたが、多論諾爾會議に於ては、依然として蒙古行政の軍事的特長は保持された。先づ蒙古を三汗部(軍團)に區劃し、三十七旗(軍區)を配置するに決定した。各旗は更に各々佐領(騎兵中隊)に分割されてゐる。一般人は兵士簿に自己の姓名を記入し其の記入者の中、三分の二は軍隊に入營する義務を負はせられて居る。蒙古王公は六階級(王は二階級、貝勒、貝子及公二階級)及び台吉の四階級に分かれて居る。其後支那は、喀爾喀の勢力を弱める目的を以つて、封土に分割せしめる政策を取つた。斯くして第四の汗部たる賽音諾顏汗部は、土謝圖汗部より切りはなされてしまつた。其の時まで、旗の數はかなりに増加して、康熙帝の時代には其の數七十二に達し、乾隆帝の時代には八十三を數へ、其後八十六に上つた。一千七百二十七年に又一つ改革がなされた。即ち北蒙古内政は、特殊な組織を有する四會盟(セイム)に委任され、諸汗によつて直接統治されるにあらずして、會盟の諸王公より選出された盟長(タルガ)が統治する事になつたのである。かゝる事實の爲めに、諸汗は其の政治的勢力を失ひ、汗の稱號は今や唯單に名譽的稱號に過ぎなくなつた。其れ以來、喀爾喀の四汗(札薩克圖汗、土謝圖汗、車臣汗及び賽音諾顏汗)の各々は、唯自己の旗のみを統治するのみで、他の王公と同地位に立つわけになつた。ジャンガリアを征服した後、支那人は蒙古人に對して、從來より以上の勢力を揮ふに至つた。烏里雅蘇台のツウーチュン(外蒙古の軍隊の總司令官)は内政の支配權を與へられ、且科布多及び庫倫に設けられた辦事大臣の職を與へられた。強國支那は、力にまかせ一千七百八十九年に蒙古に對する特別

な法律を發布し、次いで一千八百五十五年新法律を發布した。
蒙古の行政は次の如く組織されたのである。

蒙古は内蒙古(南)及び外蒙古(北及び西)に區分され、各々軍隊組織を持つてゐた。内外兩蒙古は部及び旗に分れてゐた。内蒙古は二十四部四十九旗に分かれ、それは六盟(哲里木盟、卓索圖盟、昭烏達盟、錫林郭爾盟、烏蘭察布盟、伊克照盟)に結合され各旗は更に佐領に分かれて居る。尙其他の蒙古部族例へばバルガ、察哈爾、土默特の如きは、特殊な行政組織を有して居る。

軍事組織に關しては、内蒙古はその盟の數と同じく六軍團を形成し、又旗の數と同じく四十九師團(ゲウサア)より成つて居る。外蒙古は札薩克圖汗部、土謝圖汗部、車臣汗部及び賽音諾顏汗部の四部より成り、更にそれは八十六旗に分かれて居る。此等は部の數と同じく四つの盟に分れてゐる。(汗阿林、喀魯倫巴爾和屯、齊齊爾里克、札克必拉色欽量都哩雅薩爾)。行政に關してはククノール、伊犁、アルタイ地方は外蒙古に結合せられて居る。軍事組織に關して述べれば、外蒙古は七軍團に分たれ、其の中四軍團は各々の部が各獨立した軍團をつくつてゐる。他の三つはアルタイ部族より成るもの、ククノール部族より成るもの、伊犁部族より成るものである。之等七軍團は百四十九師團に分かたれて居る。

烏里雅蘇台のツウチユンは外蒙古の軍隊の總司令官であり、外蒙古の行政の管轄者である。彼は内政と軍事とに對する補佐官を有してゐる。内政は辦事大臣(フバイ、アンバン)が補佐する。烏里雅蘇台、科布多、庫倫には二人の辦事大臣即ち一人は蒙古人、他は滿洲人の辦事大臣が居る。庫倫の辦事大臣は外蒙古東部(土謝圖汗部、車臣汗部)

の行政に關しては獨立してゐる。彼は北京政府と直接交渉する權限を有し、又それ等二汗部の軍隊檢閲の權限を附與されて居る。然しながら唯全蒙古に關する最も重要な命令は、烏里雅蘇台のツウチユンから發せられ、ツウチユンの軍事補佐官は各盟より一人蒙古諸王公中より選出される。ツサラクチ・ツウチユンである。彼等は汗部の軍隊長の統率者である。彼等の補助役はヘエビエイといふ軍事顧問である。部の行政上の優れた組織はセイム(會盟)である。之は三年に一回一堂に會し、裁判すべき事件を決し、各旗間に義務的勤務を割當て、戸口調査をなさしめるものである。盟長は盟の王公中より選出されたチグルガン・ダルガ(長)であり、部の王公中より選出される。そしてボグド・ハン(皇帝)によつて任命される。盟長は一人の補佐官又は代理官デド・チグルガン・ダルガを有し、其の下に一つの行政廳(衙門)がある。彼は部の國政を統治し、王公の行動を律し、蒙古に居ける滿洲當局の發する凡ての命令に對し理藩院に抗告する權利を有してゐる。旗の長には札薩克が居る。札薩克は旗内を統治する王である。札薩克の職は世襲であり、ボクトーハン(皇帝)より任命される。札薩克は一人又は二人の内政上の補佐官を有す。之は所謂協理台吉であり、役職なき王公よりか又は旗内の台吉中より任命されるもので、世襲王公の下に於ける旗の事實上の行政官である。旗内の軍事上の事柄に關しては、特別な一指揮者—ザヒラクチが居る。ザヒラクチは、大なる旗に於ては二人の補佐官、(年長者—一聯隊の指揮官たるツアサアラン及び年少者—梅倫)小なる旗(六佐領よりも少なき旗)には、一人の補佐官(梅倫)が居る。旗は又佐領(騎兵中隊)に分かたれ、六佐領が一聯隊をなして居る。一騎兵中隊には百五十の成年者が居り、其中五十人は事實上の兵役義務に服さねばならない。

三、蒙古の現状

一四

蒙古は二十世紀に入つても、尙ほ内外兩蒙古に分かたれて居り、前者は四十九旗に分かたれてゐる。蒙古人はアラシャン、エドジンゴール、ククノール、タルバガタイ、イリ、及びカラシヤル等合計六十六の王公領に分れ、彼等は皆別々に統治されて居る。所謂旗（蒙古人―換言すれば支那の軍隊に包含されてゐる蒙古人）―バルガ人、察哈爾人及び土默特人も、別々に統治されてゐる。サビナール（高級僧侶の貢納國）及び最上權を保持する僧は又別々に統治されて居る。喀爾喀は八十六の旗より成り、それは従前通り四つの大汗部に分かたれて居る。札薩克圖汗部は十九旗を包含し、土謝圖汗部は二十旗、車臣汗部は二十三旗、賽音諾顏汗部二十四旗及び八つの分離したるクビルカン（化身―蒙古の僧の最高權威者）の所領を含んでゐる。之に加ふるに、次の如き地方が施政上外蒙古に含められて居る。科布多、アルタイ及び庫倫の胡圖克圖のサービイン所有地である。烏里雅蘇台のツウチユンの支配下にある内政及び科布多、庫倫の辦事大臣の支配下にある内政は、會盟の盟長及び軍事的、内政的補佐官を有する旗の諸王公の手に集中されてゐる。

蒙古に於ける不安定な經濟狀態及び支那人による北蒙古殖民地化の開始並に支那革命は、一千九百十一年の末、北蒙古に起つた暴動の原因となつた。

此の暴動の中心は庫倫であつた。北蒙古は布克圖格根クツクト（庫倫の高僧）の最高權力の下に獨立を宣言した。此の暴動は一千九百十二年外蒙古全體に進展し、ヒンガン山脈よりアルタイに至る滿洲の一部バルグート人に擴大

した。科布多、烏里雅蘇台の支那要塞は陥落され、支那官憲ツウチユン及び辦事大臣は喀爾喀より追放を食らひ、新たに國民政府が樹立された。此時に當つて支那に於て滿洲王朝は没落し、バルガは勿論南蒙古の一部（シリントール、ウランヂャツフ及びエケツ盟）は、庫倫の胡圖克圖の權威を認めるに至つた。露國は一千九百十二年蒙古の自治を認めた。一千九百十三年蒙古に關する條約を支那共和國と締結し、一千九百十五年には露、支、蒙の三國は、蒙古に關する三國協定に調印を見るに至つた。此の協定に依れば、外蒙古（内蒙古にあらず）は支那の宗主權の下にありて自治權を有して居り、而してロシアの保護國として承認された。支那は外蒙古の内政に關し干涉する何等の權利も保有せず、又外蒙古に駐兵する權利も有するものではないが、然し特別委員を庫倫に、三人の輔佐官を烏里雅蘇台、科布多、買賣城に駐在する權利は保有された。外蒙古は喀爾喀（四汗部）と科布多（二汗部）より構成されて居る。

外蒙古國の最高權能は布克圖格根―胡圖克圖に附與された。彼を補佐するものは一人の總理及び五人の大臣より成る大臣會議である。大臣會議は外務、内務、財務、軍務、司法の各大臣より成り、重要問題は旗の諸王公會議（クルルダン）の席上に於て審議決定され、クルルダン及び大臣會議の決議は元首によつて發布されねばならない。地方行政は依然として旗の諸王公及び汗部の盟會に一任されて居るが、遠隔の地方には特別な政府代表が指名されて居る。（例へば科布多、バルガ）一般的に言へば、この革命は中國勢力を驅逐したけれども、僧侶及び王公の勢力を尙一層増大せしめ、蒙古人民の生活狀態の改善に貢獻する所は少なかつた。

ロシア革命によつて蒙古は外國の支持を失つた。一千九百十九年中國は再び軍隊を庫倫に移動せしめた（ス將軍）

其の武力の壓迫の下に、且蒙古王公及び喇嘛僧の一部の助力をうけて外蒙古は自治権を放棄した。一千九百二十年一月一日よりス將軍は、外蒙古の講話部長に任命せられた。自己の下に軍務、財務及び一般事務の三つの行政各部を置いた。尙一千九百二十年末に發布された外蒙の施政に關する一時的法規に依れば、講話部長は行政長官に置かれた。之を輔佐する者に、庫倫に二人の辦事大臣（一人は蒙古人他は支那人）及び烏里雅蘇台、科布多及び重要なるべきウリヤンハイ地方には、三人の辦事大臣が配置された。然しながら、一千九百二十一年の初頃未だ之等の改革もなされず、確固たる基礎を有するに至らなかつた。一千九百二十一年外蒙古はロシア軍（ウンゲルン—ステルンベルグ男爵の統率下の）の援助を以つて、再び庫倫の活佛の主權下に從屬する事を宣言した。

かくして中國軍隊は度々の戦闘後、外蒙領土より手を引かざるを得なくなつた。然しながら中國軍隊に代つた白系ロシア軍も、其後ソビエトロシア軍の爲めに打破られてしまひ國民政府が樹立された。

註 英版に對する註 一九二四年まで外蒙は形式的には、ボクド—チューゲン、フツクト〔活佛〕を頭に戴く立憲王國であつて、其の事實上の勢力は蒙古國民黨に屬してゐたのであつた。一九二四年庫倫の布克圖の死後、外蒙は國民共和制を宣言したが、それは殆どソビエトロシアの夫と類似のものである。

四、人種學的資料

遊牧の民蒙古人は太古より氏族家長生活を營んで居つた。此の生活様式は時代の推移に従ひ若干の變化をしたが、其の大體の形は現今まで存続されて居る。蒙古には近代歐羅巴國家にも、他の亞細亞國家にも見出し得ない一種

奇妙な時代錯誤が行はれてゐる。蒙古人は今日尙帳幕を携へステツプを漂浪する牧者の國民である。彼等は私的土地所有に關しては何等の智識の持ち合せもなく、又土地を旗民の共通財産と考へてゐるわけでもない。旗の王公、札薩克は其の土地の管理人である故に、旗民は王公の許可なくしては、假令一寸一分の土地たりとも占有し得ないのである。蒙古人は四階級に分かれたる。

貴族（「白人」—ノエン）、普通人（平民）（「黒人」—アルバーツ）、中間階級—（平民階級より發生せるもの）（ダークハン其他）、僧侶（喇嘛僧）の四つである。平民は兵士簿に記入せる兵士、然らざる平民及び奴才即ち下僕—換言すれば王公、台吉等の家族に隸屬する平民の家族—等より構成されて居る。中間階級—之は平民の中より可成り少數ではあるが、中間階級として起つたものであつて、所謂ダークハンを構成してゐる。換言すれば租税を免除された者、長期間眞面目に務めた爲めに夫役（強制的労働）を免除された者、旗の行政に地位を占めた者及び世襲的名譽ある稱號を附與された者等より構成されてゐる。

僧侶階級（喇嘛僧）は非常なる數に上り、ボツドニエフ教授は、喇嘛僧の數を蒙古の全男子の八分の五を占めて居ると推定して居る。僧侶の職員は確と定められて居るが故に、職員に屬せぬ僧侶は政府によつて認められない。彼等は租税を支拂ひ、兵役に服す義務を負はせられて居る。

蒙古人は彼等特有の言語、文字及び文學を有して居る。最初は回紇の文字を常に用ひてゐたが、忽必烈の時代に巴斯巴喇嘛が標準蒙古文字を發明した。然し之は非常に複雑且困難な文字であつた。十四世紀の初頃、喇嘛僧オトバルは回紇文字を修正したが、此の回蒙古文字は現在蒙古文字の基礎となつたものである。蒙古人は種々なる部門に屬

する廣範圍に互る著述を持つてゐる。

宗教に於て勢力を占めてゐるものは、十六世紀に移入された喇嘛教であり、それは蒙古に於て有望なる布教地を見出した。喇嘛の中心地は西藏である。蒙古人は非常なる宗教信者であり、各家庭は少なくとも家庭の一員を喇嘛僧たらしめる事を以つて、神聖なる義務であるかの如くに考へて居る。

喇嘛教には三つの階級がある。ゲルング、ゲツスル及びバンチ之である。バンチはキリスト教の牧師と比較すればギリシヤ正教會の役僧及びシツクストンと殆ど相應するものである。

喇嘛教の特長はバークハン、フツハス及びボヂサトバス（呼畢爾罕）の化身の教訓にあるのである。蒙古にはかゝる呼畢爾罕が數百ある。其の中最も著名なものは、格根及び胡圖克圖と言ふ稱號を有してゐる。呼畢爾罕の最も尊敬を拂はれるものは庫倫の佛教の聖者、哲布尊丹巴呼土克圖である。彼は蒙古の高僧であり、教界の首腦者であるが又最近は蒙古の首位となり、エツン汗（主權）の稱號を獲得した。

蒙古は世襲的札薩克によつて支配された爲めに、流浪的遊牧民と封建的族長的生活様式をもつた衰亡と無智蒙昧の非文化的國土である。而して天然資源には極めて豊富であるにしても、其處には未だ工業は起つて居らず、からくも商業が發達したのみである。それも大部分は外國人（支那人及びロシア人の一部）に占有されてゐる。蒙古人の主たる生業は家畜牧養であり、農業は極く僅か行はれてゐるに過ぎない。然もそれも、主として支那人が行つてゐる。蒙古人の生活様式は今尚ほ主として遊牧生活であつて、蒙古包に住まつてゐる。

嘗つては潑刺而も好戰的な蒙古人も、現在に於ては懶惰、無氣力になつた。彼等の風俗、習慣は極めて單純である

又過去に於けるあの慘虐なるに反し、今日は弱者に對しては極めて正直であり、又人間味豊かである。一夫多妻制もある。普通蒙古人は一人の正妻を持つのであるが、第二婦人又は妾妻を持つ事も決してないとは言はれない。親族間係は男系に限られ、女系には認められない。法律に就いては、彼等は主として一般的法律上の慣習即ち慣習法を嚴守して居る。

近代科學は主として蒙古の原住民（喀爾喀人、オイラト人、察哈爾人其他）を正しき蒙古人と考へて居るが、此の他に滿洲に於けるバルガ、フリアート人、西藏に於けるダムスカイ人、タライゴール人、ヨーギユル人、アフガニスタンに於けるアイマーク人、東部西比利亞に於けるフリアート人、ボルガ及びドン河下流に於けるカルマツク人及び其の他の種族は蒙古人に類別される人種である。蒙古總人口は凡そ三百萬人に達する。

第二章 蒙古法の起源及び其の記録

「參考書」ベレチン著「オーローチユチーフの内部組織の概観」（ロシア考古學協會東洋地區定期刊行物）一八六三年、

第八卷及び部分的なもの（記されたヤツサの斷片）。ラシツドエツチン著「蒙古の歴史」「成吉思汗の歴史」（成吉思汗の教訓）（一八八八年）。ホボフ著「成吉思汗のヤツサ及び蒙古王朝ヤンチャオチンチャの法規」。ロシア考古學

協會の東洋地區定期刊行物第十七卷、第五卷。「ミニユシンスク統治時代のタングート及び蒙古古文書の記録」同

著「ミニユシンスク統治時代の古文書に關して」(第十七卷には一三二〇年の蒙古法規の内容が引用されてゐる)。フアーザイオアキンフ(ビチユソン)著「蒙古に關する年代記」第二卷第六章(一八二八年)(一七八九年の蒙古法規)。レオントヴィツチ著「刑罰に關する舊蒙古オイラート又はカルマツク法規」。ゴルストゥンスキ一著「一六四〇年の蒙古オイラート法」(一八八〇年)。リボットセツフ著「支那理藩院法規」(一八一五年)(一八二八年版)。ジャトサラノー及びツルノフ共著「蒙古民族の成文法研究」。イルクツク大學の蒐集(一九二〇年)。ゴールランド著「古代より十七世紀までのステツプの法律」。カザン大學の考古學、歴史及び人種誌に就いての定期刊行物。

一、成吉思汗の大法典

各地に散在せる蒙古民族は、最初は地方的慣習に従ひ彼等の内的生活を律してゐた。十三世紀の初頃、かの成吉思汗が其の主權の下に蒙古民族を統一せし事は、又蒙古人間に於ける慣習法の統一及び(研究者間の大部分の説に依れば)一より十までの創作—蒙古成文法の統一をもたらししたのであつた。

此の最初の、文字として表はした蒙古法典即ち慣習法を成吉思汗が起草したのは彼自身の爲めにしたのであつた。吾々に傳へられて居る報告によれば、彼は決して單に偉大なる征服者にあらずして、優れたる行政家であつた。ベルシアの歴史著述家ラシツドエツチン氏(一三二八年)はこの點に就き次の如く述べて居る。「ヴァン汗征服後一千二百〇六年、成吉思汗は大會議を召集し、之に成功せしを非常に満足し、立派なしかも強固な法律(大法典)を發布

したる後首尾よく(註)大汗の王座についた」と。

註 「成吉思汗の歴史第一卷」 一四七頁

更にマクリツチは言ふ。「東洋諸國のタートル權力の建設者成吉思汗は、ヴァン汗を征服し、此處に無上の權力を把握せし時、或る基礎的規則及び罰則をたて、それを「ヤツサ」又は「ヤサツク」と稱する本に記した。然しながら適當な名は「ヤツサ」である。「大法典」の起草終りし時、彼は之を銅鐵板に彫刻し、之を國家の法典なりと認めしめることを命じた。之は上帝が其の法律を破棄するまでは國にその遵守を命じたのであつた。故に彼の後繼者は「大法典」を以つて侵す可らざるものと考へ、決して訓戒を一步も外れる如き事はなかつた。」(註)

註 ベレチン著 「蒙古概観」 二三頁

チンダメイン、エリケは史記の中に次の如く言つて居る。「支那人のアルタン汗を追放し、支那人、蒙古人、西藏人の大部分を成吉思汗の權力下に隸屬せしめた後、今こそ大國の支配者となつた。彼は支那の法律及び規則の確固巧妙にして大いに研究すべきものある事を想起し、支那より一人の大學者及び十八人の賢明なる學生を招聘し、全國民に平和と幸福をもたらす如き法律の起草方を彼等に命じた。特に彼の主權を保全せしむる如き法典(クリ、エヌヌ・ビチク)の起草を命じた。かくて起草案の作成後之を検討せし時、起草者の思考と自己の思考との相一致するを見、彼等に酬ゆるに稱號、昇進及び賞讃を以つてした。」と。「ヤツサ」又は「ヤサツク」は法律又は取締規則を意味するものである。

蒙古人の生活様式が家長的なる爲と又家族主義が堅固な爲めに、成吉思汗の法典は、凡ての粗朴なる法典がそ

である如くに、其の當時に於て効力の發生する慣習的法律の編纂と確認に過ぎなかつた事は、疑ふ余地もない。成吉思汗の「大法典」は、それ全部が吾々に傳へられて居らないし、又原書又は複寫としても同様全部傳へられて居らない。僅かに昔の史記家、歴史家に依つて傳へられた断片を知るに過ぎないのである。即ちマクリツヂ、ミルホンド、イブンバツタ、ヴァルタン、ブラノーカルブニ、マルコポーロ、ラシツドエツジン等の(註)人々のものを知るに過ぎない。

註 斯る説は一般的説である。(ロシア學者間の説、殊にベンジン著「ウルンスジュチーフの内部組織の概観」の中で説明してゐる。グリゴリエフ著「ゴールドン、ハルデの諸汗に依り與へられた布告の眞證」「ロシアと亞細亞」論文集中の)。然しながら之と反對の説がある。ビイ、ホボフ氏は彼の著書「成吉思汗の大法典及びユアン、チャオテン王朝の法典」の論文中にヤツサの成文法としての存在を否定し、大法典は支那に於ける蒙古王朝の法律類集中に加へられしものであつて、それを成吉思汗王朝が、直接に經緯したものであると言ふ事を指摘してゐる。しかも彼は、一三二〇年の元王朝の法典より、成吉思汗の大法典の三つの引用文を見出し、其の一つはマクリツヂが引用した断片のそれと相應してゐる。彼の説では大法典は、成吉思汗の直接の言葉による布告に過ぎなく、決して成文法として存在してゐたものでない。然しそれは言葉で傳へられし故に、歪曲されてアラブ著者に達したものなんだと言ふのである。(一五一—一五二頁)。實際、大法典の條項は間もなく忘れられてしまつた事實、凡ての研究者が認める如く其後蒙古人の法律は大法典とは違つてゐる事實、又成吉思汗の子孫(成吉思汗王朝)の諸法律中には直接大法典より借用してゐたものがあつた事實、そして断片はアラブ著者により他の根源と

一致せざる其重要點に對し、詳細なる點と暗示とが傳へられてゐる事實——之等凡ては、大法典が明かに成文法としてかつて存在してゐたと言ふ事に疑問を懐かせる。然しながら尙この問題を解決する二三の資料があり又充分なる理由の下に其書に満ちてゐる一般説をしりぞけることが出来る。

成吉思汗の大法典に關するものは、一千三百二十年の元王朝の法典中に又ゴルデンハンドの諸汗のヤルリクス(布告)の中に見出される。其断片の最も長いものはマクリツヂが引用してゐるが、彼はそれを以つて成吉思汗の完全なる法典であると断言してゐる。然しバラヂン教授は、マクリツヂの此の發表に對し有力なる反證を上げてゐる。マクリツヂ説の誤れる事は、他の著者連が引用した大法典の附加的諸断片により證明されてゐる。

吾々に傳へられてゐる諸断片はデ、サシイ(要句集、アラブ、I。マクリツヂの譯)に依つて蒐集された。又上記の著者及び年代記編者の著作中に見出される。それ等はベレヂン教授により上記の著作中にロシア語で引用されて居る。ジウチノフ著 オーロスの内外部組織の概略

成吉思汗の訓戒は、かの大法典を補足するものとして役立つかも知れぬ。其の或るものは恐らく大法典それ自身の断片なのであらう。然し一方、其他のものは成吉思汗の法律の一般的性質を表示してゐるのである。之等の訓戒は、ラツシツド、エツチンが廣く引用してゐるが故に、吾々はそれを茲に抜粹して引用しよう。

全國民に對する一般的強制法としての大法典は、唯一つに纏つた蒙古國家の存在を末長く生かしめはしなかつた。十三世紀の末頃、その重要性は早くも動搖の傾向を示し、蒙古國家の崩壞により、急激に無力化してしまつた。之れが爲めに、後に至つて蒙古民族の或るものは、佛教又は回教を輸入した。然しながら蒙古民族の共通習慣は、長

期間存在し、尙又成吉思汗の威風の爲めに大法典の意義は全然消滅したわけではなく、蒙古帝國破壊後永く唯一の蒙古民族の法規上に、一種の勢力を揮つてゐたのである。

この大法典は、他の粗朴な法典もそうであるが如く、遊牧の民蒙古民族のあらゆる生活方面を律したものでなかつたところを、こゝに明記して置かねばならない。此の法典をもつた主たる意味は、成吉思汗帝國を構成する同盟蒙古民族間の諸關係を悪化せしめない事であり、又若干の民族習慣の共通性を方便として、共通法規を以つて彼等を同化せしめ様としたものゝ如くに思はれるのである。又國內の民族的慣習法が、廣大なる土地に流布され、それが其儘に残つたものである様にも思はれる。小さな部族的「法典」が「大法典」と共に一緒に存在して居つたのかも知れぬ。恐らく小部族的「法典」は成吉思汗が支配をなして居た時代には、存在してゐた事だらう。少なくともパーラーの(註1)説は斯うであるし、又ラシツドエツジンの(註2)著作中にも之を暗示するものがあるのである。

註1 ザムルンゲン第一卷 一九三頁

註2 レオントヴィツチ著 一九八一—一九九頁

二、成吉思汗帝國時代の記録

成吉思汗帝國時代の記録は即ち元王朝の記録である。吾々に傳へられてゐるものに三つの法律類集がある。一は元王朝の法典(一二三二〇年、仁宗の時代)、二は大元王朝の一般法、三は英宗統治時代の新法規、(一二三二一—一二三二二年)である。

三、元王朝の法典

最初の記録された立法上の文書は、恐らく蒙古法典が之を代表してゐる。換言すれば蒙古法典は、支那に於て發布されたもの及び成吉思汗以前の國家の東部全體に於て、蒙古元王朝(一二八〇—一二三六八年)が特別な注意を持つて、蒙古に對して發布した法典等が最初の記録である。此結論は次の考究より來てゐるのである。元王朝の法典の研究者たるビー・ボボフ氏が述べてゐるが、それによると之等の立法上の文書は、言語より言つて、昔の支那語とも又近代の支那語とも異なつてゐると言ふのである。尙此の部分の多くに就いて氏は語つてゐる。

『元王朝の法典は、其條項の基礎をなす報告又は布告と言ふ形體のものであつて、支那人がもとゝゝこれを創作したものにあらず。むしろ蒙古語より支那語に翻譯されたものである。尙其の構文は今日尙維持されて居る。』と。彼はこの發表(註)に就いては、それを正當づける證據を吾々に與へてゐる。

註 ビー・ボボフ氏「成吉思汗の大法典及び蒙古王朝の法典」、ロシア考古學協會の東洋地區第十七卷中第四卷一五七頁。

フアザー、イオアキンフ氏は英宗の統治時代を調査し、蒙古に關する著作中に次の如く述べてゐる。

『其當時に於ける帝國の法律とか又は取締規則とか言ふものは、未だ一定して居らなかつた。其れが故に一千三百二十三年に英宗は新法典を發布し、之を「一般法」と稱した。』と。此の發表を前者に比較すると、一千三百二十年の元王朝の法典(ビー・ボボフにより立派な理由で其の發布の日は限定される)は、蒙古帝國の或る部分に對して發布せられ

たものであつて、前者とは判然と別個のものだと言ふ結論に達する。此の結論は又次の考察により支持される。それは二つの法典（此場合二つの一般法）が一國に而かも同一國に三年の間に發布されたとは、如何にしても想像し得ぬ事であり、又最初の法典の特質、蒙古人の性質及び成吉思汗の引用文等に關するビー・ホボフ氏の發表演文の見解に従へば、一千三百二十年の元王朝の法典は蒙古の爲めに發布されたものであり、それは蒙古法典を代表してゐたと言ふ結論が推斷されねばならないのである。

A、元王朝の法典の簡約なる内容

一千三百二十年の蒙古法典は、十節三百七十三項に分かたれてゐる。

第一節 大臣の位階及び等級に關する裁定條項を含む。

第二節 財務大臣に關聯して、俸給、租稅、消費稅及び人頭稅に關する條項。土地、結婚、相続財産等に關する法律を含む。結婚は花嫁の處女ならざる事が發見される時は取消される。結婚は同一家族名を有する者の間には許可されない、官吏は自己の從屬者の娘との結婚は禁止され、兄弟は自己の義姉妹、女奴隸との結婚は禁ぜられ、女奴隸は自由民と結婚をなし得ない。女樂師との結婚は禁止せられてゐる。一人の子供も有せざる寡婦は、其の夫の分け前を相続し、本妻又は妾腹より出生したる男子は、同額の財産の分與を享有する事になつてゐる。

第三節 儀式執行に關するもの—祝賀、供納、學校、佛教、道教、教育、ネストリウス派・キリスト教其他の條項を含む。

第四節 軍務大臣に關するものであり、陸海軍に關する條項、軍務、驛亭、狩獵其他の項を含む。

第五節 司法大臣に關するものであり、犯罪、刑罰に關する詳細なる條項を含む。

この條項は、支那の影響を受けてゐる事は明らかである。謀殺、強盜（竊盜に伴ふ殺人）不法利得及び竊盜、各種の竊盜、詐取、詐欺、誣告等々を罰してゐる。尙同節には法廷に於ける手續、原告、被告、訴訟の受理及び其他の事柄を含む條項がある。

第六節 勞働大臣に關するもの、繻子及び綿の手工業に關する條項、橋、渡船、航海、官廳建築に關する條項を含んでゐる。

以上表示された六つの基礎的「節」に加ふるに、四つの補足的「節」が尙ほ含まれてゐる。それは次に記す事柄を律してゐる。(1)元王朝の皇帝の宣言文。(2)「政府の命令」換言すれば皇帝の布告。(3)政府組織。(4)委任條項、上告及取締りの原則等である。

四、ヤルリツク（布告）、卷物及びバイズ

成吉思汗と同時代の歴史家メンカン（支那人）は述べてゐる。成吉思汗は又ウカス（チャン）命令（チイ）及び其他の文書を出してゐる。之は彼が金玉朝の亡命朝臣に教はつて、つくつたものである。人民の爲めに發せられたウカスには四種ある。その中に告示（スウアン）訓令チャイ（註）がある。

註 セントペテルブルグ、ロシア地理學協會の報告書第五卷 八九頁。

此時代の政府の文書の中で、吾々に傳へられてゐるもの、最も重要なものは布告、卷物及びバイズである。ヤルリツクは立法又は行政の單一なる問題に關して、國家最高權の擔ひ手たる汗の意思を表現するウカス（布告）である。

取締法規又は最高政府の決議は公布されねばならなかつた。其方法の如何によつてヤルリツクはスウアンとチャイとに分かれた。前者は口頭を以つて公布され、後者は汗の勅許状として發布されたものであつて、それは小さな木製又は石の書板、巻物、一片の葉（棕櫚葉に、しかし後には紙に）等に記され、岩又は崖其他に彫刻されたものであつた。

ヤルリツクが發布される時には、それが一般人に熟知せしめる爲めに、數種の言語で書かれたのであつた。何故ならば、各々の國民は獨自の言語を有してゐるからである。従つてこの爲めに、汗の宮廷には特別の翻譯者が居つた。

ヤルリツクには印章の代りに汗のタムガ（紋章）が附せられた。ヤルリツクに加ふるに之を發布する人には、汗の意思及びヤルリツクの眞正なる事實を確證した所の特別の命令バイズが與へられてゐた。かくして首教アルキスに發布するベルジベツク汗のウカス（布告）には次の如くある「吾々は汝等にバイザ（バイズ）及びそれを確證すべきヤルリツクを與へたり」と。

ヤルリクの内容に關して言ふならば（1）取締規則たる性質を帯びたウカス（布告）及び汗により布告された諸法律（2）行政法令、（3）特典官職其他（註）である。

註 レオントヴィツチ、左掲書二〇九頁。

デフター（巻物）

デフター（巻物）は、汗の國內行政法令である。之は公布するを許されてゐなかつた。之は行政的又財政的性質を帯びた文書であつた（例へば租税に關する如きものである）。例へば、之等は徵稅者に對して、發せられたものである。

が、後年又ロシア王族が流民群に對して貢納を登記するに至つた爲め、之はロシア王族に對し發布された事がある。

バイテ（バイズ、バイザ）は蒙古諸汗の發する命令である。此等は既に成吉思汗及び其繼承者の時代になして居た如くに、ヤルリツクと區別をつけなくてはならない。

バイズは（1）諸汗のヤルリツクを確證する爲め、（2）或る地位にある者例へば大使、宮臣、從者其他の地位にある者のサインとして、（3）隸屬を申出た敵に對する保護として用ひられる。例へば之等は官學者シュミツド教授とグリゴリーフとの間に論戰に火花を散した問題で有名なミニユシンスクバイズである。

バイズは其題言の文字を金鍍金した四吋半に十二吋の大きさを有する銀の書板である。之は一千八百四十六年オツナチエナヤ村のほど近く、エニセイ河の左岸に見出されたものであつて、それには次の如く記されてある。「ムンケ汗の名は、神の御力により尊敬されん。何人と言へども尊敬を拂はざる者は滅びるならん。」恐らくこのバイズは口頭又は文書の訓令に加ふるに、後者の確證として、汗の使者に與へられたものである。又一千八百八十四年フランクヒイ村の近く、エニセイ洲のミニユシンスク地方に於て發見されたバイズに就き、ボツドニエフ教授の記する所に依れば、このバイズは直徑二吋七の丸い銅製のメダルで、それに長さ三吋八の裝飾物がついてゐる。メダルの片面に記されてある題言には「皇帝に賜へるメダル」「記號チアオ第八百九十號」「首都以外の地に帯びるべからず」と。其他の片面には次の如く書かれてゐる。「皇帝に隨從する近衛兵は之を帯に附すべし。此のメダルを有せぬ者は何人たりとも法の命するところに従ひ審問さる。（此のメダルを）借用又は貸與する者は何人たりとも犯罪者なり」と

之は明瞭に其れを附するところの人間の等級を表示するに役立つたのである。

註 ホツドニエフ氏——一八八四年ミニユシンスク地方で発見せられた支那のバイズは、ロシア考古學協會の東洋地區定期刊行物に模寫す

之等の文書とヤルリツクとに依つて、成吉思汗時代の蒙古國家の軍政、内政及び國內組織は了解し得られたのであつた。

忽必烈汗が王公總會議の許可なく、大汗の稱號を勝手に獲得した頃には、早くも成吉思汗の建設した大蒙古帝國は支離滅裂に崩壊し始めた(一二六〇年)。此の爲めに西蒙古は獨立を宣言した。

成吉思汗時代の支配の中心地は、東方即ち支那、滿洲、蒙古、朝鮮、西藏及び其少數の國であつたが、一千三百六十八年大汗又はチムール皇帝の時代に、成吉思汗の主權は支那に於て没落し、チムールは先には自己の住居地たりし支那を去り、蒙古に引上げた。大蒙古帝國は分裂してしまつた。其の覇權獲得の爲めの鬭争は、異種族蒙古人の間に起り、支那との戦ひ及び相互に不平をかもし居る中に、新たなる政治的統一及び同盟が形成されたのであつた。

五、オイラート時代の立法記録

過去のツアチンヴィチク

上記の鬭争に於て、現代のチャンガリアに居住する西蒙古人は最も大なる勢力を發揮した。チロスホイト及びホシヨト等の地方に流浪を續けてゐた三蒙古部族は、十四世紀の末頃、同盟を意味する「オイラート」として有名な一同盟

を結成した。後に至つて今一部族トルゴーツが之に合し、全同盟はデルベン、オイラート(四國同盟)の名をつけられた。

かくしてオイラート同盟は、間もなく彼等の相互關係を律する同盟部族に共通せる法典の作成を必要としたのであつた。パーラー氏はオイラート同盟の古いこの法典につき吾々に報告はして居るが、殘念な事にはそれは詳細を缺いて居る。彼は古い昔の法規又は法典—ツアチンヴィチクの寫しを所持してゐた事は明らかである。何故ならば、彼は自身の言葉で語るのではなくして、寫本の原文其儘の轉寫の一部である一連の斷片を引用してゐるからである。しかし其の寫本は、成吉思汗の「ヤツサ」及び一千六百四十年のオイラート法規のにそれとは異なつてゐる。

パーラー氏は彼と同時代の西蒙古人カルマツクの慣習法の基礎であつた蒙古民族の法律にかのツアチンヴィチクを關係づけて述べてゐる。換言すればツアチンヴィチクは或る單一部族の法典としてではなく、西部蒙古人全部の共通法典と考へてゐる。又レオントヴィツチ教授は、此の古い蒙古法典はオイラート同盟が結成された初期に於て、世に現はれたものである事を充分な理由をもつて述べてゐる。然しそれは彼が其法典を、四國同盟を基礎づけた政治的妥協の表象と考へてゐるからである。丁度蒙古四十四部族の大同盟より遅れて發布された(一六四〇年)ツアチンヴィチクを、其の大聯合の法律上の表象であつた如くに考へると同様である。

レオントヴィツチ氏のかゝる結論は、この過去の法規の内容に基礎を置いたものである。其の後半の最初の斷片には、僧侶(牧師バフフェン—パーラー氏はかく稱してゐるが)の犯せる姦通は罰せられないと記してゐる。しかし十六世紀の後半より蒙古、チャンガリアに入込んで來た喇嘛教は、喇嘛僧に對し嚴格に童貞の純潔を要求し、これに違反すれば如何なる場合なりとも罰せられてゐるのである。従つて此のツアチンヴィチクは、蒙古及びチャンガリアに

佛教が確固たる地盤を占むるに先立ち、一時存在して居つた。換言すれば、十六世紀の前半以前に存在してゐたのである。レオントヴィツチ氏は其起源を十五世紀であると述べ、しかも十四世紀の末葉に發布されたと言ふ事實の可能性すらも認めてゐる。斯く認識するのは一見眞實らしく思へる。若しこのツアアヂンウイチクが西蒙古の大法典であつたとすれば、換言すれば、オイラートのものであつたとすれば、必然的に其起源は、かの同盟が結成せられた頃であると述べねばならない。何となれば、其當時は成吉思汗の「ヤツサ」が大蒙古帝國の結成された頃に存在してゐた如く、又一千六百四十年西、北(東)蒙古部族が同盟を結んだ時のかの法規の如くに、政治的同盟の結合を、一共通法律を以つて強化せしめる事の必要が必ず起つたに相違ないのであるから。

このツアアヂンウイチクは吾々に傳はつてゐないが、八つの断片がパーラー氏の著書「ムルンゲン」(第一章一九二頁以下)に獨逸語で引用されてゐる。そのロシア譯はイゴウムノウフの譯書「蒙古の概観」の論文の附録としてスバスキイにより出版された。それは又「太古より十七世紀に至るステツプの法律」論文中にゴールランド氏が繰返してゐる。

舊オイラート法典の内容は、(5) 息子への贈與金に關して。(1—4) 姦通。(6) 行爲により企圖される侮辱(7—8) 婦人の身分に關して。

六、一千六百四十年の蒙古オイラート法規

新ツアアヂンウイチク

大蒙古帝國の崩壊後、ヂヤンガリアに四國同盟の結成された後も、依然として蒙古の分裂はやまなかつた。蒙古

人及び殊に好戰的オイラート人は、屢々支那を戰慄せしめたが、彼等は却つて自國內の不統一に悩まされた。即ち西蒙古は東蒙古と戰を交へ、又東西兩蒙古の内部鬭争、北オイラート人と南オイラート人との鬭争等。而して彼等の凡ては内部分裂の爲め、支那より受ける壓迫に悩んでゐた際に、好戰的滿洲王朝は遂に支那の覇者となつた。

十七世紀の初頃コロス、カラクラ兩部のタイシヤ、及び彼の後には其子バツール汗台吉は、衰亡せしオイラート族を征服し、蒙古民族の間にオイラート同盟の勢力を回復した。カラクラ及びバツール汗は、自己の民族と共に大なる勢力を有するタイシヤの一郡を一千六百二十年—一千六百三十年の間にヂヤンガリアより移住せしめるに努力した。ウシ汗はククノールに行き、次いで西藏に行き、オチルト台吉及びアバライはバトンヂターラに、コーウルツクは初めは西比利亞、次いでボルガ河下流に移住し、オイラート同盟の力を弱めたが、それと同時にバツール支配下の民族統一に、大いにあづかつて力があつた。

オイラート人の勢力矢墜、喀爾喀に於ける内亂(ソクツノーエンの放逐)支那よりの攻撃、ソクノール、バツール汗の敗亡等、かくして東部、西部、北部蒙古の諸王公は、國內の平和確立及び外敵に對抗する強固なる同盟の結合によつて、國內の不安を排除せん事に嚮心した。一千六百四十年ヂヤンガリア、ククノール、西比利亞は勿論の事喀爾喀の蒙古諸王公は一般會盟(セイム)を召集したが、之はヂヤンガリアで開かれた事は明かである。此會盟に於て一或る資料に依り判斷し得られる如く—新同盟がバツール汗の大なる権力下に樹立され、新蒙古オイラート法規が發布された。ヂヤンガリアの部族のみならず北蒙古、ククノール及び西比利亞住民をも結合せしめた新同盟結成の目的は、國內の平和、秩序の確保を期する一方、外敵に對する防備となさん爲めであつた。此の目的は、又法規の内容に

も影響を及ぼした。斯の如く、之は全蒙古民族の爲めの法典ではなかつた。(内蒙古人の爲めのものでは決してなかつた)。一千六百四十年法規は主だつた部族恐らく蒙古民族の大部分に對しても、確に効力のある法律であつた。又之は成吉思汗以後の蒙古民族に對する最も一般的な蒙古法規であつた。

然し乍ら、次の點は留保せられねばならぬ。

一千六百四十年の法規は、ロシア住民を含み、西蒙古人間に、長期間効力のあつた法律である事は疑ひもないが、其法律の効力の北蒙古への擴大に就いては問題(一般的な説であるにも拘らず)が残されてゐる。充分に解説もされずより深き研究の爲めに、残されてゐる事を認めない譯には行かない。それは北蒙古には同時代の別個の法令が、例へば喀爾喀チロームの如きものが存在し、又蒙古オイラート同盟が其後間もなく崩壊してしまつたと言ふ事實より考へて見て、認めない譯には行かぬ。(一六四〇年の法規に對する喀爾喀の態度に就いては、ホツドニエフ氏著蒙古日誌エルテムチーエリエー三二—二〇〇頁参照)。

該法規の源泉は何であるか。

之に就いてレオントヴィツチ氏は、例へば成吉思汗の大法典、彼の訓戒、地方的又は小さなヤツサ、十五世紀のチヤンガリアのツアチンヴィチク、蒙古の傳説及びバイズ、喇嘛教上の法規及び部族の慣習法等が源泉であると考察してゐる。

ゴルストウンスキー教授は成吉思汗大法典及び彼の時代の(布告)バイズ、ヤルリツク、宗教上の法規等を以つて、此の法規の源泉となす説を排斥して居る。何となれば成吉思汗時代のヤツサ及び其他凡ての諸法律は忘れられ

て居り、又該法規中には如何なる宗教上の條項も含んでゐないからであると。彼は該法規の源泉を口述の慣習法、十七世紀初頭の蒙古人の政治的、社會的狀態等であると考察し、又恐らくツンカーバーの宗派、黃色帽子の宗教運動も源泉をなしてゐると考察してゐる。古い著者に就いて言へば、フアーザイオアキンフ氏であるが、彼は一千六百四十年の法規の源泉は慣習であると考へ、又バーラー氏はそれ以上に、昔のツアチンヴィチクがそうだと言つてゐる。

吾々の説としては、成吉思汗の「大法典」及び成吉思汗時代の諸法律を以つて、一千六百四十年の法規の直接源泉となし得なかつたのである。十七世紀に於ては、成吉思汗時代の「大法典」及び諸法律は既に等閑にふせられ、又「大法典」の條項と一千六百四十年の法規の條項とは其の本質、例へば其の特質とか其の精神とかに付き兩者は異なつてゐる。

成吉思汗の「大法典」よりはむしろ古きツアチンヴィチクが一千六百四十年の法規の源泉として、考察され得るかも知れぬ。バーラー氏は舊法規八斷片を引用し、其の中の四斷片は、バーラー氏の時代に於て、カルマツク人の間には尙ほ効力のあつた慣習法であつた事を述べてゐる。換言すれば、法規が發布されて百五十年の後に、尙も法律の効力があつたのである。オイラートの舊法規は、新法規即ち、オイラート人(ハツール汗)が其れを起草するに當つて、明らかに指導的役割を果たした新法規に、大いなる影響を與へた事は間違いないのである。(レオントヴィツチ氏が出版したバーラー氏の書物「舊諸法律の参考文」中の法規第四百二十二條参照)。

宗教上の規則がこの法規の條項に大なる影響を與へたとは言へなくとも、若干の影響を與へたと言ふ事は注目せらるべきであらう。(レオントヴィツチ氏の出版の法規の第五、第八、第十七、第十八項参照)。

法規起草會議に三人の佛教徒が出席したと言ふ事は、次の事實を表示してゐるのである。即ち、彼等は平和の樹

立を悦福して法規を發布したが、それは彼等宗教の教へと精神に全く符合したと言ふ事實なのである。然しながら、一千六百四十年の法規の基礎的、重要な源泉が、蒙古民族の慣習法にあつた事は疑ひのないことだ。事實、慣習法が一千六百四十年の法規に及ぼした影響はすべて研究家により明記されて居り、之は又該法規自身によつても確かめられるのである。ゴルストウンスキー氏の出版になるロシア本の第三十五項には「父は規則の命するところに従ひ、自己の子に財産を頒與するの義務あり」とあり、又レオントヴィツチ氏の本の第四十五項には「父は慣習に従がひ、自己の子に財産を頒與せねばならぬ」とあるが、バーラー氏の本の第三十九項には、又之と類似の語句がある。

該法規が相続財産の分配を習慣に委かせると言ふ事は、最早や疑ひ得ないところである。斯くして、蒙古民族間の諸關係を統制せんとした一千六百四十年の法規は、慣習法を抑止せんとしたものでなく、其反對にそれに依存してゐるのである。

ティ・チエー、チャムサラノー氏は、北蒙古の喀爾喀チロム法典に關し興味ある報告をなしてゐるが、彼の説によると、オイラート法典と同時代に喀爾喀チロム法典が起草されたのである。

彼は喀爾喀チロム法典の或る條項が、オイラート法規の(註)それと相當した條項と一語一語一致すると言ふ事を述べてゐる。然し此の場合に於て吾々は、共通した法的概念に基づく他のものより或るものを借用して來るか、或は又慣習的諸規則を同時に法典に作成するか、何れかを爲さねばならない。しかし何れの場合に於ても其の詳細なる點は異なるにしても、其根本的原則に於ては同じであつて、それが蒙古人の慣習法であると言ふ事は確である。

註　チャムサラノー、ツルンノフ共著「蒙古民族の成文法の記録吟味」二頁。

一千六百四十年の法規を發布した會盟には、三人のフツフタス(他の資料によれば四人)及び二十七人の指導者が出席した。即ち四人のフンタイチ又はコンタイシス同盟部族の主たる指導者、三人の汗、三人のタイシヤス一部族の指導者、王、ノーエン及び其他の指導者が出席した(該法規の序論より)。此會盟に出席した人々の名簿に依つて判る如く、次の諸部族に依つて同盟は結ばれ、法規は承認せられたのである。(第一)北蒙古(喀爾喀)に居住する蒙古部族〔第二〕チャンガリアのオイラート同盟を結成した部族、〔第三〕オイラート同盟を捨て去り、ククノール(グシ汗)、西比利亞のステツプに行き、ボルガ河岸に居住した部族(ホウルルツク及び其子シユクルダイチン)。斯くして、一千六百四十年の法規の効力は廣く喀爾喀、チャンガリア、ククノール及び西比利亞は勿論、西藏、ウラル、ボルガ地方に迄及んだ。尙ほ法規には、同盟を構成した四十四部族の名が列擧されてゐる。レオントヴィツチ教授は之等の部族に就いて次の如く述べてゐる。「分離した蒙古部族—フリーアト人は南シベリアを流浪した部族である」と。(註)

註　レオントヴィツチ氏、左掲書二二頁。

四十四部族の同盟會に出席したフリーアト部族の或るものは、法規の第三項に依つて確認される如く、北蒙古よりオイラートに延びて行つたバルガ人(バルガフリーアト)バツト人及びオイラート人よりなる一族なる事を示してゐる。一千六百四十年の蒙古オイラート法規に關する蒙古(カルマツク)の本は、一八八〇年「一六四〇年の蒙古オイラート法律」なる題言の下に、ゴルストウンスキー教授が出版した。其の獨逸語譯は、官學者バーラーの著作「蒙古民族に關する史的報告文集」の中に見出される。

尙レオントヴィツチ著「刑罰に關する蒙古カルマツク又はオイラート法規」(第六十五頁以下)。ロシア譯はシエレメチエフ氏の表に依れば第一版は一七七六年にモスコイ大學私立ロシア協會の論文の第三回に出版され、それは又「蒙古人及びカルマツク人の法律の譯」と言ふ表題下にレオントヴィツチ氏が出版してゐる。第二版は(註)一八二八年「蒙古人及びカルマツクの諸法律」の表題下に、「祖國の息子」及び北部官文庫より出版され、第三版はレオントヴィツチ氏の著書で、一八七九年「刑罰に關する蒙古カルマツク又はオイラート法規」。ツァヂンヴィチク第四版は、一八八〇年ゴルストウンスキー氏が「一六四〇年の蒙古オイラート法」の表題で出版した。

吾々には、これよりバーラー、レオントヴィツチ、ゴルストウンスキー諸氏の著書を扱つて見よう。バーラー著書の「一六四〇年の法規」(補足はない)には百三十條項、レオントヴィツチ著書の中には百五十條項、ゴルストウンスキー著書には百二十一條項がある。

レオントヴィツチ、バーラー兩氏の著作は余り知られてないが、ゴルストウンスキー教授の露西亞語本は彼自から筆を取り、蒙古本からの譯書で、しかも説明的記述があるから、吾々は彼の版を用ひて行かう。

吾々は、或る學者例へばコステンコツフ、ロヴィンスク、ムルボツフ等の學者の説に反對し、一千六百四十年の法規の發布された土地はチャンガリアであつて、決してロシアでない事を考へねばならない。

註 上記のレオントヴィツチ氏の著書に對するボボフ氏の批評に就いて、彼は北部官文庫と「祖國の息子」は別個の版でなく、同一版中にふくめて法規の書を出版したのであると述べ、自己の誤譯を訂正してゐる。

其の當時は、唯ホウウルルクがトルゴーツ部族の一部と一緒にロシアに向つて移住しつつあつたが、其他の部族

は凡てロシアの外部にあり、一六四〇年の法規の著者と想像されるバツール汗台吉及び之に加ふるに、實際に補足をなした起草者たる彼の息子ガルダンは、決して、一步もロシア國內に足を踏み入れた事はないのである。(註)

ローキニイフ代はオイラート人の研究に於て一六四〇年にホーウハルクは子供と共にヌークルダイチ

(註) に現はれ、カルマツク法規を發布した王公會議に出席する爲めに、ロシアよりチャンガリアに行つたと斷言して居る。

一千六百四十年の法規の内容は、科學的に見て非常に興味深きものである。法規の根本的的目的は、該法規の最初の條項より現はれてゐる。即ち「部族の同盟を確固たらしめ、同盟各員間の平和を樹立し、秩序を維持し、外敵に對する防備を組織する爲に」とある。之等の目的が、そもく第一義的なものであつた事は疑ひない。法規の序文では、神及び神の從僕に對する祈禱を記し、宗教権力下に法規を置き、次いで之れを起草せし王公の名を列挙してゐる。

先づ最初に、該法規は蒙古人の部族内の諸關係を同格に見てゐる。加盟部に屬する領地の強奪を王公に對して禁止、北蒙古及びオイラート部族に對しては、聯合してかゝる犯罪者を罰せよと命じてゐる(第一、第二條)。逃亡者は之を蒙古人及びオイラート人の中に分置すること(第三條)。同盟間の分裂の因となるべき問題即ち外敵接近せしも、それに就き何等の報告をせざる者は處罰す(第四條)。同盟諸部族は、他部族よりの逃亡者を收容又は殺害するを禁ぜらる(第六、八、九十九條)。之等の法規違反に對しては刑罰を科す(第十條)。

尙ほ更に該法規は、僧侶及び宗教に關する一連の條項を含んでゐる(第五、九、十六、十九、百十一、百十二條)。同盟の軍事的性質より結果された一連の條項及び攻撃守備に關する諸關係を律する條項(第十一—十五、三十八、

五十、五十一、五十五條)。

四〇

オイラト人は主として家畜、牧養又は狩獵によつて生計を維持して居た。該法規の條項の可成多くのものが彼等の取引の取締及び保護の爲に作られてゐる(第七條、五十五、六十、六十六、六十七、七十九、百〇二、百〇五、八十、八十二、百七、百十三、百二十條)。飛脚通信及び郵馬車の強制提供に關する僅かの條項がある(六十一、二十三、七十七、百二十條其他)。民族生活様式及び民族間の相互諸關係は、該法規に反影してゐる(第三十七、八十三、八十七、百十六、百十八條)。其の中若干は婦人の取扱方法を示してゐる。一方に於て、家庭内では嚴として家長中心主義であるが、他方家族外に於ては非常に人道主義的である(第三十三、四十、五十、七十三條)。私法に關する條項も該法規には含まれて居る。(財産法—第十九、三十八、九十二、百十九條)。(債務に關する法規第六十三、六十五、百十八條)。家族法(第三十五—三十七、三十九—四十一、百十七條其他、相続法—三十四條)。

犯罪に關する法の條項は澤山ある。國事犯—(第一、二、十一、十三、十四條)。社會に對する犯罪—(第六十九、七十三、七十四、八十七、九十條)。官吏の犯罪—(第二十一、二十三、二十六、六十二、九十八條)。宗教及び僧侶の犯罪—(第五、十九、十八、十二、百十二條)。個人に對する犯罪、例へば殺人犯—(第三十一—三十三、四十四、四十五、四十六、四十八、五十九、九十九、五十四、七十一、七十五條)。傷害罪—(五十五、七十四、七十一、七十六條)。言語及び行爲による侮辱—(第二十、二十二、二十七、二十八、二十九、七十二、七十三條)。財産に關する犯罪—詐欺—(第二十三條、二十五條)。竊盜—(第八十八、八十九條)。強盜—(百二十四、六十、九十二、三十八、七十八、百〇八、百十三、百十五條)。其他放火—(第五十八條其他)。

該法規には裁判組織及び法律手續に關する條項が僅かにある(第六十三、六十二、百六、百九條)。之等の條項は噶爾丹汗の布告が補足してゐる。

七、噶爾丹—クン・タイヂの補足的布告

オイラト同盟の盟長であつたバチルの子噶爾丹—クン・タイヂは一千六百七十七年より一千六百九十七年の間に一千六百四十年の法規の補足的布告を發布した。(註)

註 噶爾丹に就いては、特にイオアキンフ氏著「オイラト人の概観」(第六五—八九頁参照)。

レオントヴィツチ氏の目錄中には「噶爾丹汗の補足的布告は、唯一つよりしか引用されて居ない。又バーラー氏及びゴルストウンスキー氏の著作の中にも、唯一の布告が引用されてゐるに過ぎない。バーラー氏は最初の補足的布告は一六五四年に發せられたものであると説明し、又ゴルストウンスキー氏は一六八七年であると言ふ説に傾いてゐる、即ち蒙古王公會議が喀爾喀に開催された一六八七年にそれを關係づけしめんとしてゐる。然し、之等の推定は吾々に言はしむれば誤謬である。事實問題として、レオントヴィツチ氏の目錄にも亦バーラー氏のそれにも、かの補足的布告が發布された時日を、何等記述して居らない。しかしゴルストウンスキー氏の目錄には、第二回布告の發布された年を一六七八年と記して居り、又彼の原書の中には立法條例が一六四〇年の法規より始め、ドンダツクダシ(一七四一—一七六一)の發布した法規迄を明瞭に年代順に取扱つてあり、又バーラー氏の著書の中にも亦同様、年代順

に記述してゐる事が認められるのであるから、かの年代順にある、噶爾丹汗の第一回布告が、又發布された年に就いて言へば、最初のものであつたと考へねばならない。換言すれば一六七七年又は一六七八年に關係づけねばならない。

註 噶爾丹汗は父の死後（一六五四年）オイラト同盟の長に一時なつたのでなく、一六七七年にも長となり、そして、二つの布告は彼が發布したのである。何故ならばクンタイチに就いて言ふならば、事實、同盟盟長のみが全同盟の法規を完成する事が出来たからである。

レオントヴィツチ氏の著書の最初の噶爾丹汗の布告は十六條項に分かれ、パーラー氏のそれには十一條、ゴルストウンスキー氏のそれには十二條項に分かたれてゐる。第二回布告は、パーラー氏の著書には三條項、ゴルストウンスキー氏のそれには條項に分かたれてゐない。

第一回布告は貧民救済に關する條項（ゴルストウンスキー氏の著書の第二百二十二項）。窃盜に關する條項（第二百二十三―二百二十四條）。異なつたる旗民が、新たにオトク及び盟を構成する場合に關する條項。（第二百五條）法廷に關する條項（二百二十六、二百二十八、二百二十九條）。オトク（佐領の事であつて、旗の中の小區である、譯者註）及び盟よりの逃亡者に關するもの（第三百三十一條、第三百三十三條等が含まれてゐる。

第二回布告は法廷に關する事項のみを取扱つてゐる。（註）

註 一六四〇年の蒙古オイラト法規の諸條項は、十七世紀の前半ロシアに移住したトルゴーツ及び其他の部族のオイラト子孫達によつて、より以上に發達したものにされた。彼等は現在ボルガ河下流に居住し、カルマツ

ク人と稱せられてゐる。

A、ヤールリツク

ヤールリツクはオイラト同盟の時代に發布された立法條例及び行政條例であつて、分離してゐる。上に引用した噶爾丹汗の布告は此の好例である、勿論其性質上銘字と稱せられてゐるものは左に引用するが、又その後に来る「シヤラポリンスクの銘字」と言ふのがある。

B、銘字

註 ポポフ著「ミニユシンスク統治時代のタングート及び蒙古人聖典記録に就いて」露國考古學協會西比利亞地區定期刊行物、第五卷三―四頁。同著「ミニユシンスク時代の銘字」刊行物第三卷三頁

オイラトの諸汗の特殊な條例（特に諸汗の布告）は、岩に銘字の形で記し、發布された。諸汗の布告、規則は岩又は崖に刻みつけられるか、又は色彩をほどこして書いたものである。之等は、法律發布に際して遊牧民が取つた容易な原始的方法であつた。「昔の遊牧民にとつては、岩又は崖は常に彼等に開放せられて居り、しかもそれは容易に近づき得る書物の如きものであつた。」とレオントヴィツチ氏は言つてゐる。

かく汗が規則を發布する際に、遊牧民は、それを常に岩又は崖に、巨大な文字を以つて刻記した。だから、旅行者は無意識的にもそれを目を引かれ、又凡ての人（読み書きの出来る）は容易にそれに近づき得た。

C、アバカンスクの銘字

之はアバカンスク村の對岸、エニセイ河の土堤にあるベレヴオツナヤ山の赤い砂岩の崖に黒い字で書かれてゐた。

其處は有名な場所で繪の様に美しく當時遊牧民がエニセイ河を渡る際に常に往來した道である。此の文字は、崖の三つの石に同筆法を以つて書かれてあつて、上に蔽ひかぶさつてゐる岩のお蔭で保存されてゐる。パーラー氏は之等一七一年の銘字に注目した最初の人である。彼は其の銘字を寫し取つた。一八一七—一八一八年にはスバスキイ氏が、一八四七年にはカストレン氏が、次いで一八五〇年にはチトツフ・コストロフ氏が此の銘字を寫し取つた。

一八五七年にスバスキイ氏は、之等を地理學協會の定期刊行書（第七卷）として發行した。此銘字を翻譯せんと企圖した東洋學者にフレン、クラブロツト、イゴウムノツフ及びベレヂン等が居る。しかし、其の企圖も銘字の滅損と共に上寫しの缺陷の爲めに、イゴウムノツフ及びベレヂンの兩氏は僅かに數語を判讀したに過ぎなかつた。教養ある喇嘛僧と雖も、この銘字を譯し得なかつたが、唯一人イルクーツクの神學校の蒙古語教授エイ・オルロツフ氏がそれを譯した。

昔の蒙古語で記された銘字及び其最初の部分は所在不明になつてゐる。之は、恐らく風雨に曝されて打消された儘岩に残されてゐるか、さもなければ未だ寫しに取られてゐないのである。該銘字の寫しには、俘虜の取扱方法及び敵國に於ける行動の方法等に關し、汗が軍隊及び喇嘛僧に對してあたへた命令が含まれてゐる事は、一見してわかる（註）。

註　ボボフ氏は、汗のみがラマ僧に對して命令を與へたのであると説明してゐる。
ボボフ氏は此銘字の起源を十七世紀であると述べてゐる。即ち、イルデン汗及び其他の汗が西比利亞に遠征し時代（一六四二、一六五二、一六五七、一六七六年）であると云つてゐる。一六四二年と一六五二年には、イルデン汗はアバカンスクに遠征し、エニセイ河の渡船に假住したのであつた。

1)、銘字の譯

- (1) キビトカ及びオロスの從順な、害なき俘虜は、路上の野獸の爲めに後に殘し置く勿かれ。しからずんば殺せ。平和（の確立）を見るまで、汝等喇嘛僧（指名されたる）は、屍を葬むる爲め……墓の事につき高らかに語れ。（何となれば）俘虜との交り（關係）は異端者と相親む事なればなり。
- (2) それ故に豊富なる蜂蜜、凝乳、肉及びミルクを受くる代りに、高貴なる（忿怒せる）龍に對する生贄として男及び女を埋めよ。
- (3) 汝等が射殺し（彼等を）土中に埋める時には、龍の爲めに盛り上つた塚の上に小枝を投げ與へよ。又記念の爲めに其上（其側に）に種子をふり播け。
- (4) 花（種子）（殺されし俘虜に屬する）のみならず牡馬を埋葬せよ。しかし、孕まざる牝駱駝は馬の手網に結び引き行くべし。子を生みて母親となるかも知れない故に、埋める勿れ。男は百人づつ葬れ。女には拷問傷害を加へる勿れ。何となれば男は彼女より生れ出づるが故に。他の者は恐らく藥殺せらるべし。（然る後）彼等を葬れ。
- (5) 年老へる父母に危害を加へる勿れ。而して、家畜の群を滅ぼす事は必要な事なりや否や。然る後凡てを葬れ。斯くして吾々は、こゝに其の宗教的幻想の強調された姿を見るのである。即ち俘虜との交はりには異端者（邪教徒）との親交と同様視し、又戦争に於て喇嘛僧は塚の事につき高らかに讚たへよと命ぜられてゐる等。換言すそれは、反抗する異端者の殺戮を要求し、順なる者、温和なる者は勅絶する勿かれと言つてゐる。其の命令の言ふ所は、殺害されたる俘虜を腐肉の如く放棄する勿かれと言ふのではなく、龍に對する一種の生贄として彼等を葬れと言つてゐる。

るのである。被殺戮者は、蒙古の習慣に従ひ、百人づゝ牡馬と共に葬り（家庭には稀少な、しかも不可欠な乳駱駝と一緒に葬れと言ふのではない）其塚の上に花の種子をふり撒き、樹木を投げ與へねばならない。反抗を挑まぬ俘虜は殺害を免ぜねばならなかつた。従つて奴隸となしたのである。婦女子には傷害拷問を加へてはならぬと言つてゐるが、之は彼女等が、次の時代の子供の母親にならぬとも限らなかつたからである。そして、年老へる父母に對しても亦拷問は禁じられてゐる。

此の軍事規則の中に、婦女子は男子以上に寛大に取扱はれてゐるのを知得するが、又此點はオイラト法規に於ても同様である。

此の章句は、かのアバカンスクの銘字が十七世紀—即ちオイラト同盟時代に關係して居ると言ふ一事實の附加的證據となるのである。

他の人間に對しては、換言すれば、上記の種類に屬せぬ人々、家畜群の牧養者は勿論だが、其等の者は軍隊の好むがまゝに、換言すれば、奴隸にするも殺戮するも勝手であつた。

かゝるが故に、凡ての規則には、反抗を挑む敵に對しては無慈悲に殺戮せんとする精神、年老いたる男女に對しては慈悲の精神、其他の者に對してはどうでも良いが、むしろ彼等に對しては、慘酷であつた。（註）慈悲に關する條項は、恐らく掠奪的遊牧民の慘酷性と關かつた佛教の精神により鼓吹されたものであらう。之等二つの同様な性質が、一六四〇年の蒙古オイラト法規の鐘頭の中に存在してゐる。

註 實際彼等は非常に慘酷に取扱はれた。俘虜に對しては、何等考慮する處はなかつた。ガルダン汗の命に依り一萬

五千人の俘虜はザイサン湖の島で悉く身を寸断に斬られ、其犠牲者の爲めに湖の水は眞赤になつたと言ふのである。成吉思汗の傳統は十七世紀の蒙古人に未だ忘れられてはゐなかつた。

E、シヤラボリンスクの銘字

之はエニセイ河の支流、チューバ河の右岸、シヤラボリンスク村より三軒の地點に在る。別個に分かれた砂岩の七層より成つた岩に書きつけられてゐる。或る石には様々な動物又は象形文字が畫かれてゐる。之は、前と同様エイ・オルロフ氏が譯して居るが、それによると斯う書いてある。「平和を結ぶべく（嚴密には—促進すべく）一致したるが故に、吾々は平和と平靜を明示する（註）黒（紅）牡牛の印章を附加す」と。（註）其の下に「其年七月二日」（これは、今年）噶爾丹汗。眞實（ならん）（若くば、ガルダン汗の喇嘛僧）

註 之は岩の左側に畫かれてある。

此内容に依ると、該銘字は噶爾丹汗の特派使節（何故ならば、ガルダン自らエニセイに決して行つたためではない）が、ツビンスクの或る小王公と共に結んだ平和條約であつて、それをガルダン汗の特派使節が（ラマ僧）彼に代つて調印を済ませたのである。そこで、ツビンスクの王公は、銘字にし自分の印章—黒牡牛—を附加したのであつた此譯は岩に畫かれた畫により確證されてゐる。斯くしてシヤラボリンスクの銘字は、噶爾丹汗の統治時代に關係を有するものである。エヌ・ジエー・ボボフ氏は、此銘字の起源を一六九一年であると述べてゐる。「一六九一年は歴史的資料に依ると、特派使節—ラマ僧がボシヨクツ汗（噶爾丹）より送られて、ツビンスクの住民に派遣された年だから」とボボフ氏は言ふてゐる。

F、テツシの銘字

四八

之はテツシ村より一・五軒の地點に存するエニセイ河の右岸にある。クラツク（握拳）と言はれる岩にあつた。此岩は正規の列に配置された三層より成り、一種藝術的な壁を形成して居り、此處よりエニセイ河の美しい峡谷の風景が一望にをさめられて居る。岩には一面に文字と神秘的記號が書かれ、又蒙古語書體の數語が書かれて居る。年月の經過に依り半ば消滅してしまひ、其の殘片の譯は斯うである。「健やかなる家畜……此處に埋めらる。サルナク、ロソゴサツク」。

八、北蒙古人の慣習法の記録（喀爾喀人）

A、喀爾喀チロム

喀爾喀チロム（ヤアメヌウ・ハラハ・チロム・ヌン・チユリム）は、北蒙古人の諸慣習法の世に出た法典の一つである。此文書に關する研究者、ヂヤムトサラノー及びツルノーフ氏（兄弟）は次の如く述べてゐる。「蒙古人の昔の習慣に依り、其の唯一の寫本がシヤンソスインヤーマン（キヤフタの近くイビンゴール河岸）中に保存されて居つて、一般人はそれを寫し取つたり又は保存する事を禁じて居つた。一九一四年ヂヤムトサラノー氏がヤーマン中に保存されてゐたその寫しを取り、之をセントペテルスブルグ科學學會の亞細亞博物館に送附した。尙ほ、他に二つの寫本が作成され、其の中の一つは彼等兄弟が（註）其文書解説の研究の爲めに使用した。」

註　ヂヤムサラノーとツルノーフの共著「喀爾喀チロム」（文書の解説）一八二三年出版。イルクーツク大學教授及び學生の論文集よりのものとは別個な寫し。

此法典は時を異にして起草され、八節に分かれてゐる。その基礎的部分は、研究者の述べる如く、一七〇九年トシエツ汗部（盟）の蒙古人が組成し、其他の部門は案を立てたのみで文書にはならなかつた。その第一節の一句にはホバラクス（僧侶）に關する事が書込んである。之は一六八六年又は一七四六年に關係づけられ得る（後者一七四六年については恐らくもつと證據立てられる）。第八節は一七一八年に起草され、其補足的部分は一七三六年か又は一七九六年であり、トシエツ汗部の蒙古人が、此の起草に參與したと言ふ事は、此の補足的本文よりして察知される。此慣習法の法典は、全北蒙古人間に適用されたもので、即ち三汗部（盟）全部に（後に至つて四汗部に）に適用された。之は全北蒙古人の生活様式の共通性と、又此の法の前後に、三つの外部の旗（國外の北蒙古人）其他に適用されると言ふ事が記されてある事實よりして、確かに證明される。

該法典の内容は次の如し（ヂヤムトサラノー、ツルノーフ兩氏共著より）。蒙古人の習慣により、序文には宗教及び其の從僕に對する敬虔の言葉が述べられてある。

「吾等は吾々の庇護者たる、又救済者たる崇高なる喇嘛を禮拜す。喇嘛は十箇國の凡てのフルハンスを自身に集中し給ひ、凡ての生物に智識の種子をわかち、世にも又なき美しき御聲をもち、公平なる情をもつて凡ての人間を導く佛の憐愛心を持ち給ふ。」

崇高なる喇嘛（格根）——人類の王座——の生命が、ダイヤモンドの如く末長からんことを、教養の世に擴がらんこと

を、慈悲深き人々の生命の長からん事を、國及び教養の榮へまつらんことを、悪行爲の名指が決して聞へざらんことを、人の煩惱を慰め、光り輝く善なる行爲が、盡きるとも知らぬ泉の如く渾々と世に満たんことを、此草案をドウーグル汗に提出し、イビンゴールの谿谷に沿ふヴオリカン山の南方に居住するノーエン及びサイタスと共に、上に載くウアリチャイ、トシエツ汗、シヤンゾトバ、エルデニ……（主なる參與者の名）等の同意を得たる後、吾々は三旗の運命を決する大法規の討議をなせり。牝牛年夏月の輝き渡る愛すべき又善き日二十八日に」。

該法典は左の條項を含んでゐる。

第一條 馬車旅行費用及び特派使節（或る使命を託されたエルチ）に關する條項。トルカン人に關する條項。調停に關する條項（フルフンデツセン諸關係に對する偏頗なる調停）。自稱使節に關する條項。高級官使への報告に關する條項（汗又は格根の如き）。格根の所有する畜群に關する條項（強制的荷馬車運搬の爲めに是等畜群中の馬使用を可とする條項、畜群の竊盜に關する條項）。格根の會計處に關する條項。乳牛に關する條項（サーメンウニー、格根、王公、又は僧院の牛乳御用商人に課せられた物納税の一種である。其牝牛は、特に夏期數ヶ月間、使用する爲めに與へられてゐたものであるが、斯る動物の竊盜は、格根の財産竊盜犯と見做されたのである）。入國許可に關する條項。格根のダリリツク（布告）違反に關する條項。避難者に關する條項（避難の正當なる權利を行使したる者の殺人犯。かゝる犯人は、若し此の國に避難して來れば、格根の保護を享受するのである）。客人に對して働いたよりの竊盜に關する條項（より正確に言へば、格根に敬意を拂ふべくやつて來た者よりの竊盜である）。此の條項には、次の如く記されてゐる。「犯人は被害者の所屬する旗の法律に従ひ、罰金に處せらるべし。又三外旗の一般法に従ひ、刑

罰に處せらるべし」。クレン（小舎）及び二つの大きな帳幕を立てるに必要な土地に關する條項。封禁の（神聖なる土地？）に關する條項（條項の文字は不正確だ）。政府の炭坑、鑛床、堆積物に關する條項、干草に關する條項。家畜が草を咬切る爲めに起る損害に關する條項（家畜が踏越へてはならぬ線は、野原より二つの「カラータアガン」の距離を置いてなさねばならない。「カラータアガン」は間隔を計る特殊な長さの尺度であつて、間隔はそれにより、白と黒とを判然と區別したのであらう。種子の竊盜に關する條項。枯木及び成長時にある樹木伐採に關する條項（小舎の建つて居る地方又は其地方の境を越え、冬期に入らざる以前即ち根元の凍らざる以前の伐採は、禁ぜられてゐる）。スーマス及びパークハウス（ハリス）の所有する裝飾品及び財産、家畜の竊盜に關する條項（斯る竊盜は、格根が所有する家畜竊盜と同様に見做された）ダータン汗部（盟）及びハバラクに關する條項（此處に喇嘛僧となる爲めの諸條件が列擧されてゐる）。

「此條項よりして、今一つの時代に關係してゐる附加部分が始つてゐる」とヂヤムトサラノ及びツルノーフ兩氏は言ふてゐる。宗教上の高位を與へられてゐる者に關する條項。家系及び財産（家畜）の否認に關する條項。及びトオインに關する條項。ハバラクの馬車に關する條項。グルム（祈禱者）の采地に關する條項。醫者の采地に關するもの、社會的條件に關するもの（氏族が俗人を僧院に入れしむるに、同意すべき條件に關するもの）。他の旗との契約和解に關するもの。ホバラスクに關する和解。若し誤解の起きたる場合は、ホバラスクの住んでゐる旗の法律に従ひ、其問題は決せられるのである。人格を決定する（喇嘛僧となるを意味す）權利に關するもの。西方より（西藏より）來たる喇嘛僧に關するもの。武器贈與者との争ひに關するもの。ホバラスクの共同會計處に

關するもの。男子及び家畜に關するもの。ホバラスクに關する條項及び財産をめぐる争ひに關するもの。此條項を以つて、附加的條項は終つてゐる。尙ほ此の他にホバラスクの法律上の地位に關するものがあるが、之は他の時期に起草されたものである事は明瞭であつて、恐らく前記の附加的條項に先行する條項と同時にのされたものであらう。犯罪を犯せし喇嘛階級に屬する新來者に關するもの。次に書かれてあるものは、目次には含まれてゐない長い條項であり、それは財産に關する僧の權利及び彼等の資格決定に對する權利を確實ならしめるものである。目次に依ると、更に他に條項がある。それは外來の教養ある者（喇嘛僧）に關するもの。ノエンストインス生れつき及び毒舌を以つてゲルングを平氣で侮辱する者（それは汗に對し加へられた侮辱と同様に見做されるのである）等に關するもの。銳利なる刃物を以つて加へられた創傷に關するもの。ホバラクスの醉態に關するもの（もつと正確に言へば、僧に飲酒せしめる事に關するもの）。ハラクハンスに關するもの（俗人による僧の驅逐及び誣告に關するもの）。

第二條 馬車に關するもの。カーガンの旅行中の手當に關するもの及び其の特派使節—エルチスに關するもの（彼等に對し、馬車の提供を拒否する場合は、又此條項に依る）。バンベイリーオガサクの旅行中の馬車、手當及び彼等の特派使節（エルチス）に關するもの。ノオエンに對し加へられた言語又は行爲に依る侮辱に關するもの。銳利又は有毒刃物を以つて相互にはたし合をなす事に關するもの。ダイチ、タアブバン及びアバイス（王公の娘）間の争論に關するもの。ノオエンが婚約したる娘を、他のノオエンの處に連れて行つた場合に起る問題に關するもの（特權階級に對する結婚法の一連の條項）。汗及び平民に依つて犯される不義に關するもの。娘の結婚祝

宴（内祝宴、婚約の方法等）に關するもの。ノオエンが彼の臣を殺害する場合、又は平民が他の平民を殺害する場合に關するもの。行爲による侮辱が因となつて起つた争論、又は俗儀、カーガンの特派使節、エルチス及び普通のエルチス汗のそれではない等が、刃物の鞘を抜拂ふ侮辱が因となつて起つた争ひに關するもの。馬車の強制的提供を免ぜられたことに關するもの。特派使節の怠慢及びアルキー（ブランドイー）を飲酒するに關するもの。タイガン及び特派使節の馬車使用に關するもの（馬の使用法を綿密に律する一連の條項、特種法典の一種）。

第三條 先づ庇護の權利に關する條項より始まつてゐる。高位の人（格根）への目的ある訪問及びあらゆる種類の逃亡者に關するもの。罅及び網に關するもの（もつと正確に言へば、誤つて掛けた爲めに起る出來事に關する條項である）。正鵠な狙ひの檢閲に關するもの。或る日（節制の日）に人の殺害を禁ずる條項—例へば（毎月八、十三、十五、二十五及び三十日）。目的を有する殺人（復讐の爲め）に關するもの。盲目にならしめる犯罪に關するもの（眠の玉をたゞき出す）。齒をへし折る罪、手又は足を不具ならしめる罪等に關するもの及び不注意の爲め、身體の重要部分を喰ひ違はしめる事に關する條項（例へば頸等）。眼を盲目ならしめる事は殺人と同様に見做されて居た。へし折られた各の齒に對する罰金は、其の損害代償として牲畜九頭及び一頭の撰擇牲畜。其の齒がぐらくにされた丈であつても罰金だけは支拂ふのであつた（損害の代償としてでなく）。腕の挫折に對する條項—其の罰金は牲畜九頭三回、犬が入に咬つた場合に關するもの（動物により惹起された死は「人間により償はれた」換言すれば奴隸を與へる事によつて）墓穴を掘開ける事に關するもの（高級官吏の墓穴掘開に對する罰金は—牲畜九頭。下級官

吏のそれに対する罰金は一牲畜五頭。一般人のそれに対する罰金は一片腿寡婦に關するもの（世を去つた男の妻連）。（母方の親戚）デエテエ及びノガツン間に於けるヤール（罰金的一種）支拂未納に關するもの。支拂期に巡視する従者に關するもの。醉態時に於ける情狀酌量に關するもの。エルチイが馬車提供を拒否されたと言ふ口實の下に或る物を（任意に）奪取する場合に關するもの。ノオエンが他人を利用して竊盜を犯したる場合に關するもの。其條項は「自ら竊盜したる如くに彼を罰すべし」と規定してゐる。一般に法律を執行する場合に關するもの、及び召喚された訴訟提起者の法廷に出頭せざる場合に關するもの（強制手段—原告が出廷せざる場合の強制出頭命令、罰金及び訴訟却下）二つ又は三つの旗の旗民間の訴訟事件審判の方法及び共通せる使命に派遣されるエルチイに關するもの（其決定はエルチイを通じて、殆ど十日以内に常になされてゐたのであるが、之は明かに斯る事件の判決を下す人物の選定に關係してゐたのである）。

第四條 子供への遺産分配に關する條項（カーガン及ダアサワと言へども、其事實を報告し、登録簿に登録せねばならなかつた）。保護（或る上級官吏の）を享受して居る人に對し、又一般人に對して銳利なる刃物、棒、石握拳、等を以つて侮辱（殴打及び傷害）を加へる事に關するもの（之は當時の社會諸關係を暴露して居るからして、興味あるものである。自らの身體に保護を受けてゐた者はカプチエクウルと稱せられ—それは文字通りに譯すと締針を意味し、其の擁護者はツウセグロクヂイと稱せられてゐたのである）。政治家が或る犯罪人を懲戒し、打刑を以つて罰する場合に關するもの。尊敬を拂ふべきセイタス、タイヂイ、トブナウス及びシクチンス（？）に向かひ、銳利なる刃物の鞘を抜拂ふ場合に關するもの。カアガン又はベイレイの會計處よりの竊盜に關するもの。竊盜一般に

關するもの（一つの長い條項—それは單一の竊盜と再犯の場合を分けてゐる。若し竊盜犯が被害者に竊盜財産を賠償し得ざる場合には旗の當局は、男子に對しては馬五頭、女子に對しては馬三頭を支拂つてゐる）。宣誓を避け又は逃亡（隠れる）する場合に科するヤール（牲畜の形に於ける罰金）の量に關するもの。竊盜犯が家畜所有者を殺すか、傷害を加へるか、若くば殴打する場合に關するもの犯罪に依りヤールの量を確定する場合に關するもの（罰金に加ふるに「カール」と言はれる代償が要求される—それは常に選擇動物であり、之は敢へて法に違背する者に對して科す刑罰の或る種であつた。蒙古法には、多種多様の罰金がある。即ちヤール、バア、アルダーグー、アンダア、トルゴンル、カール等がある。然し之等凡ての罰金の間に存する相違を了解する事は、歐洲人にとつては困難な事だ）。二十牲畜と言ふ數に上る大きなアンダア（罰金）の徴收方法に關するもの—五牲畜は諸費支辦の爲め（アルガウル、ウクセミアラム及びエルチイは各一牲畜を受取り、證人としての立會人は各々一牲畜を受取る）。手當に關してツウセミアラムとエルチイとの間に起つた爭論解決に關するもの（裁判費用及びそれ等の算定方法に關して）。ヤールに關する條項はあるけれども、法規には其量は決めて居らない。又多種なるヤールの條項がある（九牲畜よりなる罰金は、此の如きものが含まれて居なければならぬ。即ち大なる有角動物四頭と三才羊五頭—三頭の動物の中一頭は大なる動物、他の二頭は羊）よき施條銃、郵便馬車、立派なる衣服、デエギールに關するもの。現行犯（竊盜）に手錠又は足枷（ダングウ）を嵌める必要のある場合に關するもの。犯罪（竊盜犯）（告訴されて居る）の隠蔽に關するもの。又は或者による事實の密告に關するもの。

盜難家畜の收受に關するもの、五徳三脚の什具、索條、竊盜犯に屬する肉鍋の索等に關するもの（盜人財産—所

有物」例へば、馬、網、動物をゆはへるに必要な物等は、凡て彼自身の所有物「財産」として考へられ、取り去られないものであつた。竊盜犯を養ふ事に關する條項（竊盜犯を養ふ事は悲難すべき行爲であるとは考へられなかつた）。自力にて竊盜犯人より家畜奪還をなした者が、收受せねばならぬ領け前に關するもの。盗人に關係あるサイタスに宣誓をなさしめるに關するもの。搜索又は宣誓の間にゲエソイ（健康）を害した場合に關するもの（蒙古人にとつても、健康は損じるべからざるものと考へられてゐた）。双物一般に關する條項（双物の評價）婦女子が彼女達の教師に對して加へる行爲又は言葉による侮辱に關するもの、毛皮、金、銀及び其他の財産、竊盜に關するもの。傷を受けたる馬の出血、馬の耳を損傷せしめる事馬の尾を切る事、及び其他に關する條項。エグウルチンス（馬の宮廷御用商人）ホバラスクの僧院の爲めの家畜糞及び燃料に關するもの及び一般に人々を服役の爲め使用する事（従者として）。人を連れて行く事に關する條項。種々なる事物の竊盜に關する條項。

第五條 強制義務及び力に訴へた獲得に關するもの。乗馬又は荷馬として、他の動物の使用に關するもの。盗人を發見し、之を告發するか又は其事實を隠蔽する場合に關するもの（蒙古人は隣人より隣人へとニュースを傳言する習慣を持つてゐるからして、此場合に於ても亦同様にそれが爲されるに相違ないのである）。親切なる勤務に對する報酬に關するもの（サイクヘエクシン及びシアネー）捕縛された竊盜犯人に關するもの。竊盜難にあつた被害者を助けんとして犯したる過失に關するもの。スツソバード（足跡）が小屋又は定住人の家に嚮導されてゐる場合に關する搜索に際して、何等の證據も得られない場合に關するもの。ホトンが證據を持てる者の引渡を拒絶する場合に關するもの。證人となるを拒否する場合に關するもの（斯る拒否は罰金として腿の肉を切り取られる）

食料獲得の競争に關するもの。第三者の所有物が（或る者の家で？）發見されたる場合に關するもの。ウタチン及びウルガチンに關するもの（盜難物を隠匿する者及び竊盜犯に關するもの）。竊盜犯を隠蔽する者に關するもの。家畜のバア（罰金の一種）に關する。竊盜犯の足跡が人煙稀な場所を得られたる場合に關するもの。盜難に罹つた動物の部分的に食はれた殘體の一部は、調査の爲め、其筋に與へるべき事を決する總ての種類の宣誓に關するもの。エルチイが手當の領け前を受取り、家に持ち歸へる場合に關するもの。竊盜犯の足跡が第三者の家に導かれて居る場合に關するもの。汗又は一般人が竊盜犯を發見したる場合に關するもの。夫が妻を又は他人の娘を連れ出し、ゲンスの家に逃げ込む場合に關するもの（連れ出した男は馬八頭、有角家畜七頭、羊四頭を規則通り支拂ふのである。即ちカリムを）。迷へる牝羊に關するもの（其處に取殘されて氣荒になつた牝羊）。結婚に際して與へられた家畜の増加に關するもの。許嫁の死に關するもの。旅行者が迷へる動物を捕獲した場合に關するもの（其捕獲者は牡馬の頭の毛か尾の毛か（又は鬚毛を其捕獲場所に埋め、記憶をよみがへらす材料となすべしと教へられてゐる）。爭論に於て味方となる事に關するもの。發狂者に關するもの（犯罪に對する罰及び其の監視の程度に關するもの）。男同志が喧嘩をして相互に殴り合ふ場合に關するもの。旅行者に關するもの（旅行者は二十四時以上を要する如き遠隔地に行かんとする時は、（關係なき）サイタスに其旨報告せねばならなかつた）。訪問にやつて來た親戚の歸國に關するもの（親切なる人は、客人が道に迷はぬ様にせん爲めに、出發に關して報告せねばならなかつた。訪問より歸國した者は、自己の帳幕に行く前に、先づ隣人に立寄り自己の無事なる事を示さねばならない）。雨及び暴風雪の爲め「あてなく歩く」家畜に關するもの。ウブラウクハイースダレスに關するもの（狼に咬殺された動物の殘

骸に關するもの。

五八

第六條 夜をしのご爲めにやつて來た者を、汗又は一般人が逐ひ返へす場合に關するもの（彼は逐ひ返へされて凍死する）。迷へる家畜を捕獲した者が、その特長即ち色又は年齢につきて落度ある申立をなしたる場合に關するもの。隔離せねばならぬ病人に關するもの。他人の遺失物を發見したる場合に關するもの（發見された物の三分の一は、發見者に與へられねばならなかつた）。灌漑の爲めの濠、井戸の水又はウツグに關するもの（井戸水を害する者は何人と言へども、若き馬又は牝牛を罰金として科せられ、ウツグ（牧場）の権利は帳幕が立てられた其時より始まる。若し同時に帳幕を建てる二人が、其の權利、牧場に關して争ひを起すならば、最初に空中に矢を放つた者か、又は其争ひの土地に鞭を以つて線を畫いたものが、其の權利者となつた）。モルモットが穴より消え失せ、依然捕獲せられない場合に關するもの。議論沸騰の際、頭飾又はダンガア（護符として用ひ古された輪）が引きもがれた場合に關するもの。尙ほ目次の中には、殺す事を禁じられてゐる動物に關する條項が省略されてゐる。（例へば—健全なる馬、灰色の鷲、蛇、蛙、ヒトリガモ、野生山羊の牝、マール猿、犬等である）目次の中の次の條項は、債權の任意回収に關するものである。それに續く條項は、懷妊せる婦人を毆打した爲めに惹起された流産に關するものである。ツセメール及びエルチイの手當に關するもの。父母又は教師に對して加へた侮辱に關するもの。租稅徵收に行つたエルチイ及びウラチンの不穩當なる行爲及び不必要なる物を提供された行爲に關するもの。（重要ならざる）三つの使に派遣された使者に對し、馬車の提供を中止する場合に關するもの。エルチイの徵收したる租稅の取扱方法に關するもの。（保護を享受したる）三旗のカアプテエグウルにより犯された罪に關するもの。

の。支那商人又はロシア商人より、信用借にて商品を受取る事に關するもの（此條項は次の如きものである。「支那商人又はロシア商人より、信用ある商品を受取る者は、何人と言へどもそれに對する知識者及びノオエンの承諾を得て受取らねばならぬ。若し代金を支拂ねば馬一頭の罰金を科し、更に支拂ひ義務ある金額の支拂ひを強制すべし」。長き旅行の途上、病める仲間を振り捨てる者よりヤール（罰金）を請求する事に關するもの。喇嘛僧の所有する動物を勞働の爲めに引受くる事に關するもの。又サイタス及びダルクハンの動物を自身の使用の爲めに引受くる事に關するもの。證人（立會人）に關するもの（親戚は證人となる事を禁じられてゐた。又これと同様の禁制は、法律上の訴訟に證人となつた事のある人及びそれを拒絶されて居る證人の親戚縁者にも適用され、同一商業を營んでゐる者、エルチイ、ウラチン（馭者及び非常な仲善の隣人も亦相互に證人となり得なかつた）。重罪犯を三旗より追放する方法に關する條項は、目次に明示されてゐないが、それは事實、該法典に存在してゐないからである。

第六條 一般蒙古人の子供を殺す場合に關する條項で終つてゐる。

第七條 汗の恩典、一般人の奉納に關するもの。ステツブ及び住居に於ける火災に關するもの（蒙古人は或る場所を去るにあつて、爐の火をすべて消すべき義務がある。出發前三日以内に火を消さねばならない。而してそれに就いての凡ての責任を負せられてゐるのである）。誣告其他に關するもの。或る者が故意にエルチイより避けるか、又は家畜を隠匿する場合に關するもの。エルチイが乗つてゐた馬を賣る場合に關するもの（それは竊盜と見做された）。證書、印形に關するもの。父と言へども自己の息子の生命を絶つ自由を有しないと云ふリストートメン

五九

ト。ノオエン、及びサイタスの判決例により決まつた法律の改正に關するもの（「三旗に於てノオエンの地位を以前に享受したる者は、何人たりとも、將來に於て其の地位を家族と共に享受すべし」）或る者が罵言を以つてノオエン、サイタスを侮辱し又は汗の面前で誣告する場合に關するもの（言語による侮辱は三種に區別されてゐた）。一般人の争ひに關するもの。（家族の一員として）家族となつた犂の行爲に關するもの。買得物に對する報酬、代償又は双物購入の怠慢に對する内済金に關するもの（毎年、スムン「騎兵中隊」は十甲冑を購入せねばならなかつた。若し此種の甲冑が購入せられない時には、ダンチイクは各不足甲冑に對し、馬一頭の罰金を科せられるのであつた。又甲冑を一定數以上に所有する者は、賞典を與へられてゐたのである。それはヒダアランより年老いたる馬一頭であつた。凡てのノオエン、台吉、富める貴族等は、此の法律發布後三年以内に軍裝を獲得すべく命じられ、之に失敗したるものは罰金を科せられた。而して之等の罰金として購はれた武器は、貧者に頒ち與へられたのである）。

此の節は、競技及び一定の賞品に關する長い條項で終つてゐる（之は賞品を獲得するに就いての諸條件、競走馬の選擇、其の評價、又騎主が見ねばならぬ諸状態等々を定めた比較的廣範な規則であつた）。

以上を以つて、該法規は終つてゐるが、然し之の研究であるジャムトサラノーとツルノツフの兩氏は、尙ほ一連の條項を次に述べてゐる。それは第八節として關係づけて述べてはゐるけれど、實際には其の起草を一七一八年に明らかに關係づけねばならないのであつて、それは散漫した文書であつた。先づ慣例として、法律條項を述べる前に起草時日を記し、次いで起草員の名が記されてある。「大年最多月の第一日、カーガン、サンツアソウバア、バイレイ及時日を記し、次いで起草員の名が記されてある。」「大年最多月の第一日、カーガン、サンツアソウバア、バイレイ及

び其他のサイタスは、軍備、馬匹の登録及び兵士に關する（問題）の討論終りしが故に、之が法規を起草せり」と。尙ほ目次に依れば次の如き條項がある。「種類の如何を問はず、凡ての双物は勿論登録された駱駝及び馬の使用、賣買を禁ず」。（此處に登録されたとは、軍事上の使用物として保存されてゐる事を意味する）。兵役に服する男子の數を秘する罪に科する罰金に關する條項（犯罪者は馬八頭、駱駝一頭の罰金に科せられる此事實を立證する者には、其報酬として馬三頭、駱駝一頭が與へられる）。

長期間の賜暇休暇中のクーク（兵士）の旅行に關する條項（凡ての男子は六十才に至るまで、兵役に服する義務ありと考へられ、何人と言へども自分の宿舍より、二十日間の旅を必要とする遠き地點に行かんとするものは、先づサンドツオブに其旨を報告せねばならなかつた—サンドツオブは布克圖格根の中央政府の長である。若し近距離の處であれば、ダルガ又はテムチ又は旅行者が所屬する十家の什長に、其旨通告するだけで充分であつた。（全族はこれを十區に分け、各頭に什長を置いた）。アルキイに關するもの。登録され得た畜群の馬數に關するもの。登録されな他のものは乗る爲めに、或は荷物運搬の爲めに殘されてあつた（登録された男子は兵役の爲めに保留されてゐた。三頭又は四頭の駱駝の中一頭を登録せねばならなかつた。若し、それ以上駱駝が居るならば、五頭の中一頭は登録された。馬は十頭の中一頭は登録された。登録された馬又は駱駝は、三つの重要な場合換言すれば國家重大事に就き列擧された特別の場合を除いては、夫等の使用は何人も出来なかつた。登録された動物を不法に使用する者は、舊法規に従ひ處分を受けねばならなかつた。貧者はキャンブを移轉する時には、登録された動物の使用は可能であつたが然し此の權利を濫用して、動物を疲勞せしめる事は許されなかつた）。

エルチイに關するもの。ロシア人、支那人の駱駝賃賃の禁止に關するもの（「人民は一般にロシア人、支那人への馬の賃賃は禁ぜらる。若し賃賃物すれば賃賃利は沒收さる」）。各人の義務たるルルボーク（胸甲）及び刀の購買に關するもの（「鼠年（一七二〇）の白月に先立ち、各人は輕き胸甲及び刀を自ら備ふべし」）。法規記載の地方及びキャンブ地方に於て、動物を殺す事を禁ずる條項（「セレンガル、トルビ、ナムドバ、ナリン、オークハン、キャンダガートン、ヒール、シエフンチン、サンチュツク、ダバ、ソールルより北セレンガ河に至る。此の範圍に於ては動物を殺べからず。何人を問はず、殺せる者は舊法律に従ひ處罰さるべし」）。キャンブ地の境界よりニコラタガンスの間隔より近き地點に存する「生ける」（成長しつゝある）樹木伐採禁止に關する條項。此の節は雄辯なる佛教徒の祈禱を以つて終り、而して銘字は次の如くである「アチラン汗、トシエツ汗の五代の子孫、布克圖は上帝（？）の年アバザイ月の十八日に書終へり」

此の法規の終には、法律上の保護を與へられむた僧侶の内的生活を律する一連の條項よりなる長い附録があり、之の終り部分は目次の中に記載して居らない。該法律も亦通例として、嚴肅なる言葉を以つて「宗教家の教義」を稱揚し、「吾々は宗教家を尊崇す」と言ふ言葉で終つて居る。「崇高なる胡圖克圖の面前にて、敬すべきオチール、トシエツ、セイシ、カガン、ダライセツセン、ハガン及びトール河附近の大小の（召集されし）ノオエン及び同河の流域に住するサガン・バルン等は（一七三六？）恐るべき龍の年、最後の秋月二十五日、之等僧院に關する法規を起草せり。」（ヘレツセグー同意せり）。此新規に起草された條項には、次の如きものを取扱つてゐる。

僧院の所屬たる畜群の竊盜、煉瓦、薪炭、石炭、枯草及び僧院家族の爲め必要な之と類似の物を燃焼する

べく貯藏されし石炭の竊盜（斯る竊盜は牲畜九頭五回の罰金に處せられる）。僧院に居住するホバアラスク、僧院の賓客、及び其の勞働者等よりの竊盜に關する事を取扱ひ、竊盜犯の罰金を取扱つてある。（若し、竊盜犯の所有する財産が充分罰金を支拂ひ得ない場合は、主なる竊盜犯の子供は、捕へられ僧院に渡されるのであつた。若し之が出来ない時は、旗のノオエンは竊盜犯人に代はつて馬三頭を支拂はねばならなかつた）。竊盜犯の判決に其證人となつた者に與へられる報酬。僧院に屬する汗部（盟）の人々が、他の汗部の人より竊盜を働く事。竊盜犯人の告發、竊盜犯人追求の拒否に對する責任（貴族—成吉思汗の子孫は、他の者よりも輕い責任を負はされてゐた）。家畜群を驅逐した犯人が引渡されない時、その追求に参加せし旗間の争ひ。僧院への攻撃（それがノオエンの過失であれば彼は追放され、一般人なる時は死刑に處せられ其上財産は沒收される。攻撃をなした人の爲めの調停者は又罰せられた）。キクタ（僧院）の賓客に荷馬車の強制的提供を免除する事（三つの「重大事」の場合を除き）。大家畜群の牧者、シャビナル及びホバアラスクの見張人に對してカフチエグルス所有の禁止（ダルガは牲畜五頭の罰金、カフチエグルスを收受したるものは五牲畜、ガフチエグル自身は六牲畜の罰金に處せられる）。遊牧サビナルの地所及び僧院の見張人、竊盜犯追跡に出た人々の旅行先での死。馬の死。ホバラスク、シアビナルに對し保證人となり得る人、僧院使役人の保證人となり得る人、等々の事柄を取扱つてゐる。最後に該法規は、今一つ異なつた筆法で書き加へられてゐる一條項がある。それは刑罰に對する代償を婦人には許容すと言ふのである。即ちニヶ月の過激勞働を宣告された人に對してはニチャイ、二フン及五りの罰金。山東へ流刑罰を受けた人に對しては五チャイ、五フン。百回の答刑を宣告された人は七フン五り。八十回の答刑を宣告された人は六フン。及び四十回の答刑を宣告された人は三フン

の罰金を以つて代償する事が出来た。

慣習法に就いての上記の記録は、非常に重大なものである。之れ迄での蒙古人の法律概念は、二つの基礎的起源即ち一は成吉思汗の法典「ヤツサ」、他は一六四〇年のオイラト法規の二つより構成されてゐたのである。喀爾喀チロムは、同種類に属する蒙古慣習法の第三の大記録なのである。成吉思汗の法典は、之以上に吾々には傳へられて居らない。オイラト法規は兎角主として蒙古部族間の諸關係の整合を目的としたものであつたに反し喀爾喀チロムは、全く之等部族の内的諸關係の整合に努力したものであつた。オイラト法規は就中西蒙古人の法であるが、一方喀爾喀チロムは北蒙古の法であつたのだ。成吉思汗のヤツサのみならず、オイラト法規も遂に其勢力、其の重要性を失つて以來幾尾霜を経て居るに拘らず、他方喀爾喀チロムは、今日に至るも依然として、法律上の効力はシャビン部（シャビナールは貢納國を意味する）―庫倫の布克圖格根、胡圖克圖の支配下にあり―の役所に於て發揮されて居る。

此事實は該法の諸條項に特殊の重要性を添へて居り、又吾々をして二十世紀初頭の蒙古人が懐く法的概念の判斷をなさしめてゐるのである。（註）遺憾な事には、此の文書の本は未だに努力報られずして吾々の手に入らない。従つて上記に展開した報告のみしか、此處には記載されないものであるが、吾々は近き將來、此本を手に入れ度いと思つてゐる。チャムトサラノールとツルノツフの兩氏は吾々の研究しつゝある時代に就いて、次の如き記録を

述べてゐる。

註 イルクーツク大學定期刊行第一巻中のチャムトサラノールとツルノツフ兩氏の論文第二、三頁。

ウラーン―カタルトオ「赤き包を着る本」―喀爾喀チロム法典によれば裁判判決の四冊。

メンテル―フレンバア「赤き眞珠の頸飾」―テエツウ―カンドルヂイに對する立法原則に關する教へ（十六世紀末より十七世紀の初頭まで）。

法話集―庫倫の哲布尊丹巴呼土克圖の法話集であつて、前記と同一性質を帯びてゐる。

九、蒙古に對する支那の立法府

十七世紀の末北蒙古―喀爾喀は、全く支那に服屬してしまつたが。然し支那皇帝は其初めに當つて、喀爾喀部族に壓迫を加へ、彼等の生活、國內行政に對し、ひどく干涉の手を差し延べはしなかつたのであつて、漸やく干涉壓迫を加へるに至つたのは、西蒙古人、好戰的オイラトが征服されて以後の事である。然しながら、十七世紀の中葉に於て、かゝる運命は又チャングリアにも蔽ひかぶさつて來た。（註）

註 イオアキンフ著「オイラト又はカルマツク人の研究」第百一一五―一五六頁。チエンルン軍は男女老若を問はず凡そ百萬人の人々を殺害した。

之より後、支那は被征服地方及びチャングリアの征服者等の爲に痛く煩らされるやうになつた。故に乾隆皇帝は「理藩院の法規」と稱する蒙古に對する法規を發布し（一七八九年）、之に依り蒙古及び後に至つてはチャングリアは從

屬せしめられた。之等の法規は後年修正をほどこされ、再び（一七一五年）發布され、其の効力はヂャンガリアにまで擴げられたものである。

註 イオアキンフ著同書一三七—一三八頁参照。

十、理藩院 第一法規（註）

註 原文は *The Regulations of the Chinese Board of Foreign Affairs* となり居り、直譯するときには「支那外交廳の法規」と相成るも當時蒙古は藩部として隸屬し居たるものなれば理藩院を以て翻譯せり—譯者—之等の法が、一七八九年（註）に發布されたものである事は明らかだ。

註 リボットセツフ氏著「支那外交廳法規」参照。レオントヴィツチ氏はチウムフスキ氏の説に傾むき、該法規の起源を喀爾喀の征服された時（十七世紀末）であると述べ、尙ほ彼は其の補足及び第二法規に就き、記載してゐる。之は該法規の修正に關する報告の中で、シンフイ大臣が述べてゐる時日（一七八九年）を否認するものである。修正に關するに報告に就いては、上掲リボットセツフ著第十二頁に記載してゐる。

之はエフ・イオアキンフ氏がロシア語に翻譯し、彼の著書（一八二八年出版）「蒙古の記録」第四卷に記載した。該蒙古法規は蒙古の慣習に従つて起草し、それに若干の補足的條項があるが、之は兩國の諸關係整合の目的の爲めに、支那政府が附加したものである。何れにしても、多くは地方的蒙古人の特質を保持して居つた。

法規の内容。エフ、イオアキンフ氏のロシア語譯には、此の法規の内容は十二卷二百十箇條となつてゐる。第一卷は榮號に關するもの二十四條。第二卷は校閱及び義務に關するもの二十三條。第三卷は宮廷への訪問、貢税支拂に關す

るもの八又は九條。第四卷は會議召集、出征に關するもの十三條。第五卷は國境及び軍隊所在地に關するもの十七條。第六卷は強盜、竊盜に關するもの、三十五條。第七卷は殺人に關するもの十條。第八卷は出訴に關するもの五條。第九卷は賞罰に關するもの二十條。第十卷は種々なる犯罪に關するもの十八條。第十一卷は喇嘛教に關するもの六條。第十二卷は調査終了の訴訟判決に關するもの九條（註）

註 イオアキンフ氏は二百十條に引用し、第二百十一條としてゐるが、他の凡ての著書には唯二〇九條と明示されてゐるだけである。従つて彼のは誤りである。支那の書物目錄の原則として、第何箇條とは數へられてゐない様だ。

十一、理藩院の第二法規

第一回法規は、十七世紀前半の舊蒙古法典及び漸次變化し行く遊牧民の習慣に多分の基礎を置いたものであつた。従つて當然之は蒙古人よりは、かなり進歩的な支那人の要求を満足せしめる事は出来なかつた。而して彼等支那人は、支那宮廷の行政の一般問題と同等に見て居つたものは極僅かしかなかつた。其處で、早くも一八一一年に支那外交廳長及びシンフ大臣は、蒙古法規に關する報告を皇帝チイヤシンに上達したのであつた。此の報告の中でシンフは他の事柄を含めて次の如くに書いて居る。

「蒙古の自治組織及び刑事裁判に關しては、該廳は二〇九條よりなる現行法規にならつて居る。之等法規は滿洲語、蒙古語及び支那語を以つて書かれ、今より二十餘年以前（一七八九）アフカイ、ヴオセツへの五十四年に起

草されたものである。而も此間、蒙古人間に非常に多數の刑事犯罪が起り、それに對しては、該法規の如何なる條項に該當さすも無効力であつたが爲め、其の都度、皇帝の判決を得るべく上達せねばならなかつた。従つてそれが故に、法律執行上の多くの報告が傳達され、それと同時に同數の判決令が發せられねばならなかつた。然しながら之等の判決令は、一般法規の中に包含されなかつた故に、依然發布されず其儘になつてゐた状態である。シフはそれが故に「法律効力を尙ほ有して居る判決令及び命令を、前記の時代の三十四年より蒐集し、之を増補條項として法規中に含める爲め」其許可を願ひ出たのであつた。許可は與へられ、起草委員は指名され、完成期まで三ヶ年の期間を與へられた。然し法規を研究するに及んで、委員は自己の目的と相一致しない事を知り、更に今年一の延期を請ひ新法規の起草に努力して行つた。かくして委員の起草完成後、理藩院の長は其報告の中で次の如く言つてゐる。

「舊法規の各條項を研究し終へた時、其の中二十條項は過去に於ては法律効力を有して居つたけれども、現在では効力なく、故に今般の草案より削除した。今日尙ほ依然と存する百八十九條の中、百七十八條項は全く修正をほどこさねばならなかつた。そこで之等を適當に訂正し、舊條項の順序に従ひ之を配置したる後、更に進んで該廳の過去の訴訟記録を、チンクンダーアサンの時代より今年に至る迄の研究をなし終へた（斯くて最初のアバルツウーハン統治時代は、一六四四年より一六六二年までであつたと稱せられたのだ）。新法規の中に包含すべく採擇したものを、よりよく判断せんとの意向よりして、滿洲語を支那語に翻譯し、研究資料の中より五百二十六條項を起草した云々。」

以上に依つて知る如く、新法規は舊法規の單なる完成したる補足的なものとしてでなく、新規の而も舊法規とは別

個のものとして、考へるのがより正鵠を得たものなのだ。滿洲語で誌されてる原型は、章節に分割されて居らず且目次もなく、又第何條と區別もなされてゐない。法規自身は六十七に分割した本より成り、全く獨立したものであつて、相互に何等の關係もないのである。翻譯者リボツトセフ氏は法規の條項を組織的に整理し、章節に分け、更に番號を附した。

新法規の内容は（一八二八年リボツトセフ氏の出版書の如く）序文（理藩院の）及び六卷より成り、各卷は章に別かれ、章は節又は條項に別けられてゐる。

序文—理藩院の組織—六章五十六條を含む。

第一章—該廳の幹部及び官吏の義務。第二章—部の責任職務。第三章—地區官吏の義務。第四章—理藩院に關する一般規則。第五章—職能の一次的練習としての該廳官吏の敏速なる事務處理に關するもの。第六章—理藩院に所屬する學校、教員に關するもの。

第一卷—民法—二十一章、四九四條項（概して言へば、蒙古の行政組織と制度）。

第一章—内外札薩克又は軍司令官に蒙古を全般的に分割することに關し。第二章—蒙古王公、台吉、タフナウス及び其の他の官吏に與へられてゐる權利及び特權に關し。第三章—世襲的稱號。第四章—關外の若干官吏の義務第五章—蒙古及び支那關外地方の人物推薦。第六章—空席官吏の任命。第七章—賞罰。第八章—關外の人口統計。第九章—耕作田野。第十章—納屋（穀倉）の設置。第十一章—義務及び租稅。第十二章—銀及び絹布による給與。第十三章—臨時手當、米、其他。第十四章—官廷への交代伺候。第十五章—申出られた贈與に關

するもの。第十六章—贈與及び待遇に關し。第十七章—蒙古に於けるクアンチーの旅行中の訓令及び行動。第十八章—儀式に關する補助的規則。第十九章—蒙古に於ける官吏に對する政府印形の分類。第二十章—結婚。第二十一章—政府の榮譽及び特典。

第二卷—軍律—六章、八十八條項。

第一章—遠征に關する一般的規則。第二章—軍隊行進。第三章—軍備。第四章—軍事會議。第五章—軍隊駐在地行政。第六章—戰前に於ける豫備的手段。

第三卷—刑法—二十章、百九十一條項。

第一章—殺人、傷害。第二章—劫掠及び掠奪。第三章—竊盜。第四章—棺の冒瀆。第五章—不義。第六章—自由民の人身賣買禁止。第七章—誣告、出訴及び上訴。第八章—判決及び刑罰の宣告。第九章—罰金。第十章—或る事件に於ける宣誓の承認。第十一章—毆打犯人に對する毆打刑。第十二章—逃亡者逮捕。第十三章—投獄。第十四章—流刑。第十五章—善き事由に基く死刑及び流刑よりの釋放。第十六章—贖償。第十七章—大赦を利用すべく權利づけられたる犯人。第十八章—財産差押。第十九章—犯人拘引の一定時。第二十章—小犯罪に關する補足的條項。

第四卷—喇嘛教僧侶に關する法—十一章、百十七條項。

第一章—給與を受くる僧侶職員。第二章—宮廷に關する喇嘛僧の義務。第三章—西藏及び其他の地より來る使節の旅行。第四章—宮廷に於ける庫倫高僧に對し示された特別の考慮。第五章—フビルガン又は呼土克圖の如

き有名な最高僧の精神的權力の體現化。第六章—喇嘛僧の昇進。第七章—喇嘛僧の行爲の統制。第八章—出生により滿洲より來たる喇嘛僧のこと。第九章—喇嘛僧に關する全般的規則。第十章—喇嘛僧の給料。第十一章—喇嘛僧に充當された銀及び米による給料豫定表。

第五卷—西藏に關する法—十三章、六十六條項。

第一章—西藏行政は二人の滿洲アンバンにより指導する事。第二章—西藏よりの收入處理法。第三章—外國宮廷及其人民とパンチエン・エルデニとの諸關係及び達賴喇嘛との諸關係。第四章—西藏の官吏。第五章—アンバンの勢力。第六章—西藏の司法組織に及ぼすアンバンの統制。第七章—強制労働の事實上の惡弊禁止。第八章—西藏の名簿に記載のある文官、武官。第九章—西藏の武官、文官の轉任。第十章—西藏の最近の武官。第十一章—部隊と共に西藏に駐屯せる武官。第十二章—タングート貴族ダンコール及び彼等が文官又は武官となる事に關する條項。第十三章—土著タングート軍隊。

第六卷—ロシアとの關係—六章、二十八條項。

第一章—平和條約、支那の國境に於ける相互通商條約。第二章—キャフタの官吏相互の贈與。第三章—地區長、國境警備の官吏、兵士に課する賞罰。第四章—國境事務。第五章通商の目的でキャフタに行かんとする支那人。第六章—ロシア人。(註)以上に關する事柄を取つてゐる。

註—第六章は五句(第二十四條より第二十八條まで)を含む。此の條項によると、第二十四條は國境を越えたる露國人は捕縛す、而して引渡すべし。第二十五條はフンチは蒙古人より盜みたる馬と共に、捕縛されたる露國人

に就き報告すべし。第二十六條は露國人がアムール河方面の國境を越えて、黒貂の狩獵を禁ず。第二十七條は露國人はキヤフタに於てのみ通商をなし得。第二十八條はロシア上院よりの使者は理藩院に派遣す。

第三章 慣習法の條項

第一款 成吉思汗及び其の繼承者時代の一般法

一、 第一項 成吉思汗の大法典及び教訓

吾々に傳へられて居る諸斷片は左記の如きものである。

マクリツチ氏より

- 一、如何なる事情にも拘らず、既婚者又は未婚者の姦通は死刑に處す。
- 二、鶏姦を犯す者は何人を問はず死刑に處す。
- 三、故意に嘘偽を語り、又は妖術を行ひ、又は他人の行爲に就き探偵し、又は喧嘩當事者間に介在してその中の一人を助くる者は、何人を問はず同様死刑に處す。
- 四、水又は灰に放尿する者は何人を問はず死刑に處す。

五、何人を問はず、(信用借にて) 商品を受取り支拂不能に陥り、更に商品を受取り支拂ひ不能に陥り、然る後、更に商品を受取り支拂不能に陥る者は、三回以後は死刑に處す。

六、何人を問はず、獲得者の許可なく、俘虜に食糧又は衣服を給す者は死刑に處す。

七、何人を問はず、逃亡奴隸又は俘虜を發見し、それを所屬者に返還せざる者は死刑に處す。

八、動物の肉を食せんとせば、先づ其の四肢を縛したる後、下腹を刺き、動物の死する迄で心臓を緊握せざる可らず。然る後に食すべし。何人も回回教徒の如く動物を屠殺する者は殺さるべし。

九、戦闘に於て、攻撃中又は退却中、包荷、矢、重荷を落すならば、其の後の者は馬より降りて其を拾ひ、所有者に返還せざる可からず。若し馬より降りず、それを返還せざる者は死刑に處す。

十、成吉思汗はアリーベク、アブータアレエフの子孫又は托鉢僧、アルーコーランの指導者、法律家、醫師、教育家、祈禱又は苦行者及び死體洗淨者に對し、許可なくして如何なる税、如何なる義務をも課すを得ずと命じた。

十一、あらゆる宗教を尊崇し、如何なる宗教に對しても等差をつけれる勿かれと命じ、宗教を手段として神と同様になれと彼は命じてゐる。

十二、彼は、他人によりて提供された料理は、主人公が食する以前に客が食すを禁じて居る。よしんば王公仲間であらうと、俘虜仲間であらうとも。食事の席に招待せずして他人の面前で料理を食する事、同僚の食する以上に食する事等を禁じ、食物の料理される火の上、食皿の上に足を置く事を又禁じて居る。

十三、旅行者が食事中の人の前を通過する時は馬より降りて、許可を求めず進んで食事を共にせよ。何人も之に不服を

唱へるべからず。

七四

十四、彼は水中に手を差入れて水を掬ふ事を禁じ、何等かの容器の使用を命じて居る。

十五、衣服は着古るされるまで洗濯する勿かれと禁じて居る。

十六、物事の不明瞭なる事は、何事によらず語るを禁じ、又明瞭なる物事の虚言を禁じ、明瞭、不明瞭の區別をつけしめて居る。

十七、如何なる宗派も其の選擇を禁じ、強調せし發言、名譽ある稱號の使用等を禁じ、回々教國の君主又は外の誰と語る場合にも、簡單に自己の名を言ふべしと命じて居る。

十八、彼は子孫に對し軍隊の檢閲、遠征前の武器點檢等を命じ、キャンプに必要な凡ての物を軍隊に給し、凡ての物を、よしんば鉞糸と言へども檢査し、若し兵士にかゝる必要物が缺けて居るならば、其責任官吏を罰すべしと命じてゐる。

十九、軍隊に同行する婦人に對しては、男子が戦闘に行き留守中は、男子に代り仕事、義務等を爲すべしと命じて居る。

二十、回々教國の君主の爲めに若干の仕事を爲すべき軍隊を、戰場より歸還さす事を命じてゐる。

廿一、毎年、年始めに、人民の凡ての娘をサルタンの許に伺候せしめ、サルタンは其中より若干を自己の爲め及び子供の爲めに選出する事を得さしめて居る。

廿二、彼はエミールを軍隊の長に置き、何千何百何十人のエミールを任命してゐる。

廿三、エミールの最年長者が罪を犯すならば、其者を罰すべく、主權者よりつかはされた使者の前に出て告白すべし。

よしんば最下級の従僕であつても、告白し而してよし死刑に處せらるるとも、刑罰執行まで使者に平伏すべしと定めて居る。

廿四、彼はエミールが主權者以外の誰れかに出願するを禁じ、主權者以外の誰れかに願ひ出る者は、何人を問はず死刑に處し、許可なくして任地の變更をなす者は、同様死刑に處してゐた。

廿五、彼は、國內の凡ての事件が適當なる時に報告せらるる様にと、確固たる郵便通信の樹立をサルタンに命じてゐる。

廿六、彼は自分の子チヤガタイ・イビンに成吉思汗の「大ヤツサ」の遵守せらるる様に監視せよと命じて居る。

ミルホンド氏より。

廿七、彼は狩獵に於て、棒切れを以つて動物を狩り立る最中に、動物を取逃す者に對しては其怠慢を罰し、此場合は死刑に處せと兵士に命じてゐる。

廿八、殺人の場合（殺人犯人に對する刑罰）に於て人は罰金を拂ひ、以つて身を贖償し得る。回々教徒に對しては—四十金貨、支那人に對しては驢一頭。

イビンバツタ氏より。

廿九、盜難に罹つた馬と共に犯人が発見されたる時には、犯人は同種の馬九頭を附加して所有主に返還すべし。若し罰金を支拂ひ得ぬ時は、自己の子供を渡すべし。子供なき場合は自らが羊の如く虐殺さるべし。

ヴァルタン氏より。

三十、成吉思汗の法典は虚言、竊盜、姦通を禁じ、隣人を愛し、罪を浸す勿れ、罪は忘れ去るべし。と言つて居る。又

七五

自發的に服従を申出る國及び都市には憫をかけ、神の從僕は勿論神に奉納せし寺院には税を免じ、而して敬へと命じてゐる。

マガキア氏より。

世、(法典は此の如き規則を定めてゐる)。人は相互に愛すべし。姦通する勿れ。竊む勿れ。嘘偽の證據を與へる勿れ。叛逆人となる勿れ。老人及び貧困を賤む勿れ。何人を問はず之等を犯す者は死刑に處すべし。

世、種々の出所より。

(成吉思汗法典は次の如きを定めてゐる)食ひ過ぎにより息づまつた者は、之をキャンプより追放し直ちに殺すべし。何人と言へども、軍隊の指揮官の帳幕の闕に足を載せる者は死刑に處すべし。

世、若し酒を廢すること能はずんば、一月に三回迄酒に酔ふは宜しかるべし。若し三回以上の飲酒をなす時は罰せらる。若し一月一回ならば、更に賞讃に値ひせん。全く飲酒せずんば、かく結構なる事はあるべきや、然しながら斯る人は何處かにあらん。若しかゝる人を見出し得ば最高の尊敬を拂ふ價値あり。

世、姜腹より生れし子は嫡子と見做され、父の配賦に従ひ相続財産の頒與を受く。相続財産の分配は年長者は年少者より多し。最年少者は父の家を相続す。年長者は其の母の身分に依存する。妻の一人は常に年長者のものである。それは結婚せし時日に従つて計算する。

世、父の死後其子は、自分を生める母を除き、其他の父の妻を處理す。即ち彼女と結婚するか他人に嫁がせるかする。

世、法定の相続人を除き、其他の者は何人も死せる人の財産の何物を問はず其使用は嚴禁さる。

一、成吉思汗の教訓

一、「寛大と嚴格とにより規則は鞏固にさる」。

二、「貴族、騎士及び朕の子孫の多くが此の法典を嚴に遵守せざれば、國はたちまち動搖を來たし崩壊するに至らん。其の時に至り再び成吉思汗を捜し求めるならん。然しながら何人といへども捜し出すことは不可能ならん」。

三、「年始、及び年末に朕が許に來たりて教令を聞き歸り行く將校は、何千何百と言ふ大多數(一萬戸の中)の軍隊をよく指揮し得るも、帳幕に坐し朕が教令を聞かざる者は、其地位は水中深く落ち行く石、又は葦の中に放たれたる矢の如き運命に過ぎざらん。―彼等は所在を失はん。斯る人物は士卒の指揮官たるに不適當なり」。

四、「己が家をよく治め得る者は何人も亦よく一國を治め得ん。十人の秩序を保ち得る者は何人も亦よく千人又は群集(一軍隊)を與へらるとも、よく其秩序を保ち得ん」。

五、「自己の家政を廓清し得る者は何人も亦よく一國より盜人を一掃し得ん」。

六、「十人の秩序を保ち得ぬ長は其の妻子と共に罰せん。更にその十人の中より之が長を選出し十人の長に任命せん百戸、千戸、一萬戸に對するも又同じ」。

七、「三人の有識者、等しく一致せし言葉は、如何なる場所にも語り得ん。然らざるものは保證し得ぬ。汝等の言葉及び他人の言葉を、有識者の言葉と比較して見よ。同一なるものは汝等よく語り得ん。然らざるものは決して語

る勿れ」。

七八

八、「如何なる年少者も年長者の許に行く時は、彼先づ語るに先立ち語る勿れ。彼語りてより間に應じて答へるべし。年少者語りて年長者の傾聴するは宜し。然らずんば冷たる鐵を打つ人の如し」。

九、「如何なる馬も肥えたる時によく走る馬は、又之より肥ゆるとも又瘠せるともよく走らん。然しながら之等の條件に缺る馬は、如何なる馬なりとも、よき馬とは言ひ得ざらん」。

十、「指揮官たる年長、尸長、及び戰士の凡てが、狩に於て自らの名を轟かす如くに、戰場に於ても亦よく名をとどろかす可し」。

十一、「人中にては小さく且つ小羊の如くあれ。然れども一度戰場に臨む時は、獵物を捜し求める鷹の如くにあれ。大呼して仕事に出掛けるべし」。

十二、「如何なる言葉も、若しそれ眞面目に語らんか、意義深かゝらん。然れども若しそれ不眞面目に語られんか、無意義なものとならん」。

十三、「自己をよく知る者は又よく他を知る」。

十四、「男子は太陽の到る處を照らすが如くなること能はず。故に人の妻たるものは、夫の出獵せるとき又は出征せるときは、よく家政を整へ、使者又は賓客のその家に入るものあらば、其の秩序正しきに見張り、且つ美酒佳肴を萬事具へて饗應を受けしめざる可からず。これ夫の榮譽とならん。その妻の行ひによりて、峰の高くそびゆる如くに會議に夫の名を高めるを得ん」。

十五、「執務にあたりては慎重であれ」。

十六、「出獵しては多くの山牡牛を殺し、出征しては多くの敵を殺せ。全能の神が吾等の道を平坦にし、吾等が仕事を易からしめば、人人はわれとわが身を忘れ且つ變化するに至らん」。

十七、「勇猛なることエスンバイの如き人物はなし。何人も彼の如き練達の士は居らざるべし。されど、彼は長途の遠征を試みるも、疲労を覺えず又飢渴をも感ぜざるが故に、彼は何人も彼と同じく困苦に耐へ得ると考へてゐる。しかし、何人もかくの如く強健なる人はなし。それ故彼は軍隊長たるに適せざるの理由なり。飢渴に耐へ得る者のみが隊長たる事が出来る。かゝる隊長は軍隊が飢渴に耐へ得ない事が解るし、軍馬が飢に耐へ得ない事を察する事が出来るから。此れは、旅行又は遠征に際して、人は最も弱きものなりと考へねばならない、との意味である」。

十八、「朕が國の緞子、衣服、其他よき商品の輸入商は、それ等商品の利を得るに敏なり。軍隊長も又よく之を見習ひよき射士、よき騎士となる如くに子供を教へ且つ勇猛、豪膽の士たる様戰爭技術を鍛錬せよ。商人が貿易に於いて經驗あるが如くに」。

十九、「朕が子孫は將來錦欄の袍を纏ひ、豊富なる美食佳肴を味はひ、駿馬に跨がり、腕に妙齡の婦人を擁するに至らん。しかれども、彼等が享有する所のすべてを、彼等が父兄弟に歸せず、又朕及び朕が偉大なる時代を忘却するに至らん」。

二十、「若し禁酒する能はずんば、一月に三回迄では酒に酔うも宜し。若し三回以上の飲酒をなす時は罰せらる。若し

七九

一月一回ならば更に賞讃に値ひせん。全く飲酒せずんば、かく結構なる事は他にあるべきや？。然しながら斯る人は何處にかある？若しかゝる人を見出し得ば、最高の尊教を拂ふ價值あり」。

世、世、……………

世、「朕が子孫若し此の法典を一度犯さば、口頭を以つて訓戒す可し。二度犯さば、入人に能辯を以つてふれ廻るべし。若しそれ二度犯さば、遠隔の地バルドジウニフルチュールに送らん。彼が其處より歸るとも、世の注意人物とならん。然れども若し彼がにの刑罰によりて蘇らざれば、鐵鎖を附せられ獄に投ず。正當によく獄より出て來たれば宜しきもこゝに於て親戚一同よく熟考し、彼の處置を考慮せよ」。

世、「一千人又は一百人の軍隊指揮者は布告、命令の何日來たるとも、よし夜間に來たるとも、遲滞なく馬に跨がり得る如く秩序を保持し、準備萬端整へ置くべし」。

世、世、世、……………

世、「……………反逆人を征服し、目ざす敵を打破り絶滅し、彼等が所有せる財室を奪ひ、彼等の從僕を泣き叫ばしめ、鼻と言はず顔一面を涕で潤ほさしめ、彼等が妻の腹を枕にし且つ寢床を備へしめ、美はしき薔薇にも似た頬を賞めたゝへ、口づけし、赤き唇に接吻するは、男子として人生最大の快樂なり」。

二、成吉思汗帝國時代の教訓

クユツク汗に就いて言へば、其の教訓は蒙古人の義務として「朕が意思を遂行するにあり、朕が召集に應じ、朕が

命する處に行く事にあり。朕が指名する者を死刑に處すにあり」と。

バツイの教訓は「何人を問はず、此の法典に違反する者は頭をはねらるべし」と。此の法典の簡單なる觀察をなすに於て、先づ其の專制的性質を記さねばならない。それは、汗に何等の拘束なき權力を附與し、條項の單純及び峻嚴を強固ならしめてゐるのだ。クユツク汗の要求即ち「朕が意思を遂行し、朕が召集に應じ、朕が命する處に行く事にあり、朕が指名する者を死刑に處すにあり」との彼の要求は、該法典により充分に正當づけられて居る。法典の第二十四の斷片は、汗以外の何人に對しても願ひ出る事を王公に禁じ、此の命令に服せざる者は死刑に處すとなつて居る。第二十五の斷片は王公の最高年者と言へども、若し汗により決せられた刑罰執行の爲め遣かはされた者であれば、其者が最下位の者であらうとも、其處置に不平なく服し、よしんば死刑であらうとも服すべしと命じて居る。第二十一の斷片は、汗自身の爲め又其子の爲めに若干の娘を選擇する爲めに、毎年全蒙古人に娘を汗の許に伺候せしめよと命じてゐるのである。全法典は、成吉思汗の教訓「寛仁と峻嚴とにより、政府の基礎は鞏固になる」と言ふ精神が至る所に滲透して居り、法典の違反者に對しては、凡ての蒙古人、汗、及び其近親には峻嚴なる刑罰を科したのであつた。(教訓二十三)。

今吾々が此處で考究しつゝある時代の人々、バーラー氏、カルビニ氏等は、一二四六年及びその後數年間蒙古旅行を行ひ、此問題に關し次の如く語つてゐる。

「之等タール人の皇帝は、其の統治下にある凡ゆるものに對し、實に驚嘆すべき勢力を握つて居つた。何人と云へども、該國の皇帝の許可なくんば、其の國に滞在する權利なきに等しく、皇帝自身は各將軍に向ひ、何處何處で汝等は生活すべしと命じ、各將軍は千人を指揮する者の任務を定め、各千人の指揮者は百人の指揮者の任務を、百人

の各指揮者は十人を指揮する者の任務を定めて居る。そのみならず、皇帝が何時、何處で、何事を命じ様とも、それが戦闘であらうと、又死であらうと、又生活に對するものであらうと、各人は如何なる反抗もせず、一皇帝に服従せねばならなかつたのである。之は、皇帝が婦女子を求めるときも亦同様だ。各人は、唯々諾々として彼女等を與へてゐるではないか。又そのみならず、毎年若くば數年を経て後、皇帝はタタールの凡ゆる地方より女子をかり集め、彼の欲するにまかせて若干の女子を其儘殘留せしめ、好むが儘に他の女子を僕にも與へてゐた。……要するに皇帝又は將軍は、凡てのものを好むが儘に、欲するにまかせ、人民の財産を取得してゐたのだ、又人民をも意の趣くにまかせて處理してゐたのだ。

刑法の條項即ち峻嚴なる刑罰の條項は、吾々に傳へられてゐる所の「ヤツサ」の斷片の大部分を構成してゐる。三十の斷片の中十三は、一連の犯罪に死刑を科してゐる（斷片、一一九、二十七、二十九、三十一、三十二（二回））。死刑は姦通、鷄姦、故意による嘘偽、妖術、問喋、喧嘩當事者の一方への援助、水中又は灰への放尿、三回支拂不能、濃厚なる俘虜に許可なく（衣服又は食料）の給付に對し、逃亡奴隸又は俘虜を所有者に返還せざる場合、法定の方法によらず回々教徒式に動物を殺害する場合、戦闘に於て補助を與へざる場合、エミール（王公）が主權者の下に出願せざる場合、許可なく自己の任地を變更する場合、兵士及び獵人の怠慢、盜難馬が發見され其の罰金支拂の爲めの財産なく又それに代はる子供なき場合、竊盜、嘘偽の證據、反逆者、年長者及び貧困者への賤視、貪食家、軍隊隊長の帳幕の闕に足を置く場合、等々に科して居る。之れ等の犯罪のあるものは、非常に特長を有するものであつて、當時の人民の生活様式を如實に表示して居る。姦通に對する死刑は、蒙古民族の操行の清淨さを物語るものであり、それに對

し歴史家は確かなる證據を與へて居る。故意の嘘偽、嘘偽の證言、竊盜、貪食家、尊敬心なき者等に對する死刑は、當時の生活様式の程度と單純さを表示し、水中又は灰への放尿に對する死刑は、宗教的迷信、薩滿教より來て居るのであり、回々教式に動物を殺害するに科する死刑は、宗教的寛恕と並んで存する或る宗教的幻想及び迷信より來て居ることを、明かに表示してゐるものである。

三、プラノー・カルピニ及びローブルツクの蒙古人の迷信に關する報告

「蒙古人は正しき行爲に對する法律、或る罪惡に對する警告を持つてゐない。けれどもそれにも拘らず、彼等は彼等自らの創造又は祖先の創造にかゝる罪惡と言はれるものに就き、或る傳説を有つてゐる。斯る罪惡となつてゐるものを擧げて見よう。火中にナイフを突込む事、又は火にナイフを觸れしめる事、又ナイフを用ひて鍋より肉を取出す事、又は火の近くで木を伐る事、之等凡ては罪惡となる。何となれば、之等は火の頭を切り落すものだと彼等は考へてゐるからである。又馬を鞭打つ鞭に凭れても（彼等は拍車を持つてゐなかつた）鞭を矢に觸れても、一つの骨を以つて他の骨を碎いても、牛乳をこぼし又は他の飲物、食物を地上に落しても、帳幕内で放尿しても、同様凡てが罪惡であるとして考へられてゐた。故意に斯ることをなす者は何人を問はず殺害されるか又は多額の金を魔術家に支拂つて自分を淨め、又帳幕を淨めねばならない。斯く帳幕が淨められない限りは、何人も敢へて帳幕の中に入らうとはしないし、又中より何物をも持ち出そうとはしない。更に又彼等は食物の一片を口中に入れて、それを嚙み下し得ず其儘吐出すと、其者は帳幕の下につくられた穴口より外部に引すり出され、慘殺されるのである。又軍隊長の家の闕に足を置

く者も亦同様に參慘に殺害された。彼等は斯うした多くの習慣を有つて居るのであるが、今此處では語り切れない。

註 プラノー・カルピニ氏著「蒙古人の歴史」マレーン氏譯一九一一年、九一—一〇頁。

彼等は、自分の衣服を決して洗濯しやうとはしない。洗濯すれば神がお怒りになり、若し衣服を何か物に掛けて乾かすと、雷が鳴り出すであらう等と言ひ、又そのみならず、彼等は衣服の洗濯をなす奴は殴り、其衣服を剥ぎ取つたりするのである。

註 ローブルツク氏著書「東洋諸國の旅行」七八頁。

死刑は極めて廣範圍に亘つて科せられて居るが、吾々の概念から言へば、それは些細な事件（犯罪）にも科せられてゐる。元來人間の生活は、家畜の生活より價值少なるものと評價され、従つて馬の罰金を支拂ひ得ない場合は、子供を奴隸に供し、若し子供なき時は、法典は「犯罪人は自ら小羊の如く殺さるべし」（斷二十九）と定めてゐる。竊盜犯は嚴しく罰せられ、殊に馬の竊盜に對し。（盜難馬が其犯人と共に發見されても其責を負はされ、死刑に處せられてゐる）。しかしそれは贖償金を支拂ひ、其刑罰より免かれ得たのであつた（斷片二十八）。之は好戰的遊牧民、掠奪的遊牧民の特質を明示してゐるではないか。重罪犯の死刑に加ふるに、該法典の中には重要ならざる小犯罪に科する今一つの刑罰がある—即ち、棒切による毆打刑（斷片二十七參照）がある。尙一定の刑罰なき禁止規則のいくだりがある。例へば、他人が食する以前に食するを禁ずるもの、料理の席に招待せずして人の面前で食するを禁ずるもの、食物を料理する爲めの火の上、器皿の上に足をのせるを禁ずるもの、水中に手を差入るを禁ずるもの、衣服洗濯の禁止等々の規則がある。然し之等の犯罪に對し、或る刑罰が（死刑ではなく管刑が）科せられてゐたと言ふ事は、立

法者の一般的精神及び歴史的資料により想像し得られるのである。成吉思汗の第六教訓には、當時の蒙古慣習法は家族の一員が犯したる罪の責任を、全家族が負ふ事を認めてゐる。

成吉思汗と同時代の人の手になつた蒙古人の法律及び慣習に關する次の如き報告がある。プラノーカルピニ氏は語る。「姦通の現場を發見された男又は女は殺されると言ふ事は、尙又一つの慣習法となつてゐた。若し未婚女子が誰か男と私通を犯せば、男又は女子は殺され、若し何人かが、掠奪又は竊盜の現行犯として捕縛されるならば、容赦なく殺される。又若し何人かが、自分達の計畫、殊に戦ひに臨まんとする時其計畫を漏洩するならば、背を太い棒で、こつびどく毆打される。人が他人を侮辱する時は、其兄は容赦せず嚴しい管打にて彼を打つ。正妻の子と妾妻の子との間には、何等の區別もつけて居ない。即ち父は子に好む所のものは何んでも與へてゐる。若し彼が王公の血統を承繼して居れば、妾妻の子であらうと又正妻の子であらうと同様に王公であつた。」

註 プラノーカルピニ氏の同書十五頁

ローブルツク氏は「正義と言ふものの彼等の概念は、次の如きものである様に解する。二人の者が相互に闘ふ時は、何人もそれに干渉する權利をもつてゐない。よしんば父であつても敢へて我子を助けようとはしない。然しながら、他者より弱者であるとわかつてゐる者は、主權者の法廷に出訴し得るのである。兩人の闘ひに干渉する權利は誰も有つてゐない。そして若し出訴後、他の仲間が彼に傷害を加へれば殺される。然し原告は遲滞なく其處に行き原告即ち被害者は、俘虜の如くに攻撃者に對して主となつて當らねばならない。蒙古人は有罪と認定されるか、然らずんば彼自ら告白したのでなければ、何人に對しても死刑を科さない。然しながら、若し多くの人々が彼に對し惡評を

すれば、自白せん爲めに彼はひどい拷問にかけられる。謀殺は犯人夫婦は勿論今一人の妻と共に死刑に處せられる。今一人の妻と言ふ意味を、私は妻か又は女中―女従僕かどちらかであると解釋してゐるのである。何となれば、女奴隸を好み次第で何んにでも使用出來たのだから。大竊盜犯は又死刑に處せられて居るが、小さな竊盜―例へば羊の竊盜とかに對しては、犯人はひどく毆打され、一〇〇回打と宣告された時は、夫は棒を以つて犯人を百回打つと言ふ事を意味してゐるのである。』註（左掲書七十九頁）

マルコポーロは次の如く記してゐる。「蒙古人は次の様な方法で賞罰を行つてゐる。竊盜は―たとひ小事件でも―誰でも皆棒で七つ打たれ、盜物に従つて十回毎に七回増し、或は十四回、二十七回、三十七回、四十七回と其様に行つて、四回より三百回まで打たれて居る。馬又は何か價值あるものを盜む者は何人も死刑に處せられ、身體はめちや／＼に斬りつけられる。然しながら、賠償金として、其盗んだ財産の値だけ十回に分割して支拂ひ得る者は、死刑を免かれて居る（此の本の他の版によると九回となつてゐる）。

（註） ミナエツフ氏著「マルコポーロの旅」（一九〇二年）九一頁。「ヤツサ」は、吾々の手許に傳へられてゐる断片によれば、私法に關する條項は餘り澤山はない。第五断片に依つても窺知される如く、商業上の關係は成吉思汗時代には可成發達してゐた。あの断片は第三回支拂不能に對して設けられたものである―（第十八規則と比較参照）。家族法に關しては、次の如き條項が該法典の中に含まれて居る。大法典は、一夫多妻を認め蓄妾を許して居る―遊牧民には適當したる制度である。（聖書パトリアーチスと比較参照）。妾腹より生れた子は正妻の子と見做されて居り、父の死後、子供は自己を生んだ母を除いた父の妻の運命を決定するのである。子供の年長者を決めるのは、父の妻

のうち最年長者より生れた子によつて確定される。普通は最初に結婚した妻の子が年長者となるのである。相続財産法に關しては、断片の中次の規則によつて窺知する事が出来る。父の死後残された財産は、最年長者が最年少者よりも多く受ける様に分配されるのである。然し最年少者は父の家を相続する。（過去のロシア法「ルスカヤ・ブラウダ」に類似條項がある。それを参照）。妾腹の子供は、其の父の指圖又は習慣に従ひ、相続財産の頒前を受ける。然し法定相続人以外の者は、何人も死せる人に所屬してゐた物の使用を禁じられて居る。私法に關する二、三の資料が一、二五三―五六六年に蒙古に旅行したルブルツクの著作中に見出される。

「結婚に關しては」―ルブルツク氏は言ふ―「蒙古人は妻を買ふにあらずんば何人も妻を持つ事は出来ない。其の必然的結果として、未だ結婚せざるに既に非常に成熟した年齢に達してゐる女子が、屢々見出されるのである。』と言ふ事は窺知される。従つて兩親は彼女等が賣れるまで、家の中に置いてをくのである。蒙古人は親族關係の一等親、二等親を遵守するが、如何なる等親の結婚もそれによる直接關係を認めてゐない。例へば、蒙古人は一度に或は連續して二人の姉妹と結婚をなす者があり、寡婦で更に又結婚しない者は一人も居らない状態である。何となれば、この世で夫に仕へた者は又未來に於ても夫に仕へるであらう事を、信じて居るが爲めである。此の故に、寡婦は彼女の最初の夫の許に常に還へつて行くんだと言ふ信念を有つてゐる。此信念の必然的結果として、彼女等は恥すべき習慣を有つて居る。例へば、一人の息子が自己を生んだ母を除き其他の父の妻を私する等。父母の家は常に最年少者への願け前として最年少者が相続するから、従つて彼は父の家と共に己に割當られた父の妻全部を扶養せねばならない。それ故に、彼は彼女等を己の妻として使用するのである。何とあれば、彼女等は父の死後、復父に還

へつて行くのであるから、其れは罪でもなんでもないのだ。

(註)ルブルツク著「東洋諸國への旅行」七十八―七十九頁引用された民法及び刑法に於ける二、三の一般規則及び行政法に關するものがある。斯くして該法典は宗教的寛恕の原則を保持し、宗教は如何なる宗教をも選擇せず一様に尊敬を拂ひ(斷片二)、如何なる宗派の選擇も禁じ(斷片十七)、他宗教の僧侶より税の徵收を禁じてゐる(斷片十、三十)。次に一國の軍備を樹立し(斷片二十)、税を課し(二十)、宗教及び科學の代表者には免税となし(十)常置郵便通信の組織其他を樹立した(二十五)のであつた。成吉思汗國の組織に存する性質は、遊牧蒙古民族に純粹の武人氣質を與へた。蒙古人は組織された常置軍隊を代表してゐる。各遊牧民はキビトカ(家族)と共に一定數、十戸に屬し、十戸は百戸に、百戸は千戸に、千戸は一萬戸(一軍隊)に屬して居る。各單位には各分離した別個の什長が置かれてゐた(「大法典」の斷片二十、教訓三、比較参照)。一軍隊は(一萬家族)―一地區―オロスを成し、各遊牧民は家畜飼育者であると同時に又兵士であり、或る軍隊に屬し、同一行政組織下に屬してゐたのである。斯る組織を以つて蒙古人は軍隊を組織し、又軍隊は蒙古人を組織立てた。成吉思汗及び子孫の社會組織は、貴族制度に基き貴族的性質を帯びてゐたのであつて、成吉思汗自身は蒙古國の支配階級であり、生れながらの貴族の代表者であつた。社會的に言へば、成吉思汗の時代の國は、二つの主な階級に分かれてゐた。貴族は最も高き階級―白人―之は(一)上、中、下の親族王公、(二)オロス(采地)を賜つた王公―オロスの年長王公。(三)采地なき王公―オロスなき王公―ベク、(四)ムルガス―貴人。最低階級は―黑人―自由人より成る。即ち商人、藝人及び農民、奴隸の農民―普通は俘虜。社會階梯の最上位には專制君が立つて―汗―彼の一族は國政を指導し、汗の最近親は主なるオロス其他を治めた尙ほ武的積

神は、全蒙古に滲透してゐたのである。

二、第二項 オイラート時代の立法

一、舊ツアチン・ヴァイチク

註 ツアチンヴァイチクは規則又は法規を意味す

吾々に傳へられてゐる舊ツアチンヴァイチクの記録は、實に不充分なものである。

其の内容は次の如くである。

- 一、ツアチンヴァイチクに依れば、姦通―僧侶の妻(妾)、と犯したる姦通は罰せず。
- 二、何人を問はず王公の妻と姦通せる者は侮罪の證として一頭の山羊及び其仔を提供せざる可からず。
- 三、何人を問はず姦通の普通行爲を爲す者は四歳馬一頭を喇嘛傳令使者に與へ、姦婦は裁判官に三歳馬一頭を提供せざるべからず。
- 四、何人を問はず女奴隸と一緒に居る男子を發見せし者は、其の男より凡ての物を奪取し得―馬、金錢及び身廻り品全部を剝取し、裸體の儘追出す事を得。然れども女奴隸は罰するを得ず。
- 五、青年期に達し、自力を以つて働き得るに至るや、男子は父の保護下に居るを止め、若しよければ畜群の一部分配を請ひ、父の許を離れ王公の正當なる臣となり得る。
- 六、二人のカルマツク人鬭争し、一方が他方のケウネーを壊した時は罪となり罰せらる。何となれば、ケウネーは

王公に屬すものであるから。又王公に服する表徴として役立たしめるべきものであるから。然れども、彼れ若し他人の冠の上に束ねてない髪を引れば、何人も彼の髪を持ちて引ずり廻はすも罰せられることはない。何となればそれは自己のものであつて、王公に屬すものと見做されないからである。

七、婦人が帳幕の中にて夫の寢床の下にある爐に近き入口の右に坐つて居る時は、何人も彼女に觸る事を得ず。然しながら彼女は見知の人を辱め且つ木の丸太を投げつける事が出来、又はなさんと欲せば什具を彼めがけて投ずるをもなし得る。しかし彼女は口論中敢へて其場所を去り、又帳幕を一步外に踏み出さんか、彼女は上記の権利を失ひ加へし侮辱に對し罰を科せられん。

八、若し婦人にして王公又は家族の許に至り、刑罰の酌量を願うならば、小さな罰金は彼女の性を尊敬して免ぜられ、大なる罰金は半減されるべし。

カルマツク人は婦人に對しては憐憫を掛け、婦人に對し加へられた凡ての侮辱は他のものより峻嚴に罰して居る。

註 六條及び八條のカルマツクと言ふ名は近代的なものである。其の理由は、パーラー氏の時代に尙ほ兩條項が法律効力を有してゐたと彼が考へてゐたからである。

ツアヂンヴィチクの内容を見て、吾々には次の事を知る。即ち該法規は「大ヤツサ」よりは可成りの相違がある。ツアヂンヴィチクの最初の四箇條を「大ヤツサ」のそれに比較すれば、後者は死刑を科するに比し、前者は寛大なる刑罰を科して居る。ツアヂンヴィチクが「大ヤツサ」の一部であるとか又は其に基いてゐるとか言ふ事は事實に反す。それは（慣習法の）一別個の作成物なる事を明示して餘りあるものである。之等二つの記録が創作された時に於ける蒙古

人の慣習に、かなり變化を來たしたと言ふ事も確かである。全般的にツアヂンヴィチクの刑罰は「大ヤツサ」のそれ等よりはかなり寛大な所を見せて居り（斷片一—四比較参照）、其全法規（吾々に傳へられてゐる部分に就いて）には、人道主義が滲透してゐる。ツアヂンヴィチクが取扱つてゐる所の婦人に對する裁判方法は特長あるものであつて、婦人には對酌と尊敬を有してゐる。一家の主婦として神聖視され、彼女に加へられる侮辱は他のものよりも峻嚴に罰せられた（七・八）。ツアヂンヴィチクの其他の條項に就いては之等以外に價値あるものはないが、成年期に達した男子は、生活費をかせぐ事が出来、父の財産の頒賦を附與して貰ふ要求をする権利を有し、別個に一家をつくる権利を有すると言ふ條項がある。

二、一六四〇年の蒙古オイラート法規及噶爾丹汗台吉の補足條項（註）

註 吾々はゴルストウンスキー氏著「一六四〇年の蒙古オイラート法規」（一八八〇出版）のものを使用しよう。一八八〇年に出版されたものに二種あるが、吾々はより以上な關係をもたしめる爲め、第何條と數字の入つたものを使用しよう、これは、第一條より一—百二十一條は法規に屬し、第二百二十二條より百三十三條までは第一回補足に屬し、百三十四條より以下は第二回補足條項に屬す。

新ツアヂンヴィチクの内容は次の如くである。

法規に關する序文及び宗教、僧侶に對する態度

宗教に對する（喇嘛教）態度は最も尊敬深く、而かも熱狂的なものである。

法規は神聖なる宗教的引用文を以つて始まり、序文の全部は上帝及び其ノ従僕に對する一種の宗教的頌歌及び尊敬の念を示してゐる。

序文は語る「おお、三位一體の佛教徒よ。(吾等と共に)幸福であれかし。(自らに)三つの徳を納め給ひ、二つの海原の如き會衆の中に神靈の全き表徴を烈々と身に現はし給ふ喇嘛オチダルを吾々は尊崇す。おお、シヤクヂヤムニ、汝は總ての人々を導きたまふ。汝よ！赫々と燃えさかる御光を以つて、吾々の心を迷はせる疑問の解決を聽かせたまへ。神聖なる「トイン」(即ちシゲムニ)より繼承せる完全無比なる教義の車を、現實に廻し給へる正義の君主、崇高にして聖なる「ズンカヴァ」の御足下にひれ伏さん。吾々は二人の聖者、一は淨らかな靈の國(西藏)に光彩を放つ保護者(擁護者)達頼喇嘛、他は(現世の)生活により黄紅の衣服を纏ひ、生くとし生けるものの(救ひの)爲めに佛陀アビダを代表するバチエン・エルデニ。吾々は此の二聖者の御前に祈りを唱なへつゝ平伏せん。あらゆるもの、覇者(即ち佛陀)に比し、其性質思考及び憐憫にかけても、いさゝかの遜色もなき聖者インザナ・リンボツエの名の下に、輝やかしき存在となりし僧よ、凡ての人々の善の爲め之が完成を聽き給へ。三人の神聖なる僧、アモガシツチ、マンズシリ、アングホビア・マンズシリ及び尊父インザン・リンボツエ即ちシヤクヂヤムニのトインの面前にて「英雄—鐵—龍」と稱せられる所の(一六四〇年)中秋の幸ある五日に、吾々四十四人の王公は其の長にエルデニ・ザサツ汗を載き、トシエツ汗、セツセン、ノイン、ダイチン・クン台吉、テングスリ・トイン、アユシ・カツン・パツール、エルデニ・パツール・カン、タイチ・コンドロン・オオバシ、グシ・ノメンカン、オルロツク、シユクール・ダイチン、エルデング、ダイチン・ホーシユチ、オチーツ・タイチ、メルゲン・ダイチン、シユークル、セツセン・タイチ、メデチ。

タイジ・ホーエルデン、メルゲン・ノイエン及びダマリン(註1)等は大法規の起草を始め、此處に完成せり(註2)

註1 之等の長に就いての歴史的資料はゴルストウンスキー氏が與へて居る。同氏書 九六頁以下。

註2 該法規に示されて居る序文中の歴史的人物及び稱號は次の如し。喇嘛オチール・ドラ又はオチール・ダラ胡圖克圖は—佛教の熱心な宣傳者であり、蒙古薩滿教の撲滅者。王公出生の教導職につき彼の名はアビダで又の名はネイヂトインである(十七世紀)。

シヤカムニ、シゲムニ、シヤクヂヤムニ等は佛陀—佛教の開祖である。

ズンカヴァ聖者、西藏の佛教の更新者であり清淨者(十四世紀—十五世紀)。

アビダはドヤニ佛陀(所謂)の一人の名前である。即ち沈思默考の佛陀である(ゴルストウンスキー氏著九四頁)。

達頼喇嘛は西藏教主権を握る最高僧—ホンシム・ボヂサトヴァの化身(此の世のシヤカムニの人體化)

バンチエン・エルデニ—西藏教主権の高僧、佛陀アビダの化身。

インザン・リンボチエ—十七世紀の蒙古の佛教教師。明かに達頼喇嘛の代表者であり、最初の庫倫の胡圖克圖である。アモゴシチ・マンズシリ及びアングホビア・マンズシリ—十六七世紀の蒙古の高僧である。

一六四〇年の法規の引用序文は起草者の鼓吹した高き宗教的憐憫を特長とし、該法規には宗教及び喇嘛僧に關する條項は澤山は見受けられないが、それ等の全部は皆宗教擁護に傾むいたものばかりである。斯くして該法律は、オンゴン(偶像)を取除くとも罰金を拒否すべしと(百十一條)命じてゐる。人民が自己の家に男又は女シヤマン(薩滿族の呪僧)を招き入れる時は、其人は馬一頭の罰金を科され、シヤマンもそれと同様に罰金に處せられた。シヤマンが

若し貴族の家に向ひ呪文を唱へるならば、馬五頭の罰金に處せられ、庶民の家に向かひ呪文を唱へる時は、馬二頭の罰金に處せられるのである。儀式の爲めにタルバン、燕、犬を殺せば、馬其他の罰金を科せられる(百十二條)該法規は次の如きものを規定してゐる。「僧侶は十人の男の中一人を連れ出し得る權利を有す」と。換言すれば、一家十人の中一人は神に捧げねばならないと言ふのだ。然しながら其の親戚は贖償金を支拂つて免かれるを得た。贖償金は貴族に對しては馬五頭、庶民に對しては馬三頭(九條)、宣誓違反及び僧侶の尊嚴否認に對しては、大なる罰金が科せられる、一家畜半分及び其他の財産半分の罰金(十八條)。宗教及び政府の事務に關し派遣された使者は、他の人々に對し優先權を有す(十六條)。喇嘛僧及びバンデイより馬車を竊盜する者は、牛一頭の罰金が科せられる(十九條)。言葉又は行爲により加へられた僧侶への侮辱に對しては、峻嚴なる罰を科して居る(十七條、二十條参照)。僧に屬する汗部(盟)を強奪する者に對しては、重い罰金を科して居る(五條)。喇嘛宗教に關する術語及び名稱の説明の爲めに、吾々は次の如き簡單な説明をなす事が出来る。

喇嘛教は精神的威嚴に就き三つの階級を意識して居る。「1」ゲールングー之は二百五十三の教則を履行し、經典を知つて居らねばならない者。「2」ヘツスルー之は四十の教則を履行し、西藏語を蒙古語に翻譯出來ねばならない者であつて若干の藝術を心得て居らねばならない。「3」バンデイー之は九十の教則を履行し、一聯のお祈り及び儀式を心得て居らねばならない。此の他に尙ほ數種の尼若くば女僧—シバガンサーが居る。女僧(シバガンサー)はヘツスルーに關する教則を命ぜられ、それを履行する婦人である。彼女は自分の髪を梳り、宗教上の衣服其他を身につけてゐる。然しながら蒙古には尼僧(女僧)の住家はないからして、彼女等は家族と共に住んでゐる。又見習尼が居る、

オオバシス及びオオバサンサス—之は祈誓を確守せしめられ、祈禱詞を読み、若干の教則(オオバシスは八教則、オオバサンサスは五教則)を履行せねばならぬ俗人である。

彼等僧侶は剗然と區別ある衣を身に纏つてゐる。正當に言ふならば、喇嘛僧の最高の宗教的地位にある僧のみが、自ら喇嘛ゲールング及びヘツスルーと稱する權利がある。之に屬する主だつた僧はカンボ喇嘛(僧正の一種)である。然し跪禮する地位低き僧も亦喇嘛と稱せられてゐる。喇嘛僧の一般的名は、ホバアラクスと言ふのである。上記のカンボ喇嘛は勿論、達賴喇嘛、パウチエン・エルデニ及び其他のフツクタス(化身)と言ふ高僧に加ふるに、次に吾々が述べる如く、宗教的行政官吏の一順列が存在してゐる。シレツ—彼はそれに屬する五人より成る委員會を有し、僧院の住持である。五人とはソルチ、シャンゾバ、ジャサツク、ダラマ及びナンソ之である。

ソルチはシレツの補佐官、シャンゾバ及びジャサツクは僧の行政を治むるのである。そしてシレツ及びソルチの爲めに代理行爲をなす。ダラマ及びナンソは僧を監督し、バンデイ及びオオバシスを教育するのである。カンボ喇嘛は一人の秘書ドニールを有す。之等に加ふるに、第二次的宗教上の人々が居る。ジツトバ及びグルンバス等である。之には小寺院(スーメ)に於ける年長僧、主だつた寺院(ダーサン)に於ける合唱及び秩序を維持するところのゲブグイ合唱團の長たるオムザイト、會計司ノルバ、其他が居る。僧院はヒイトと稱せられ、普通は主だつた寺院及び一聯の小寺院より成り、其の中に喇嘛僧は教徒と共に起居を共にしてゐる。主たる寺院はダーサンと稱せられ小寺院はスーメと稱せられてゐるが、然し往々にして全僧院がダーサンと稱せられ(トランスバイカル地方でそう言はれてゐる様に)、若くばスーメと稱せられてゐる。フルルは僧の集會であり、それは又宗教的勤め及び寺院を意味してゐるのか

も知れない。(ゴルストウンスキー氏上掲書、一〇六頁、一三四—一三七頁。エフ・イオアキンフ氏著「蒙古の記録」第二卷一八八頁—二〇〇頁。ホツドニエフ氏著「佛教僧院の生活様式」比較参照)。

三、部族相互の關係

A、攻撃及び防禦組織

先づ最初に該法規はオイラト軍事組織、部族關係を結成する部族の相互關係を調整してゐる。同盟を結成する地方は奪取すべからずと法規は王公に命じ、之を犯す者に對しては、結合力を以つて罰すべしと蒙古人、オイラト人に命じて居る(一一二條)。蒙古人及びオイラト人間に、バルガ、フリアト及びホイト等の逃亡者を分置する事(三條)、結合力を以つて敵を撃退せしめること(四條)、等を規定し、敵の出現に關する報告をせざる者又警告が與へられても出て來ない者に對しては、峻嚴なる刑罰を科して居る(四條、十三條)。更に他部族よりの逃亡者の保護を禁じ、殺す事を禁じ(六、八、九十九條)、又法規の違反者に對する罰則を規定して居る。以上の引用に依つて、該同盟及び遊牧蒙古民族の全生活様式が如何に好戰的、又掠奪的性質を帯びてゐるか充分に立證し得ると思ふが、更に敵に對する攻撃、及び防備の一聯の條項によつてより以上に以上の事を強調される事と思ふ。

斯くして、四十キビトカ(家族)は二つの胴鎧を準備せねばならぬ(三十七條)。警告が發せられる場合は、各人は各々の王公に合流せねばならない。かくせざる者は何人を問はず重い罰金を科せられ、逃亡者以上に見苦しき罰に服せしめられる。―彼は婦人の袖なきチャケツを着せられる(十一條)。相當な數の敵の近接を報告せざる者に對して

は、甚だしく峻い罰に處せられる。―死刑、破産及び流刑(十三條)。若し敵が一キャンプを滅ぼし、一畜群を取去るを見、又は其れに關する音を聞きたる者が敵を追跡せざれば、又更に家畜を奪回せざれば、何人と言はず財産の半分沒收の罰を科せられる。何人を問はず其の家畜を奪還する者は、該家畜の半分及び財産の半分を報酬として收受するのである。若し奪還者が殺害されるか又は負傷するか、又は死するならば一定規則に従ひ、其の損失は家族に對して償はれた(十五條)。竊盜犯と相闘かひ、其上で家畜を奪還する者は何人も、五頭の動物奪還に對しては馬一頭、四頭又は三頭の奪還に對しては三歳牝馬一頭の報酬を收受する。若し其れが闘争せずして奪還したものであつても、亦同様に報酬が與へられるが、前者よりは價值少なるものである(百三十條)。戰鬥に於て王公上級官吏又は他の人を奪還せる時は奪還者はトルカンになる。反對に窮地に陥れる王公を見捨てる者は死刑及び財産沒收の罰を科せられる(十二條)。戰鬥に於て敵兵を殺す者は銅鎧を收受し、其の補助者は甲冑、裝甲帽及び其他の具足を收受する(五十條)。敵中より逃げ還りつゝある者を奪還すれば、其報酬は馬二頭及び胴鎧一具が與へられ、敵の前線深く入り込んだ者の奪還に對しては獲得物の動物九頭が與へられる(五十條)。戰鬥に於て偶然に同盟員の一員を殺す者は、其罰動物九頭(五十四條)。狩獵中前項に當る者は、前項の罰の半分を科せられて居る(五十五條)。

B、家畜牧養及び狩獵

戰鬥及び入寇する場合に、遊牧蒙古人が生活の方法として取つた主なる仕事は、家畜牧養であり又狩獵であつた。家畜は蒙古人の富の主たる源泉であり、其れは又貨幣に代はる交換用具の一單位であり、刑罰其他に就いての一單位と

して用いられてゐる。蒙古法律の諸記録によれば、彼等の財産に對する觀念は常に「家畜及び所有物」と言ふ言葉で表現されて居る。例へば「家畜及び所有物」の剝奪（全財産の没收）——「家畜及び所有物の半分没收」等がある（一六四〇年の法規十五條、第三章、理藩院法規百八十三條参照）。其れ故に、吾々が此處で一六四〇年の法規中に家畜牧養に關する一聯の條項に就きて、説明せねばならないのも當然である。以上の如き理由より家畜竊盜は嚴しく罰せられて居る。同盟を構成する異部族間の家畜竊盜に對しては、法規は次の如き罰金を科し、計算單位は家畜である。即ち罰金、牲畜九頭八回及び證人に牲畜九頭を支拂はしめてゐる（七條）。同一部族間の家畜竊盜罪は更に重く、駱駝一頭の竊盜に對し罰金牲畜九頭十五回、（以下何頭何回は五・四の如く書く）、去勢された馬又は種馬の竊盜は其罰牲畜九・九、牝馬一頭の竊盜は其罰牲畜九・八、牝牛一頭の竊盜は其罰二歲仔馬一頭、羊一頭の竊盜は其罰牲畜九・九を科してゐる（六十條）。同様な罰は家畜放逐に對しても科してゐる（百二條）。迷へる家畜を或る畜群に加入せしめた事實があれば、それは二十四時間以内に其旨届出なければならぬ。届出以後は其れを御するも毛を剪るも、耳に印を附するも自由であるが、届出ずして其家畜を使用する者は、其の所有主に罰金を支拂ふ義務がある。即ち御したる者は其の罰三歲牝馬一頭、毛を剪つた者は其罰牲畜五、印を附した者は牲畜九の罰金を支拂はねばならぬ（六十條）。迷へる家畜を自己の畜群に加入し牧養する者は、若し二頭以上の家畜を牧養するならば、一年の期間満了後は其増殖の半分を受取り、尙ほ其牧養に對する報酬を受取る権利を有す。即ち三十八頭の家畜牧養に對しては動物一頭、十頭以上の家畜牧養に對しては各十頭毎に二頭を受くる権利を有するのである（百二十條）。原野に於て捕獲した迷へる家畜はシュレンガ又はキブラに渡さねばならぬ。若し渡さぬ者は罰牲畜九を支拂はねばならぬ（六十七條）。

迷へる家畜を自己に屬するものなりと言ひて手に入れる者は、何人も牲畜五頭の罰金に處せられる（九十二條）。他人の所有する動物を輕卒に殺す者は、其れと同數の動物及び馬一頭を要求される（九十一條）。他人の所有する動物を故意に殺す者は竊盜と同様に罰せられる（百二條）。放逐された家畜の奪還は、特に報酬を與へらる。家畜が放逐されたる事實を届出ない者、又は其犯人の追求を拒否するものは、嚴しく罰せられる（十五條）。火、水の危険より家畜を救出する者は勿論放逐された家畜の奪還に對しても報酬が與へられる（五十七、八十、八十二、百三十四條）。動物の屍骸は其所有者に屬す。何となれば食料として用ひられるから。そして其食料の専用は罰せられる（六十八、八十一、百十三條）。狩獵及び漁獵は遊牧民にとつては第二の平和的な追求である。狩獵は獵物を驅逐するか又は忍び寄つて捕獲してゐた。此の獲物を驅逐する順序は嚴として守られてゐた。獵物を狩り立て際に立止まつてゐたり、又は他の獵人の側に行つたりする者は、牲畜五頭の罰金に處せられる。列より驅け出し、三本の矢の長さまで他人の前に出る者は馬一頭の罰金、二本の矢の長さまで出たものは罰金として羊一頭、一本の矢の長さまで出た者は矢五本の罰に處せられる。傷つける動物が身に矢を負つたまま、逃去り、其れを捕獲しながら、其事實を隠蔽すれば、罰金牲畜五頭。若し矢を負わずに傷つける動物を隠蔽する者は、犯人の馬の首は斬り取られる（百三條）。自動式弩によつて、殺された動物を取り、其事實を届出た者は其の弩の所有者に同一動物を與へねばならぬ。若し當人が右の事實を届け出すして自分の物にすれば、牲畜五頭を支拂ふことになる（七十九條）。他人の矢を地上より拾ひ取り、己の専用となす者は馬一頭の罰金に處せられる。他人の捕獲した鳥を殺す者は馬一頭の罰金、狩り立中に不注意に人を殺す者は、殺人罪の罰半分が要求される（五十五條）。自然的に弩が放たれて何人か殺がされるか又は不具者となれば、該弩の装置が届出済

ならば弩の所有者はその損害を支拂ひ、未届出のものであれば其所有者は更に附加罰を支拂はねばならぬ(七十九條) 該法規は漁獵に關する特別の條項を含んでゐる。それは第一百七條に漁獵の網及び罾に就き示してゐるものである。それ等の竊盜をなす者は指一本を切り落すか又は牲畜五頭を支拂ふべしと規定してゐる。

C、郵便通信及び馬車の義務的提供

常置郵便通信機關は先に成吉思汗が之を樹立した(斷片二十五)。其れは一六四〇年の法規によつて組織立てられた。よき道路なき爲め、使者の義務遂行も又政府及び其他の使者を運ぶ爲めの馬車の義務的提供も、一般人民にとつてはどちらかと言へば重荷であつた。

註 一七八九年及び一八一五年の理藩院の法規に依れば、驛に於て過激勞働をなさしめる流刑すらもある。

法規は次の如く定めてゐる。若し行くべく命ぜられた者が出發しなければ、罰として牲畜九に處せられる。若し使者の提供及び馬車を提供せざれば、右命令の不服従者は牲畜九の罰金を科せられる。使者は途中飲酒を禁じられてゐる(王公に歡待されるにあらずんば)。之を犯す者は牲畜五の罰金(九十八條)。一般人民は法律の定むる所により三台の馬車を提供する義務がある。宗教的及び政府の行政的事務に關して送られた使者は、馬車及び食料の提供に就き他の者より優先權を與へられて居り、主なる王公又は王公の妻の病氣又は強敵の攻撃を鎮定する爲めに送られた使者には、よしんば馬車提供の要求を受けてゐる者でなくとも提供せねばならない。此の點を忽にする者は重罰に處せられ、牲畜九頭九回を支拂ふことになるのである(十六條)。重要ならざる(一般人の)仕事の爲めに送られる使者は

所屬する汗部(盟)より馬車を手に入れる事が出来るのみである。若し他の汗部より馬車を手に入れるならば、三才牝馬一頭の罰金を科せられ、又使者の馬をつれ去る者は牲畜五頭の罰に處せられる。

何人を問はず馬車の提供を拒否し又は與へられたる馬車を連れ去り、其の御者に打撃を加へる者は馬一頭の罰金に處せられる。使者との故實で人を欺き、馬車を手に入れ又食料を受ける者は牲畜九の罰金に處せられるか又は五管刑を加へられ、牲畜五の罰金に處せられる。若し彼が之等の罪の中唯だ一つを犯せば、馬五頭の罰金に處せられる(二十五條)。不正なる意圖を有する人と默契し、馬を與へ食料を與へる者は牲畜九頭七回の罰に處せられる(七十七條)。

D、氏族生活及び相互諸關係

西蒙古のキビトカ(帳幕一家)はアオールス又は旗(十五―百二十五條。カルマツク語ではホートンと言ふ)に結合される。旗は汗部(盟)に結合され(二十三條)、汗部はオトクに結合され、(百二十二條―諸民族アオールス)オトクは種族に結合され、種族はオイラト同盟に結成されてゐた。遊牧蒙古人は氏族生活をなしてゐる。アオールス(キャンブ)は一つの大家族を代表してゐた。アオールス附近に生活してゐた最近親等は一部を組成し、オトクは數個の部を結合し、種族の一部なる一民族を形成して居つた。一種族は、普通は王公政府を樹ててゐる、法規は種族を維持せしめる爲め、義務的結婚を命じてゐた。四十家中、四家は毎年彼等の息子を結婚せしめねばならなかつた十人の人は結婚せんとする者の一人を扶養せねばならない(三十七條)。人民に對し、他旗に流浪することを禁じかゝる流浪の人々を一つに集合させ部又はオトクを構成する様規定してゐる(百二十五條)。一個人は勿論盟の住地

變更を禁じ、逃亡者は其の屬する部に還へせと命じてゐる。(百十二、百三十三條) 家族の生活様式は厳しく家長中心を守り、家族は其家長―主人公―に従屬してゐる。家長の勢力は非常に大なるものである。が然し、若しそれ見捨てた自己の妻を殺せば、彼は下度奴隷を殺す場合と同様に牲畜九頭五回の罰に處せられ(三十三、三十二條)、見捨てられた妻の兄弟及びアイマーク兄弟(親戚)は、償金を出して彼女を救出する権利を有す(百十六條)。年長の親戚に加へられた侮辱、殴打、殺人に對する罰は他の犯罪に對するものよりも峻嚴である(十七―三十條)。財産は全家族に屬してゐたが、然し、それは昔より既に存在してゐたものであつて、ツアヂンヴィチクは自力にて生計し得るに至るや、息子は父に財産の一部分配を要求し得自己の家庭を持ち得ると規定してゐる(一六四〇年の法規三十四條により確實にされてゐる事は明だ)。

親族關係は男系のみ認められてゐるが、母の以前の家族との或る親族關係の連合は存してゐた。斯くして、母方の叔父と甥との間の債務に關する義務はあり得ない事になり又母方の親戚の者の爲したる竊盜は、犯罪とならず其損害を支拂ふか又は贈與によつて解決をつける様に法規が導いてゐるに過ぎない(百十八條)。尙ほ法規は一氏族の共同責任を認めてゐる。例へば、第十三條―強敵近接の報告をなさなかつた者の子孫の没落を法規は約束して居り、第十五條は損害の支拂を兄弟に課してゐる等。

相互關係に就いては、オイラート時代の法律は相互扶助又は相互寛恕を命じてゐる。曠爾丹汗の一布告は、峻嚴なる罰則を以つて威嚇する一方貧者及び不具者の世話をなせとオトクの行政官に命じて居る。かゝる救済に對する資力缺乏してゐる場合は、各四十戸のテムチは、貧民、不具者救済の責任者に其旨報告せねばならない。―責任者はかゝる

救済の爲め、常に家畜を準備してゐる。更に責任者も資力に缺乏し居るならば、其の場合には上の權威者に其の旨上達すべし。若し、救済怠慢の故に貧者の何人が死するならば其の罪は殺人罪と同様である(百二十二條)。

何人を問はずコウミス(醜醜したる牝馬の乳)を第三者に提供せざる者は羊一頭の罰に處す(八十七條)。何人を問はず、夜間客人の歡待を拒否する者は其罰牝馬一頭に處す(二十四條)。法規は結婚せんとする者は、補助をあたえられると定め、將に死に瀕する者の救出に對しては一般に家畜及び所有物の報酬を與へてゐる。火又は水の爲め、死に臨んで居る者を救出する者の其の報酬は牲畜五頭、奴隸の奪還に對しては馬一頭及び牝牛一頭の報酬と定められて居る(五十七條)。病人、産婦、氣絶中の男の治療に對しては、先に約束したところのものを支拂ふべしと定め、若し、如何なる約束もなき場合は、馬一頭を支拂ふべしと(八十三條)。馬の下敷になつた子供を救出せし者は、報酬として羊一匹を與へらるべし(百十四條)。婦人の取扱ひ方法には二種ある。一は家庭内、他は家庭外である。家長的生活様式は、家庭内に於ける婦人の地位を從屬的たらしめた。婦人のみならず、女子未成年者も同様に家長の爲すが儘にまかせられてゐる(四十條)。それは自己が見捨たる妻を殺せば、奴隸を殺す時と等しき罰金を支拂ふ事になつてゐる(三十三條) 見捨てられた妻は數頭の家畜を以つて買戻し得られる。―地位低き妻は、馬一頭と駱駝一頭、貴族の妻は動物九頭(一〇〇條)、戰鬥に於て夫を殺す者は何人を問はず其の報酬として其の妻を受取る(五十條)。然しながら、他方家庭外の婦人の地位に就いて言へば、舊ツアヂンヴィチクのその如く、人道主義が遵守されてゐる。例へば、婦人が酒及び羊肉を運び其の若干を取る時でもそれは重視されない。換言すれば、婦人はそれに對して責任を歸せられて居らない。若し、多く取り過ぎたならば、其量の半分は適宜に填補されねばならない(六十五條)

婦人の髪を巻つたり又は帽子の房を巻つたりする者は何人も牲畜九頭の罰に處せられる（貴族の捨てられた妻の贖償金と同額）。婦人をして流産せしめる者は、其の流産した子供の月數と同回數だけの牲畜九の罰を科せられ、少女に對する自由勝手な行動は罰せられ、十才以上の少女の胸に觸れること、接吻をする事等々は罰せられる（七十三條）。

四、私 法

A、財産法

十七世紀の蒙古民族間の原始的氏族共產制度は大なる變化を來たし、それは可成り進化し、個人財産と言ふものが歴然と認識され始めた。法規中の或條項は共通家族財産に關係し、氏族の共同責任（十三、十五、百十八條）に關係してゐるも、然し未だ法規は私有財産の保有を都會のみならず農村の人々の間にも保護してゐない。

不動産に對する権利は未だ存在してゐなかつた。領土は或る種族又は氏族（オトク）の使命の爲めであつて、私有を許さなかつた。一個人は勿論のこと全盟は、或オトク中に於て住居地の變更は禁じられてゐる（百三十二條）。各氏族及び各家族は全民族の共同財産であり、各人に割當られた土地を漂泊せねばならなかつた。然しながら動産に對する個人的権利は存在して居た事は疑ふ余地のない事實である。個人的所有者、財産の所有者と言ふ概念は、法規の至るところで出會はすものであつて、物の所有者はそれを使用して差支ない。財産に對してなされた損害は、加害者に依つて填補され、自動装置の弩により、殺された動物は弩の所有者に屬す（百七十九條）。若し、何人か迷へる家畜を自己に屬するものなりと言ひて其れを獲るならば、其の家畜の所有者は彼より動物五頭を取る事が出来る

（九十二條）。胴鎧を身につけた者を殺す者は、何人と言へども其胴鎧を自己の所有に歸すことが出来る（五十條）。何人を問はず、他人に甲冑を與ふる者は、其の代りに牲畜五頭を受取る権利を有す（三十八條）。

百十九條は次の如き動産に就いて擁護原則を設けてゐる。迷へる家畜の所有者は其れを取戻す権利を有す（信頼に足る證人の前で）。然しながら、若し家畜がそれを買得る善意の第三者の手中にあれば、家畜の最初の所有者は中心部—家畜の優れたる部分—に對し権利を有し、買得せし者は尾部—劣つた部分—に對して権利を有す。以上引用した條項及び他の同様な條項は、勿論家族の長が家族の利害の代表者としてのみ行爲をなす時は、言ひかへれば、権利の眞實の對象物が全體としての家族である時は一つの共同家族財産と何等矛盾しない。十七世紀の蒙古人間の事物の状態は、依然として斯様であつた事も否めない事實だ。然しながら、他方事物の所有者の権利及び損害を惹起した人の個人的責任は常に明示されてゐるにも拘らず家族共同責任、共同権利、及び氏族の義務と言ふものは極少數である（十三條、十五條、百十六條）。武勇に對する個人的報酬（五十、五十一條）。之れは共同獲得物の一部でないから家族共同財産とは恐らく考へ得られない特殊なものだ。息子が父より分離したる財産を所有すると言ふ事實（二十七—三十條）。相続財産の分割（三十四條）—之等凡ての事實は、吾々が今研究しつゝある時代には、氏族生活様式及び家族共同財産の諸要素と相並んで動産に對する個人の権利が既に顯れ、自己の働き、及び商業を以つて獲得したる財産が存在して居たと言ふ結論に導く。

B、債權、債務

債權債務に關する法規は發達はしたものゝ、未だ不鮮明なものであり、該法規には此問題に就き僅か數ヶ條しか

い。第三十八條は貸借物、遺失物に對する補償に關し、第一百九條は賣買を明示し、更に又、六十三、百二十七條は負債を取扱つてゐる。債權の回收に關しては次の條項がある。貸金の辨濟を欲する債權者は、證人の前で債務者に向かひ貸金の返濟を三回申告する義務がある。更に、シュレンガにも報告せねばならない。

註、シュレンガは二氏族の長である、一六四〇年の法規に依れば二十家族の長。

然る後、債權者は債務者が支拂ひの義務ある何物をも（家畜、所有物）取る權利を有す。若し、シュレンガに報告せざる時は債權者は馬一頭の罰を科せられる。若し、債權者が豫告なく、晝間に債務者より何物かを取れば債權者は其債權を失ふ。若し、夜間に於てかゝる事をなせば、却へつて牲畜九頭の罰に處せられる（六十三條）。法規は消滅時効を確定してゐないが、然し、噶爾丹汗の補足的公布に依ると彼の父バツール汗台吉（一六四五年）の死以前に契約した債權は、消滅時効にかゝつてゐるものと考へ、一六四五年以後に契約した債權は唯それが證人の前で契約したものに限り認められてゐる（換言すれば要求する義務を認めてゐるのである）（百二十七條）。

C、親族法

以上述べた如く、法規は種族の維持の爲め、住民の義務的結婚を規定してゐる。四十家族の中、四家族は毎年彼等の息子を結婚せしめる義務があり、各十人は結婚せんとする者を扶養せねばならない（三十七條）。

註、レオントヴィツチ氏の版の第四十七條に依れば、扶養の不足の爲めに結婚せぬ何人が居るならば其者の屬する十家族は罰せられる。

女子の結婚年令は十四才と定められてゐる（精確に言へば「十四才頃」——第三十六條）。女子が結婚する時には、其の父又は後見人より娘の爲めに持參金が取られる（これをカルマツク人はカリムと言つてゐる）。結婚は娘に與へられる。カリム及び結婚の量は花髻、花嫁の社會的地位に依存してゐる（三十五條四十條）。例へば王公間の（タフナン同志では）婚約に於ては花嫁へのカリムは三十の價值ある物、百五十頭の家畜、及び四百頭の羊より成り、小王公—タフナン—間の婚約の花嫁へはカリムは百五十の價值あるもの、家畜五十頭、羊百頭よりなり、テムチ（四十家族の長）の娘のカリムは駱駝五頭、家畜二十五頭、羊四十頭より成り、シュレンガ（二十家族の長）の娘のカリムは駱駝四頭、家畜二十頭、羊三十頭より成つてゐる。宮仕への娘のカリムはシュレンガの娘のカリムと同様である。中流階級に於けるカリムは駱駝三頭、家畜十五頭、羊二十頭であり、下流階級に於ては駱駝二頭、家畜十頭、羊十五頭から成つてゐる。結婚は、一般に王公に關して規定してゐるものであるが、一般にカリムの量で一致して居らねばならなかつた。然しながら、雙方が同意の上で結婚を減らす事は出来る。髻は結婚に比例した贈物をしなければならぬ（規定はシュレンガ及び中流階級の人々の許嫁に對するものであるが）。テムチの娘の結婚は上衣十枚、縫はない上衣二十枚、鞍一つ、馬勒一つ、毛皮コート、眞綿の胸衣及び馬二頭より成らねばならない。シュレンガの娘の結婚は縫つた上衣五枚、縫はない上衣十五枚、駱駝、馬、各一頭、中流階級の娘の結婚は縫つた上衣四枚、縫はない上衣一枚、駱駝及馬各一頭より成るものが與へられる。法律家の娘は馬一頭、駱駝一頭、毛皮コート一枚、眞綿のない胸衣、鞍一つ、馬勒一つ等の結婚を與へられる（三十五條）。婚約したる娘が、二十才に達したる時は其の父その旨を届出なければならぬ。其れ以後結婚式が行はれないならば、王公に報告せねばならない。斯くすれば、その娘は他の男と結婚し得るのである。自己の娘を何等王公に報告せずして結婚せしめるならば、其の者は何人を問はず、先にカリムとして收

受した家畜を返還し、法律の命ずる裁きを受けねばならない。許嫁の爲めに既に縁の取極がなされて、而る後に許嫁が死ねば、結納は花嫁に返還される。若しそれが未だ縁の取極めが行はれない時であれば、花嫁はカリムの半分を返還する義務がある(三十七條)。若し、兩親が婚約した娘を他の男に結婚せしめるならば、兩親は罰せられる―貴族は牲畜九頭及び駱駝一頭五回の罰、中流階級の人々は牲畜九頭及び駱駝一頭三回、下流階級の人々は牲畜九頭及駱駝一頭の罰、尙ほ最初に婚約した男は花嫁と共にカリムを受取る権利を有す。

若し、兩親の同意なく結婚すれば、第二の(夫たるべき)花嫁は花嫁を失ふのみならず、彼女の兩親の損害賠償として三重の罰を支拂ふ事になつてゐる(三十九條)。何人を問はず婚約せぬ男が、娘と駢落ちすべく彼女(娘)を説きふせる者は罰せられる―貴族は牲畜七頭、中流階級は牲畜五頭及び下流階級の者は駱駝一頭の罰に處せられる(四十一條)。一夫多妻は許容してゐる(三十三條)。夫及び父の權威は、家族の家長中心組織の爲めに非常に大なるものとなつてゐる。何人を問はず、戰場に於て夫を殺す者は其の報酬として彼の妻を受取る権利を有し(五十條)何人を問はず見捨てた妻を殺す者は牲畜九頭五回の罰に處せられる(三十三條)。従つて夫が自分の妻を見捨てる(離婚)事は自由であり、又彼女を殺す自由も有つてゐた。何人を問はず離婚した妻を買戻そうと欲する者は、贖償金を支拂ひ買戻す事が出来た。貴族の妻に對しては家畜九頭並びに價値ある物一個、中流階級の妻に對しては家畜五頭下流階級の妻に對しては、馬一頭並びに駱駝一頭である(百條)。若し、何人か他人の妻を夫の反抗なくとも誘拐する者は、夫は誘拐者の家畜を取り、妻を取戻す権利を有す。彼女の兄弟は彼女の爲めに與へられたカリムを支拂ひ、彼女を買戻す事を得た。若し、兄弟が斯く爲し得ないならば、アイマーク兄弟(親戚)が彼女の爲めに贖償金、牲畜

九頭を支拂ひ贖償する事が出来た。若し、アイマーク兄弟が非常な貧困に陥つてゐるならば該問題は王公に依つて決定せられる(百十六條)。

法規は養子を許容してゐる。もつと適確に言ふならば子供を貰ひ、育てる事が認められてゐる。何人かに養育された女子は、其養育者の自由裁量に置かれてゐる(四十一條)。若し、其女子の兩親が養育された娘を己が家に連れ戻そうとし、娘が九才以上十五才迄に達して居れば、兩親は牲畜九頭の贖償金を拂つて連れ戻さねばならぬ。然しながら若し娘が善く養育されて居らねば、兩親は先の贖償金の半分のみを支拂ふ。若し、娘が十五才以上に達して居るならば、連れ戻す事は不可能であり、従つて、彼女は依然養育者の許に起臥する。其の女子が結婚する時には、實父並びに養育者は共に同じ割合にカリムを引受け、結納物を提供せねばならない。養育された男子は、養育者の許を去る事が出来、自分の息子を連れて行く事も出来る。しかし彼の妻と娘は、贖償を出さねばならない(四十條、百十七條)。法規は家庭内の懲治方法を認容してゐる。しかも統制あるものである。若し、父が自分の息子又は義理の娘を懲らしめる爲めに毆打するのであれば、それは罪にならない。然し、若し彼が誤まつて(不合理に)彼等を毆打すれば、彼は罰せられる―峻烈なる毆打に對しては牲畜九頭、然らざる毆打に對しては牲畜五頭、軽い毆打に對しては馬一頭の罰、若し、義父が義娘を厳しく毆打すれば、彼は牲畜九頭二回、然らざる毆打ならば牲畜九頭、軽い毆打ならば牲畜五頭の罰に處せられる(二十九條)。若し、父が自分の息子を殺すならば、父の財産は没收される(三十一條)。子供が兩親に對してなした犯罪及び年少者が年長者に對して犯した罪は一般に他のものよりも峻しく罰せられる(二十七條)。

D、相續法

一一〇

相續に關する條項は、僅か一箇の短かい條文しかない。父は定められた規則に従ひ、己が子に相續財産を頒與する義務があり、若し、父が貧困の身であれば父は五頭の中一頭の動物を自己のものとする。次は、息子のみが相續人であつて、娘は相續しなかつたと言ふ事である。彼女等は唯結納を受くるに過ぎなかつた。然し、相續財産を息子間に頒與する其の方法は法規中には明示されてゐなかつたが、それは既に確立された規則及び習慣に従ひ頒與されて居つたものである。のみならず、法規の第三十四條は父の死後の相續財産頒與ばかりでなく、又父の存命中に財産の一部を息子に割當てて頒與したいと言ふ事は明かだ（ロシアの豫期相續財産法第五卷第一章）。第三十四條の終りに見られるものであるが、若し、父が貧困に陥つて居るとすれば、五頭の動物より一頭は父が自己のものとして得る。此の條項は相續財産が父の死後にのみ結果されてゐるものとすれば、全々無意味であり、父が存命中に相續財産の頒與が行はれてゐた場合に於てのみ説明し得られるものである。舊ツァチンゲイチクは成年に達した息子は相續財産の頒與に對し主張し得る權利に就き語つてゐる。

五、刑法

A、刑法制度

一六四〇年の法規の刑罰條項は、大法典のそれ等よりは可成り手心を加へられたものである。「ヤツサ」がよく命じてゐる、かの死刑も該法規には完全とは言へないにしても、殆んど影を消してゐる（之は國防に關聯する三つの場合

にのみ適用されてゐる）。法規の研究者全部は死刑を避けてゐる。この事實は佛教（喇嘛教）の寛恕より受けた影響が然らしめたのだと述べてゐる。

一と先ず此の慈悲的影響を肯定して、吾々が舊ツァチンゲイチクは「大ヤツサ」よりは既に可成り寛大になつてゐる事實を受け納れても、該法規の刑罰は、蒙古人が佛教を輸入した以前に發布されたものである點を指摘せねばならない。人に傷害を加へ、不具とならしめる事は時時起る事であるが、其れ等は常に罰で代償し得る。投獄、禁錮、自由の束縛等は、概して刑罰として遊牧民に適用する事は稀な事である。何となれば、それ等の刑罰は彼等の生活様式、及び性質と合致するものではなかつたからである。事實、吾々は自由の束縛に就いては、法規中に唯一回刑罰として適用されてゐるのを見るだけである（第二百二十三條「鐵鎖を附す」）。財産の没收は或る場合には適用される。が然し法規中の主たる刑罰は罰金であり、それは犯罪人の性質、犯人の社會的身分、被害者の社會的身分に従ひ大小多種多様である。法規中峻嚴なる刑罰としては次の如きものが分類される。

- 一、子孫の没落を伴ふ死刑、之は強敵を見又は其れに就き聞いて居りながら、王公の許に報告せざる者（十三條）
- 警告を聞きながら、王公の許に出頭せざる者等に科す。
- 二、危險に瀕する王公を見殺しにする者に死刑を科す（十二條）。
- 三、手足を斬り落す刑罰、十家の一群中でなされた竊盜に就き告示せる該群長は手を斬り落される（註）

註 レオントヴィツチ氏著に依れば一本の指（百五十五條）。

家庭内の物品を引續き竊盜する者、狩獵人の道具を竊盜する者等は指を斬り落される。然し、此の刑罰は犯人の

自由選擇になる牲畜五頭の罰と代償され得る（「若し人自己の指を惜しむならば、彼より牲畜五を取れ」規則第一〇七條）。他人の妻を殺す婦人は被害者の夫の意向に依り、死（罰金）に處すか、又は耳を斬り落して他の男に嫁せしめる事が出来る（三十三條）。

四、笞を以つてする打刑（註）

註　ゴルストウンスキー氏著書の中には唯笞打となつてゐるが、レオントヴィツチ氏の著書には笞を以つてする打刑となつてゐる。

他を欺いて自己を使用者なりと言ひ、馬車の使用、食料の提供を受ける者に科す（二十八條）。又、義理の娘が義父を毆打する場合にも科す（二十八條）。

五、鐵鎖を附す刑罰、十家の一群中でなされた竊盜を隠蔽する場合、該群の各員は鐵鎖を附せられる（百二十三條）。

六、犯人の破産（財産の没收）（註）

註　「破産」―財産の強奪又は、財産の没收―と言ふ術語は法規に關する書物には、明瞭にされてゐない。

人々を毆打し、大なるアイマークを強奪する者は（第一條）、主たる王公に侮辱を加ふる者は（第二條）、父親又は母親を殺す息子は（第三十條）、己が息子を殺す父親は（第三十一條）（放火して）、貴族を殺す者は、（五十九條）、三回の連続竊盜を爲す者は（第二百二十四條）、等々皆別個に法規違反者に對して刑罰を加へて居る。

七、免職、オトクのデムチ及び行政官の職務怠慢に對しては（百二十二條）、裁判官の誤りたる判決、並びに不正な

判決に對して（百二十九條、百三十五條）適用する。

八、恥辱となる罰、敵よりの逃亡者は重罰に加ふるに、身に婦人の袖なき胴衣を着せられる（十一條）。女子に對する兒戲的行爲をする者は、性罰に加ふるに生殖器を打たれる。

九、罰金は（大部分が性罰）主な刑罰である。

十、犯人が罰金の支拂不能なる場合は、犯人は被害者に渡される（例へば竊盜人、第八十六條）。法規により罰せられる犯罪は、次の部門に分類される。

宗教、僧侶に對する犯罪。國、及び政府に對する犯罪。官吏の犯罪。社會に對する犯罪。個人に對する犯罪。財産に關する犯罪。等、然し、法規自身は犯罪行爲を分類して居らず、又其の材料整理に就き一定した如何なる組織も含んでは居ない。法規の内容、特に吾々が此著作中此の部分に屬する、内容を解説するに當つて用ひた組織は嚴密なる觀察方法に従つてはゐない。それは唯法規を把握する爲めの補助的手段に過ぎないものである。

B、宗教、僧侶に對する犯罪

吾々は既に宗教僧侶を取扱つた部分で此の問題に觸れたのであるから、今此處で其れに就き意を留めて更に觀察を進めて行かうとはしない。唯、吾々は僧侶に加へられた侮辱、傷害、損害等に對して科した峻しい刑罰に就き述ぶるに留める。斯くしてソルヂに加へられた言葉による侮辱は、其の罰牲畜九頭九回、王公の喇嘛教師に加へられた言葉上の侮辱は牲畜九頭五回、シュレンガに加へられた同様の侮辱は其罰牲畜七頭三回、（尙行爲による同様の侮辱に對しては其罰牲畜九頭六回其他）、重罰、事實上の財産没收は、主な王公に加へられた、侮辱に對してのみ科すのであ

る。而るに王公の地位にありて官吏となつてゐる者に加へられた罰はそれ程に峻しいものではない。即ち言葉による侮辱に對する罰は牲畜九頭、行爲によるそれを對しては牲畜九頭二回、又は牲畜九頭三回である、(十七條、二十條参照)。重罰は又僧侶に屬するアイマークを強奪する者に對しても科す。即ち胴鎧一百、駱駝百頭、家畜千頭の罰である。更に法規は附言してゐる「假令僅かな物を強奪すと言へども重罰を科すべし」と(第五、第二條参照)。

C、國及び政府に對する犯罪

此の部門の犯罪に就いて述べるならば、強敵の出現を報告せざる者は死刑に加ふるに破産、其の子孫は没落せしめられる(十三條)。同様の刑罰は、警鐘が打ち鳴らされた時に馳せ参しない者にも科せられる(十四條)。危險に瀕せる王公を見殺しにする者は死刑に處せられ、破産に歸せしめられる(十一條)。人民を虐殺し、大アイマークを強奪する者は破産せしめられ(第一條)、小アイマークを強奪する者は胴鎧一〇〇具、駱駝百頭及び馬千頭の罰であるが、尙ほ犯人が官吏であれば其他に價値ある物五個を與へねばならぬ。若し然らざれば、價値ある物一個を與へ、加へた損害を填補せねばならない(第二條)。敵の攻撃に對し援助を拒否する王公は一主たる王公は胴鎧百具、駱駝百頭、馬百頭の罰、小王公は胴鎧十具、駱駝十頭、馬百頭の罰(第四條)、若し、王公が多數の逃亡者を引渡さなければ胴鎧百具、駱駝百頭、馬千頭の罰に處せられる(八條)。法規に違反する主たる王公は駱駝十頭、馬百頭の罰、中位の王公は駱駝五頭、馬五十頭の罰、小王公は駱駝一頭、牲畜九頭三回の罰、タブナン及び四人の主な官吏は駱駝一頭、牲畜九頭二回の罰、オーロー官吏は駱駝一頭、牲畜九頭の罰(十條)。

D、官吏の犯罪

主權者の教訓、命令及び法律を一般に遵守せしめる爲め、王公、小王公、上級官吏、テムチ及びシュレンガが何人を毆打するも、其れは犯罪とはならない。従つて罰せない。假令、被毆打者が毆打の爲めに死すとも罰せられない。然し、そうでなく暴慢の爲めに毆打する時は罪となり罰せられる。重い毆打を加へる者は其罰牲畜九頭、中位の毆打は牲畜五頭、輕打は馬一頭の罰を科せられる(二十一條)。何人を問はず、王公への提供を缺く者は牲畜九頭九回の罰、上級官吏のそれを缺く者は牲畜九頭の罰、小王公のそれを缺く者は馬一頭の罰を科せられる(二十六條)。秩序を維持せぬ村長は牲畜九頭の罰に處せられ(六十條)、或る使命の下に派遣された使者が、若し、出發せぬ時は牲畜九頭の罰に處せられる(九十八條)。

テムチ及びオトクの支配者は、若し貧民救済を怠るならば其の罰牲畜九頭を科せられ免職となる。若し怠慢の爲め貧民が死ねば、彼等は殺人犯の如く處罰される(百二十二條)。犯せる竊盜事實を隠蔽する十家の長は、手を斬り取られ、他の者は鐵鎖を身に附せられる(二十三條)。裁判官は事件を判決するに當つて、王公、法廷の分け前を與へない時は、其の分と同様の罰二回を科せられ(百二十八條)、三度誤つた判決を宣告せし裁判官は其の職を奪はれ(百二十九條)、法律に準ぜず、不眞面目な不正判決をなす裁判官は職を剝奪され、彼が受取つた賄賂は沒收される(百三十三條)。

若し全アイマークが其場所を變更すれば、アイマークの支配者は牲畜九頭の罰に處せられる(百三十二條)。敵前で逃亡する者は處罰され、主な王公は胴鎧百具、駱駝百頭、五十家及び家畜千頭の罰、小王公は胴鎧十具、馬百頭の罰、オーロー官吏は三つの價値あるもの、及び三家族、馬三十頭の罰を夫々科せられ、又武装せる一般人は武器をつ

けたる馬四頭、兵士は一箭筒及び馬一頭の罰に處せらる(第十一條)。

E、社會に對する犯罪

公衆の生活様式及び道徳に對する犯罪は凡て法規に従つて罰せられる。其れは非常に澤山ある、以下すべて之に屬するものである。

他の男と姦通する既婚婦人は處罰され、婦人は牲畜四頭、男は牲畜五頭の罰を科せられる。不義をなす少女は罰せられないが、然し其相手の男は牲畜九頭の罰を科せられる(六十九條)。疲勞したる馬の交換又は夜の雨宿りを拒否する者は三歳牝馬一頭の罰であり、子供の無い婦女に夜の雨宿りを拒否する者は其罰として袖なき胴衣一枚であり、若し、犯人が自ら辯解せんとするならば宣誓を與へらるべし(二十四條)(註)。

註 レオントウイツ氏は、此點に就いて淫賣婦に對する好意であらうと想像してゐる。

コウミス(牝馬の乳)の提供を拒否する者は、其の罰羊一頭に處せられる(八十七條)。十歳以上の少女の乳房を掴み接吻をなす者は處罰せられる(七十三條)。何人を問はず、燃え盛る爐の中に棒を投げ込む者は處罰され、若し爐が王公に屬するものであれば、彼は牲畜九頭九回の罰を科せられ、若し王公の臣に屬する爐であれば牲畜九頭の罰に處せられる(九十條)。

F、個人に對する犯罪

殺人

貴族を(放火で)殺す者は破産罰に處せられ、中流階級の人を殺す者は牲畜三百頭、價值ある物三十個の罰、下流

階級の其れは牲畜九頭十五回及び價值あるもの一個の罰に處せられる(五十九條)。父又は母を殺す息子は罰として完全なる財産の没收(三十條、三十一條)。離婚された妻を殺す者は牲畜九頭五回の罰(三十三條)。男奴隸を殺す者は牲畜九頭五回の罰。女奴隸を殺す者は牲畜九頭三回の罰(三十二條)。他人の妻を殺す婦人は被害者の夫の意向に依り、殺人犯と同様に罰するか又は耳を斬り落して他の男に嫁せしめるか、何れも被害者の夫の自由である(三十三條)。逃亡者を殺す者は處罰される(九十九條)。息づまつた者を殺す者、又は醉態を以て他人の家に来たり(註)便通に行く者は牲畜九頭五回の罰に處せられる。

註 蒙古人は之を悪しき前兆と考へてゐる、成吉思汗の法典に依れば斯かる犯罪は死刑を以て罰して居る。

刑罰は次の如き場合に於ては軽減される。即ち掴み合ひの争ひ中、人を殺す者は牲畜九頭、及び價值ある物一個の罰、二人の競技中一人が他の者を殺せば其の罰は牲畜九頭であり、若し其場に數人の競技者が居つたならば、其罰金は競技者の數と同數を牲畜九頭支拂はねばならない。若し殺された者が成人であれば、價值ある物一個を右罰金に附加して支拂ふ事になつてゐる(七十五條)。戦闘に於て同盟の一員を偶然に殺す者は牲畜九頭の罰(五十四條)、狩獵に於て偶然に人を殺す者は其の罰は普通半分だけ科せられる(五十五條)。若し狂人が人を殺せば彼の財産の半分は取られる(四十四條)。絶えず人に損害を加へる狂人(狂暴なる者)を殺す者は、何等罰せられない(四十五條)。家畜又は家内動物によつて殺された場合には、一般に該動物の所有主は處罰され、若し其家畜が所有者に責任ある場合其の家畜が貴族を殺せば、其の所有主は牲畜九頭及び貴重なるもの一個の罰、中流階級の者を殺せば牲畜五頭の罰、下流階級の者を殺せば貴重なる物一個の罰に處せられる。若し人を殺した家畜が看守されて居りながら、畜群の外に出

てぶらく出歩いて居つたならば、其の罰は牲畜一頭（四十六、四十八條）、若し人の乗つてゐる馬が人を殺せば何人かの責任にある馬による殺人として罰せられる（四十八條）。何人かの狂犬によつて咬まれ、その爲めに死するならば其狂犬の所有主は罰せられ、貴族を咬んだのであれば牲畜九頭、中流階級の者に對して爲されたのであれば牲畜七頭、及び下流階級の者になされたのであれば牲畜五頭の罰に處せられる（四十四條）。

不具、傷害

人より六本指を斬り取る者は牲畜九頭五回及び貴重なる價値物一つの罰に處せられ、拇指又は食指を奪ひ取る者は牲畜九頭二回及び牲畜五頭の罰、第三指を奪ひ取る者は牲畜九頭、第四指―牲畜五頭、小指―牲畜三頭の罰に夫々處せられる（五十五條）。結局恢復する傷害を加へる者は牲畜九頭、及び貴重なる價値物一個の罰、軽度の傷害を加へる者は牲畜五頭の罰を夫々科し、矢を放ち衣服を射透す者は馬一頭の罰に處す（五十五條）。鋭利な刃物を以つて大なる傷を加へる者は牲畜九頭五回の罰、中位の傷を加へる者は牲畜九頭三回、小さな傷を加へる者は牲畜五頭の罰に各々處せられ、刃物を以つて突刺す者は馬一頭の罰、毆打の爲め、刀の鞘を抜く者は其の刃物は没收され、刃物を握みそして鞘を抜拂はせまいとした者の爲めに馬一頭の罰を科せられる（七十一條）。

強 姦

既婚婦人を強姦する者は牲畜九頭の罰、少女を強姦する者は牲畜九頭二回の罰、奴隷を強姦する者は馬一頭の罰を各々科せられる。

言葉及び行爲による侮辱

主たる王公に言葉を以つて侮辱する者は其の罰は破産、中位の王公に對して侮辱を加へる者は處罰される。言葉による侮辱に對しては牲畜九頭、行爲による侮辱に對しては牲畜九頭五回、小王公に加へた言葉による侮辱は牲畜五頭行爲により侮辱を加へた者は軽度の鞭打の代りに牲畜九頭二回、嚴しい鞭打の代りに牲畜九頭三回の罰を科す（二十條）。宮仕へ、及びシュレンガに言葉による侮辱を加へる者は馬一頭、羊一頭の罰、軽い鞭打の代りに牲畜五頭、嚴しい鞭打の代りに牲畜九頭の罰を科す（二十七條）。義父に鞭打を加へる義娘は、同様な鞭打を其れ以上峻しく打たれる―嚴しい鞭打を加へる者は鞭打三十回、普通の毆打を加へるものは二十回、軽い毆打を加へる者は十回、教師、父又は母に嚴しい答打を加へる者は牲畜九頭三回の罰に夫々處せられる（二十八條）。自己の息子に對し過大の毆打を加へる父は處罰される。嚴しい毆打に對しては―牲畜九頭、普通のものに對しては―牲畜五頭、軽度のものに對しては馬一頭の罰を夫々科す。義娘に過大の毆打を加へる義母は牲畜九頭二回、及び牲畜九頭に加ふるに貴重なる動物四頭の罰が科せられる（二十九條）。石又は棒を以つて他の男を嚴しく毆打する者（男）は牲畜九頭及び貴重なる價値物一個の罰、普通の毆打に對しては、馬一頭、羊一頭の罰、軽度の毆打に對しては三才の牝馬一頭の罰が夫々科せられる。拳又は索鞭を以つて嚴しく毆打する者は牲畜五頭、普通の毆打に對しては馬一頭、羊一頭の罰、軽度の毆打に對しては三才仔馬一頭の罰を夫々科す（七十二條）。何人を問はず他人の衣服を引裂く者は二才の仔馬一頭を支拂ふことになつて居り、帽子より房及び辨髪を引ちぎる者は牲畜五頭の罰、髻を引ちぎる者は馬一頭、羊一頭の罰に夫々處せられ貴族の顔に唾を吐き掛け又は泥を投げつけ、又は貴族の馬の頭を鞭打するか又は彼を馬より引降す者は夫々馬一頭を支拂ふべしとなつてゐる。之等が同時に爲される時は馬一頭、羊一頭の罰金に處せられ、同様の犯罪を下流階級の人

々に爲す者は仔羊を有する羊一頭の罰に處せられる(七十二條)。何人を問はず婦人の毛髪を引ちぎり又は帽子より房を引ちぎる者は牲畜九頭の罰を支拂ふ事になつてゐる(七十三條)。端正に馬に乗つてゐる者を侮辱するか又は彼をあざ笑ふ者は馬一頭の罰に處せられる(二十二條)。

誣告申傷

・嘘言を以つて他人に竊盜の罪を歸せる者は處罰され誣告により得たる家畜は沒收される(九十三條)。

G、財産に對する犯罪

強盜

強制的に酒を持去る者は馬一頭の罰に處せられ(八十六條)、同様の罰は帳幕(蒙古包)を破壊する者にも科せられる(明らかに強盜又は竊盜するの意を有し)。

竊盜

竊盜はオイラスト法により峻嚴に罰せられてゐる。殊に三度竊盜を犯す者は其の罰は破産を以つてする。「何人を問はず三度竊盜を爲す者は離散せしめ没落せしむ」(第二百二十四條)と明示してゐる。此の次に峻嚴なる罰は、遊牧蒙古人の生計手段として準備せる基礎的財産の竊盜犯に科す—即ち家畜の竊盜、駱駝一頭を竊盜する者は牲畜九頭十五回の罰、去勢された馬又は種馬を各一頭竊盜する者は牲畜九頭十回の罰、牝馬一頭を竊盜する者は牲畜九頭八回の罰、牝牛一頭又は二歳仔馬又は羊一頭を竊盜する者は牲畜九頭六回の罰—「盜まれし頭數と同回數を犯人より取るべし」—と第六十條は表示してゐる。迷へる家畜を隠匿する者があれば、其の近くに住んでゐる者は牲畜九頭の罰に處

せられ、すつと遠くに住んでゐる者は、竊盜犯の如くに罰せられる(六十六條、六十七條)。自己のものなりと言ひつゝ、迷へる家畜を所有する者は何人を問はず牲畜五頭の罰に處せられる(九十二條)。

軍備の竊盜に關しては、次の如き刑罰が科せられる。甲冑、胴鎧、よき弓、及び十本の矢の入つてゐる箭筒を竊盜する者は牲畜九頭三回の罰、(ヘルメット帽)、鐵砲、よき刀、及び軍刀、普通の弓、箭筒の竊盜をなす者は牲畜九頭の罰、悪しき刀及び軍刀各一振竊盜するものは牲畜五頭、悪しき箭筒及び弓を竊盜する者は仔羊を有つ山羊一頭の罰を夫々科す(三十八條)。貴重な家庭的動物を竊盜する者は、次の如き罰が科せられる。絹で蔽うた羊の皮より成る上衣、黒貂の上衣、虎、豹の敷物、又は他の動物の敷物及び貂の毛皮上衣、よき銀の据付け鞍、手綱、及び拍車は勿論以上の物を竊盜するものは牲畜九頭五回の罰、よき羊の毛の上衣、又は虎、豹の毛皮、又は毛のクロス、モロツコの毛皮、又は他の毛皮、絹のガウン、よきハンマー、鐵床、ヤツトコ、鉄等を竊盜する者は牲畜九頭、狼、狐、獾又は海狸の毛皮の上衣、又は敷物等を竊盜するものは牲畜九頭三回の罰、銀の据附鞍、手綱、及び拍車は勿論の事、狐山猫、獾、又は海狸の毛皮、綿のガウン、又は普通の羊の皮の上衣等を竊盜する者は、牲畜七頭の罰、黒貂、狐、栗鼠、豺(ヤマイヌ)山猫、貂等を竊盜する者は、若し毛皮が大であれば三才牝馬一頭の罰、若し、小さい毛皮であれば一匹の羊の罰を夫々科せられるのである。民に掛かつた野生動物を竊盜する者は、その皮に對すると同様の罰に處せられる(七十八條)。家庭内の貴重ならざる物を竊盜する者は次の如き罰を科せられる。小刀、矢、仕上鍔、綱、よき帽子、長靴、スボン、鉄、フェルトの外套、シャベル、ヲノ、肉(羊の獸體)、悪い羊の毛皮の上衣、鋸、鳥又は魚を捕へる網、及び網、艮、及び其他之と類似の物等を竊盜する者は—法律は指を切斷せよと命じてゐる。が然し、

犯人は其罰として牲畜五頭を支拂つてよい選擇權を持つて居る(百九十七條)。小さな家庭内のもの、例へば手綱、投げ網、縫針、ホタン、コツブ、敷物、盤、帽子、長靴、靴下、羊の皮、革紐、釣針、其他の物等を竊盜するものは一よき物を竊盜する者は仔羊を有つ羊一頭の罰、悪しき物を竊盜する者は仔羊を有つ山羊一頭の罰に夫々處せられる(百八條)。動物の屍を自家用に供する者は、死後十日以内であれば、其罰は三才牝馬一頭である(百十三條)。他人の牝牛の乳を内密に搾る者は、第百十三條と同様の罰が科せられる(百十五條)。盗まれた家畜の足跡を打消す者は牲畜五頭の罰を科せられ(九十五條)、捕縛された竊盜犯を救ひ出す者は、牲畜九頭及び若干の價値ある物の罰に處せられ(九十七條)、竊盜犯より家畜の奪還に助力した者は其報酬が與へられる(百三十條)。

詐 欺

王公の貯藏品を詐つて使用する者は馬一頭の罰(二十六條)、使者の稱號を詐謀して専用し、又馬車糧食を使用する者は次の如き罰を科せられてゐる。牲畜九頭又は牲畜五頭及び笞打五回の罰、之等の一つの罪を犯す者は牲畜五頭の罰を科せられる(二十三條)。

放 火

放火は嚴しく罰せられてゐる。何人を問はず火を放つ(他人の所有物に)者は峻嚴に處分すべし(規則第五十八條)悪しき意圖を有する者を隱匿する者及び裁判の回避を補ける者は、牲畜九頭七回の罰を科せられ、斯る人の所有物を隱匿する者は牲畜九頭三回の罰に處せられる(七十七條)。以上の様なものがオイラート法規の主たる刑罰法である。上記に引用したものより窺知される如くに、オイラート法は一般的原则に缺けて居り、而も一つの純粹なる具體性と

偶然性を帯びて居る。従つてそれは十二分に理解し得ないのである。其の刑罰は犯罪の客體に關してのみならず、又刑罰の主體に關しても變化してゐる。そこには法律の前に平等はない。

六、裁判制度及び裁判權

裁判制度及び裁判權に關する法規は不充分であつたが、噶爾丹汗は此の問題に就き全然充當した特別(第二)布告を發布して、此の缺點を補なひ完成した。(ゴルストウンスキー氏版第三百三十四條)。

オイラート法規に依る法廷、及び裁判執行は次の如くである。「オレト人とトルキスタン人民間の善と惡とは審査機關に依つて處分せざる可らず」換言すれば法廷を通じ「噶爾丹汗台吉の布告に則る」とならねばならないのである。ホートン人は彼等自身の事件はホートンの裁判官により裁決せねばならない。全住民に關する事件は最高法院(裁判官)によつて決せられる。即ち、オトクとトルキスタンとの相互關係は、最高法院(裁判官)に委嘱されてゐる(百三十四條)。訴訟は裁判所が令狀を發し得る様にはなつてゐない。原告(出訴者)が自ら訴願せねばならない(百三十四條)。事件は兩當事者(被、原告)が一定場所で、雙方の面前で審査されるのであるが、原告被告兩者の缺席の場合に缺席裁判は行はない(百二十八條、百九條)。證人の前で原告は被告が法廷に召喚されるといふ事を三回被告に通告せねばならない。更に證人の前で原告は召喚狀の發送濟を法廷に通告せねばならない。若し、かく三回に亘る召喚狀を發したるにも拘らず、被告が法廷に出廷せねば、彼は(使者を通じて)法廷に召喚されるのである。先に召喚に應じて出廷せざる者は(馬一頭の)罰金に處せられる。其法廷に於ての事件が正當と認定されやうと又破棄されやうと

も處罰される(百九條、百二十六條)。主たる證據は、犯罪の主體及び證人の證言である。證人は善良なる人換言すれば信頼し得る人―例へば貴族―と信頼し得ない人、例へば奴隸との二種に分離されてゐる(六十二、百九條)。女奴隸は證人として認められて居ないが、然し、竊盜の證人として竊盜に罹つた動物の骨及び肉を持參して來るならば彼女の證言は考慮に入れらる(百一條)。證人は裁判を助け、其の報酬が與へられる。即ち、罰金の中牲畜九頭及び法廷に依り判決された量に比例して他の所有物の一部を受取る(百六條)。竊盜は足跡を辿る方法で審査され、若し足跡が貴族の證人の前で終つておれば、該事件は(竊盜に關する)法律に依つて裁かれ、貴族證人が居らない時は該事件は法廷に依つて審査され、若し原告のみが竊盜犯の足跡を追つて行つたのであれば、其の村の年長者は、犯人が有罪と決定された時には罰金を科せられる所の竊盜犯を捜出すと言ふ宣誓を爲さねばならない(六十二條)。

犯人が無罪であつても、其年長者は尚ほ秩序維持に對する怠慢の故を以つて牲畜九頭の罰に處せられる(六十二條) 必要の場合には搜索は遂行されるのであつて、何人と言へども、搜索を拒否する者は處罰される(百十條)。王公の法廷の爲めに租税が徴收される(百二十八條)。法規は雙方の犯罪行爲の相殺を許容してゐるが、然し此制度は充分綿密に限定されてゐる「犯人雙方の間に相互的犯罪の構成を法廷が確定するも、其犯罪に對する證人が存在せざれば、認められざるべし。如何なる場合に於ても、事件は審理さるべきものなり」と(八十五條)。

斯くして吾々は、裁判の執行は法律が自分自身の手によつて選擇するを許容した段階に始り、次いで住民の純粹なる個人間、又は家族間の問題となるに至り遂には國家の手に進轉してゐるものである事をオイラト法規に依つて窺知される。裁判所は一つの政府制度になつた、其れは地方法廷と最高法廷とに分離されて居る。法廷に於ける判決の遂行

されんが爲めには、該判決の處置は國家によつてなされて居るが、處置に關する條項は種々あつた。王公の利益の爲めの手數料租税其他等。

然しながら、それと同時にオイラト時代の裁判組織には、之に先行した時代の若干の面影が尚ほ保存されてゐた。オイラト時代よりもつと初歩的の國家の面影が、換言すれば法律を私的に自らの手で選擇した時代の面影が尙殘存してゐた。例へば、原告(出訴人)は訴訟を提起するに就いては直接、且つ指導的役割を演んじてゐる。此の過程は、先づ法廷に被告を直接召喚し、其旨法廷に通告するに始まる。原告被告の雙方が法廷に出廷するのは義務であり、證人は裁判の爲の援助に對して報酬が與へられる。或る場合に於ては、法律を原告自らが選擇する方法を取り法廷外で解決される事がある。「負債に關しては、債權者證人の面前で三度通告をなし(然る後)取立てるべし」。通告の際に債權者は、其の旨シユレンガに報告せざる可からず。若し追跡の最後が、貴族證人の面前であつたならば遂行される法律(竊盜に關する)を適用して差支へない。

若し證人たる貴族が居らないならば、該事件は審査されねばならない(法廷によつて)―(規則第六十二條)。事件の最初に於ては、法廷の參加なくして問題は解決されてゐるのである。訴訟手續に關する條項は、十分に推考されて居ない、それは又専ら訴訟手續のみを取扱つたと言ふ噶爾丹汗の第二布告を見ても言ひ得る所である。此の布告は次の言葉から始まつてゐる。「精確な諸法律に缺けてゐる爲めに、訴訟は或る時には誤まれ、屢々裁判の正道を外れてゐる事がある。故に吾々はそれ等の問題に着手し、此處に諸法の確立を歸したのである……」噶爾丹汗が其當時まで慣習法の影響下に殆ど取殘されてゐたものを裁判權の範圍内に於て成文法たらしめんとし大いに努力した事は疑ひも

ない事實である。彼は自己の布告中で善とは如何なるものか、又悪とは如何なるものか判然と判決する事を強調し、又各個人は自ら裁判其他の執行者となる可からずと強調してゐるのである。吾々はかゝる故に、現に今研究しつつあるオイラト時代を個人的裁判制度より國家による裁判組織(制度)への過渡期として之を考察する事が出来よう。

蒙古オイラト法規、及び其の補足的布告の性質に就いて言ふならば、先づ第一に引續き起る事實問題としてかの成吉思汗の「大ヤツサ」とは廣汎に亘つて相違してゐる事を明記せねばならない。此處に於て、宗教問題の範圍では成吉思汗の「大ヤツサ」は宗教的寛恕の原則を採り、凡ての宗教を尊敬せよと教へ、如何なる宗派に對しても等差をつける勿かれと禁じてゐるに反し、オイラト法規は喇嘛教を以つて眞實の而も最大最上の宗教なりと宣言し、シヤマン教を告訴して居る。道德の領域に於ては「大ヤツサ」は姦通を罰するに死を以つてしてゐるに反し、オイラト法規は男及び既婚婦人に對しては、唯僅かな罰を科して居るに止まり、又少女は何等罰せられて居らない。オイラト法規の刑事犯罪に對する抑壓は、「大ヤツサ」それよりは可成り溫和を示し、大ヤツサの死刑罰は濫用され、屢々些細なる罪に對してすら科してゐる。然るにオイラト法規に於ては死刑罰は稀有の異例に止まつて居り、刑罰の組織は凡て財産罰、其他に基礎が置かれて居る。然しながら、大ヤツサとオイラト法規との間に以上の如き重大なる相違の存在と相並んで、又共通性も發見されるのである。物による罰、これは主として家畜であるが、かゝる物による罰はオイラト法規に於て非常に一般的なものであると共に、又大ヤツサに於てもそうである事を見出すのである。例へば、馬と共に發見され捕へられた馬竊盜犯は牲畜九頭九回の罰に處せられる如き(二十九條)。死刑は金錢又は家畜を支拂つて回避し得られる如き之である(二十八條)。食物を食し以つて息づまつた者は帳幕(蒙古包)の下の穴

より逐ひ出し、死刑に處すべし(三十一條)。と「大ヤツサ」は命じてゐるがオイラト法規は他人の家で息づまつた者を殺すに就いては、其罪に對し一定の牲畜五頭の罰にあるにしても、それ以上何等の罪とはならない(三十九條)(註)事を強調してゐる。

註 第四十九條「若し他人の家にて息づまりたる者又は醜酌したる者が―それは犯罪にあらず―殺さるならば、殺人者は牲畜九頭五回の罰に處せらるべし」と。

大ヤツサは火に放尿する者は罰するに死刑を以つてして居り(第四章)、又料理してゐる火を踏む事を禁じて居る(第十二章)。然るにオイラト法規は火の中に木の丸太を投入し、火を消す者は何人にも重罰を科して居る(九十條)。大ヤツサも亦該法規も共に論争中、又は鬭争中當事者の一方を助ける事を禁じて居る(斷片三、法規七十一條)。又來客を厚遇する事は何れも等しく命じてゐる所である(斷片十二、十三、法規第二十四、八十七條其他参照)。之を要するに生活様式に於ける或る類似のもの、並びに十七世紀の蒙古人間に依然存在して居つた慣習等が或る法律を同様に存在せしめて居つたのだ。然し、蒙古慣習法の上記の二つの記録間の相違は、諸法律を共に等しくさせる共通性及び社會的生活、慣習の根本的問題にまで聯關せしめる共通性以外に、もつと考究すべきものがある事は否定し得ない。

一六四〇年の法規は其の内容に就いては、舊ツアヂンウイチクと可成り接近してゐる様に思はれる―それは姦通、婦人、息子への財産の一部分配等が如何なる方法を以つて扱はれてゐるかを比較すれば充分満足し得られやう。事實了解し得られるのだ。何故かならば、兩者の發布した時を考へて見れば相互に接近して居り、主たるオイラト同盟

の法典なんだからである。唯遺憾な事には舊ツアチンヴィチクは、其の僅かな断片のみが吾々の手許に傳へられて居るに過ぎず、それ等の關係を一方に於ては成吉思汗の法典に、他方に於ては一六四〇年の法規―新ツアチンヴィチクにより精確に關係づかしめるに充分な説明が爲し得ないことである。

一六四〇年の法規は、前蒙古時代（蒙古時代に先行する）の過去のロシア法律と類似してゐる或る興味深い特長を含んでゐる。それ等の事實は非常に相違する兩國住民の間に、共通する原始的慣習法制度が存在して居つた事を遙かに證明してゐるのである。斯る共通制度間に次の如き事があるのを明記せねばならない。蒙古法規も又ロシア・ブラウダも犯人の足跡を追つて行く主義を取つてゐる（法規六十二條、九十五條、カラムジン氏版のロシアブラウダ八十八、八十條参照）。該法規、及びブスコフスカヤ・ストナヤ・グラモタは、多少は異なつた方法であらうとも、共に紛失所有物の立證主義を取つてゐる。雙方の法律に依れば、紛失物は善意に取得したる事を立證し得ない物は没收されるが、若しそれが第三者より、例へば買得したる事が立證し得るならば、ブスコフスカヤ・ストナヤ・グラモタに依ればそれは何等問題とはならない。然るに、該法規に依れば其の半分（優れたる部分）は没收されるのである。（法規百十九條、ブスコフスカヤ第四十六條参照）。該法規も過去のロシア法律も同様に負債を償却し得ざる場合は犯人は被害者に渡すことを認めてゐる（「自ら償却し得るまで犯人を引渡せ」―ロシアの過去の法律）。又之等の法律は原告が法廷に被告を三渡召喚する事を認め、其他數個の點を認めてゐる。

一六四〇年の法規は蒙古氏族の氏族生活、氏族組織に基礎を置いて居るものである。各家族は其のオーロス・ホートンと共に一定の土地を流浪してゐるのであるが、各アイマークは他に移行して行く事は禁じられて居り、アイマー

クは諸氏族の諸長下に近親、又は遠戚に當る人々が住んで居る―十人以上の年長者、即ちシュレンガ・テムチ・オトク（ザイサン）の行政及氏族王公等の下に、然しながら、同時に、吾々が現在考察しつゝある時代に於ては、氏族生活様式に既に或る程度の變化が起つてゐた。原始氏族共産に代はつて私有（家族的ではなく個人的な）、不動産、及び家畜農具の形となつてゐる財産等が現はれ、そして社會は相當に差別立てられてゐた。

吾々は貴族と平民に分割されてゐた蒙古人が、一六四〇年の法規には上、中、下流及び奴隸とに分割されてゐる事を知るのである。貴族は〔一〕首長（汗、コンチイヂタイシャ）、中位王公（オーローの長に立つてゐる官吏たる王公、王公タフネン）、及び小王公（官吏でもノーエンでもない）等に分割されてゐる（十、十二、二十、二十一、二十六、三十五條）。諸王公は其の臣より（物品による）物納税を收受す（二十六條）。彼等王公は（又は少くとも官吏たる王公）裁判手数の頒け前の一部を取る（百二十八條）。其手數料は嚴しい罰を以つて支持され、犯す可らざるものであつた（二十、五十九條）。〔二〕タフネン―王公でもなく官吏（行政官）でもない（十條、十一條）。〔三〕行政官及び民族ザイサンの長、テムチ、シュレンガ及び宮仕人（十、十一、二十、三十五條）。

中流階級はタルクハン（免稅者）旗民及び兵士より成り（十一、二十、五十五條）、下流階級に屬するものは一般人―商人、農夫及び家畜牧養者等である（十一、十五、三十九、五十九、四十四、四十六、百條）。下流階級の人々は、中流の人々よりも、凡ての場合に於て價值低しとされ、又中流の人々は上流の人々よりも價值低しとされてゐる（上流の者は中流の者よりも贖償、罰金は少なく、しかも、侮辱=就いては中流のものよりも峻嚴に罰せられず、法廷に於ける證言は中流の者は上流の者程に重要視されて居らない。其他）。一般的に言へば、彼等の法律上の重要性

は、法規に依れば、蒙古人が有する社會的身分に比例して行くものである。奴隸は社會的に最も低き身分に屬し、其の大部分は捕虜より徵集せられたものである。或る場合に於ては、奴隸は物と同一視されて居る。例へば、奴隸、胴鎧又は武具の奪還に對する報酬は、それ等と同様なものが與へられてゐる(五十七條)。奴隸は全然彼等の主人に依存してゐるものであつて、彼等は其主人の許を離去する事は出來ず、假令王公が逃亡奴隸を其所有主に返還する義務ありとも、奴隸は其の許を離去する事は出來なかつたのである(八條)。然しながら、奴隸は決して權利能力を全く剝奪されてゐたわけではない。例へば人に屬する奴隸を殺す者は重罰に處せられ、即ち男奴隸を殺す者は牲畜九頭五回の罰、女奴隸を殺す者は牲畜九頭三回の罰(三十二條)に夫々處せられる。犯罪の主體を陳述する女奴隸は、法廷に於て證人となり得た(百一條)。然るに男奴隸を犯罪の主體を陳述せずとも證人として法廷に立つ事は許され、女奴隸を強姦するものは馬一頭の罰金が科せられるのである等々。

オイラート民族(コロロス、ホーシヨート、ホイト及びトルゴート而して、トルゴートがロシアに移住して一つの別な種族、又は氏族ツルポートがコロロス種族よりつくられた)はオイラート人の最後の時代に諸氏族(子孫)——オートン、アングイ、シサイス及び數家族に分割した。オートンはコロロス汗(コンタイシャ)の采地を結成し、アングイは他の汗及び王公の采地を、シサイスは僧侶の采地を結成した。キビタス(家族)の數は二十萬家族、男女オイラート人の數は六十萬に達した。

第二款 蒙古に對する支那の法制

第一項 理藩院第一蒙古法規

一、行政法規

A、祖祝、義務、人頭税及び徵兵

法規は、外盟(所謂關外)又は旗の人口數を年三回確める事を規定し、其數を秘す者は重罰に處すと規定してゐる(第二節一、二條)。徵兵は一般性を帯びてゐるが、法規は之に除外例を認めてゐる。其れは同一家族の三人の男の中一人は兵役義務を免ぜられ、戦時の場合は二人の者が戦地に送られ、残りの一人は家庭に居残るべき事を規定してゐる(二、三條)。什長は十家族(蒙古包、帳幕)以上に一人が任命され、騎兵中隊は百五十人より成り、六個中隊は一聯隊を構成して居る(第二節一四、十五條)。王公及び台吉は毎年軍隊、武器、武具を檢閲せねばならない(第四節一、四條)。(註)

註 イオアキンフ著「オイラート又はカルマツク人の史的研究」一三〇—一三五頁、「蒙古の手記」一三四頁以後。
コステンコツフ著「カルマツク人に關する史的統計的研究」一二〇頁参照。

B、糧食の強制的提供

王公(支配的)は人民より特別人頭税の一種類として同一種の糧食を收受する。法規は此種の税を次の如く定めて

居る一五頭の有角動物及び羊一頭以上の所有者は羊一頭を人頭税として徴收す。羊二十頭を所有する者は前記と同様
 羊一頭の人頭税、羊四十頭及び其れ以上の所有者は人頭税羊二頭、二頭の有角動物の所有者は税六鍋、有角動物一頭
 の所有者は人頭税税三鍋、王公が宮廷に貢納する時又は會議に臨む時、又はキャンブ地を變更する時、又は王公の娘
 息子が結婚する時に於て、若し王公が百家族（被治者）以上を從屬して居れば、王公は各十家族より馬一頭及び牛馬
 車一台を取る權利を有す。又三頭の乳牛、及び其れ以上の乳牛所有者よりは革製乳器一杯を取り、百頭以上の羊所有
 者よりはフェルト一反を取る權利を有す（第二節一十九條）。許可されてゐる以上のものを要求する王公は裁判に附
 される（第三節一十九條）。王公は旅行中人民より糧食を取る權利を有し、法規はかかる場合糧食の量を規定してゐ
 る（第一節一十七條）。

驛馬に對する命令を保持してゐる使者は、驛馬を使用し、驛に於て旅行の爲めの糧食を取ることが出来、かかる提
 供を拒否する者は、何人も牡牛一頭に處罰される。若し馬車提供を拒否する者は、牲畜九頭三回の罰を科せられる（
 第二節一十八條）。凶作の場合に於ては王公（支配的）台吉、富める家族及び喇嘛僧は適當なる量を收め、貧民救済
 の義務を負せられて居る。若し其の資力に不足を來たす場合には、全部セイム（地方）より金錢が募集され、若し凶
 作が數年間打續き饑飢に困苦せる人民を救ひ得ない場合は皇帝に出訴すべしと（第二節二十一條）。（註）

註 蒙古の支配的王公は、支那政府により六階に分かれてゐる。即ち親王、郡王、具勒、具子、鎮國公、輔公、汗
 の稱號は四人の支配的王公のみ使用してゐた。土謝圖汗、扎薩克圖汗、車臣汗、三音諾彥汗之れであるが盟長
 の選出せられて以來、彼等は政治的意味を全然失つてしまつた。

C、僧侶に關する法規

喇嘛教は蒙古に於てはあまねく流布せる宗教であり、其の僧は尊敬を享有し、容易に位階にありつけたのである。
 喇嘛僧は徵兵を免除されて居り、且又喇嘛僧の數（屢々漂泊する者又常に道義上よからぬ者）が非常に増加するに至
 つた爲め、引續き法規を出して此の必然的結果に對する防備策をほどこして居る。喇嘛教師の或る數（職員）は常
 に定められて居り、彼等は常に登録されて居つた。首長及びゲールンは私的に教徒として入る事は禁じられて居る。
 換言すれば、登録簿に登録なき者、並びに一定數以上は禁じられて居つたのである。そして登録なき喇嘛僧及び教徒
 を家の中に入れることは禁じられて居り、此の規則を破る者は主たる僧は職を免ぜられ、そして牲畜九頭三回の罰を科
 せられる（第二條）。何人を問はず、秘密に己が家の一員を喇嘛たらしめるか、又は漂泊の喇嘛僧、及び教徒を隠匿す
 る者は、法規に依れば最高法廷に起訴されて峻嚴なる罰を科せられ、漂泊の喇嘛僧及び教徒は其所屬する旗にそし
 て旗長の許に送られるのである。兵役の義務ある者は、老人及び登録より除かれて居る不具者を除外して其他の者は
 秘密に喇嘛僧、又は教徒になるを禁じられて居るのみならず、又オーバシス（誓約して宗教生活に入り、法衣を纏ひ
 ながら許されて俗業についてゐる男）となる事も禁じられて居る。婦人はシバガンタースとなる事は禁じられて居る
 （第二節一八、九條）。喇嘛僧及びゲールンは黄色、鮮黄色、暗紅色の衣、薄紅色の衣を身に纏ふことは許されてゐる
 （もつと正確に言へば一命ぜられてゐるのだ）。オーバシス及びシバガンタースは以上の色彩の衣を纏ふことは禁じ
 られて居る。此の規則に違背する者は高僧は罰金に處せられ、然らざる僧（パンヂイ、オーバシス、シルガンター
 ス）は八十回の笞刑に處せられる（第六節一條）。起訴されたる喇嘛僧は、其の地位を剝奪され、然る後に裁判に附

せられるのである。若し斯る喇嘛僧が釋免されるならば、地位は返還される（第六節一五條）。有罪と認定されたる喇嘛僧の財産は沒收され、それ等は他の僧院の僧の爲めに使用される（第六節一五條）。

二、私 法

A、財産及び義務

此問題に關しては法規中には殆ど何等の條項もない。

B、土地の使用

蒙古人は割當てられたる土地に移住して行き、隣人の土地に侵入してはならぬと言ふ義務を負はされて居る。若し第一位、第二位の王公が己の境界を踏み越へて他の領土に侵入すれば、馬十頭の罰に處せられ、具勒、具子及び公が侵入すれば馬七頭の罰、タイシヤス、タブネンが侵入すれば馬五頭、平民が侵入すれば各家族より牡牛一頭の罰を夫々科せられる。若し他の領土に侵入し、其處に長期間に亘つて居る者は、王公、タイシヤス及び俸給を受けてゐないタブネンは馬五十頭の罰に處せられ、一般蒙古人に就いては他人の領土に侵入した者も、又それを知りながら申出なかつた者も共に彼等の全家畜は沒收される（其土地所有者の利益の爲めに）（第五節一、二條）。通商は唯支配的王公及び將軍の許可を得てゐる者及び特殊な官吏の支配下にある者のみに許されてゐる。若し十人以上の商人が居る場所ならば、各々十人の商人は別々な組合を組織せねばならぬ（第五節一三條）。

C、家 族 法

一般人との婚約に際して花嫁に與へる贈與物（身代金カリム）は、法規に依つて規定されて居る。即ち馬二頭有角動物二頭及び羊五十頭と定められてゐる。若し規定以上に與へられるならば、規定量以外の餘分は沒收され國庫に納められる。若し結婚前に花嫁となるべき者が死ぬ時は、其の家畜（カリム）は返還され、若し花嫁となるべき者が結婚前に死ぬ時は唯其半分のみが返還される。若し花嫁となるべき者が將來の妻たるべき者を否認すれば、彼は身代金たる家畜を喪失するに至るのである。許嫁が二十歳に達して居るのに、其の花嫁となるべき男が結婚せざる時は、許嫁の両親は娘を他の男と結婚せしめる事を許される（第二節一三條）。

註 一六四〇年の法規三十五、三十七條を参照

若し王公と婚約を結びたる女が他の王公と結婚すれば、彼女と結婚した王公も、又結婚せしめた女の父親も同様處罰される。第一位及び第二位の王公は其の罰十家族、他の王公は其の罰七家族、タイシヤス、タブネンは其罰五家族を科せられ、其の女はそれより奪はれて、最初の花嫁となるべき男に與へられる。若し一般蒙古人が女と婚約を取交はし、然る後他の男に結婚せしめるならば、彼女と結婚したる男及び結婚せしめた男は其地位の如何を問はず、牲畜九頭三回の罰に處せられ、若し彼等が何等の地位も有せざる者であれば牲畜九頭の罰、そして其の女は、それより奪はれ、最初の花嫁となるべき者に與へられる（第二節一十五、十六條）。

註 一六四〇年の法規第三十九條参照

夫は妻を離婚せしめる事は自由である。離婚せしめられた妻は、夫より與へられた贈與物を夫の家より持去る権利はないが、然し自分自身のもの（結納）は持ち去る事が出来る（第二節一十四條）。自己に子なき人、又は相續人は

同じ民族中の無關係なる者を養子として迎へる事が出来る。若し同じ民族中になき場合は―未知の人を養子として迎へ得る。養父は自己の願望を旗―王公、及びホーシヨンチャンゲイン（一地方を支配してゐる將軍）に届出て、正式の證書を作成したる後貰ひ受けた子供を己の家に入れ、自身の子として養育せねばならない。正式の届出により、王公及び將軍は養父の子として旗の登録簿に記入す。然しながら、若し王公將軍の許可なくして、そして正式の手續を履まずに子供を貰ひ受けるならば其の子は取去られて元の家族に返還される（第二節―十一條）。

D、相續財産法

死せる人の所有せし財産の相續人は、先づ第一に彼の息子である。それより直系の男系子孫に及ぶ。若し斯る相續人なき場合は、同一民族の養子で、しかも上記の正式手續を完了した養子が其財産を相續する。更に、若し斯る養子のない場合は、該財産は死せる人の近親か、又は遠戚に渡される。息子なく、しかも、親戚も無き場合は他民族の中の子供を貰ひ受けて養子となす。この者が財産を相續するのである。若し主人の死後同一家名を有する親戚が尙存在してゐるならば、他氏族より貰ひ受け、養子として妻の手で養育された者でも相續はしない。若し子供が妾腹より生れ、息子として育てられて居るならば、其の母は賣られる事も出来ないし、又他に結婚もなし得ない。さもなかつたなら母の手により育てられて其の子は息子として認められないのである。近親もなく、又氏族より貰ひ受ける養子も居らない時は、其の財産は復歸財産として見做され、支配的王公、又は台吉の財産となる（第二節―十二條）。

三、刑法

A、刑罰制度

支那刑法は蒙古法の刑罰制度に大影響を與へた。刑罰は其數甚だ多く、而も、慘虐なものであつて、時には犯罪人の嘲笑を買ふものもある。之等のものは蒙古人の單純な生活様式、及び遊牧民組織の種々なる特性とは常に調和を缺いて居る。蒙古法規に依つて科せられて居る刑罰の中次の如きものは明記されねばなるまい。

- (一) 財産沒收と犯人の家族の奴隸化を伴ふ死刑（第四節―十條、六節―一條、十節―十一條）
- (二) 寸斷に斬り殺される死刑（第七節―七條、十節―十六條）
- (三) 斬首による死刑（第九節―六條、十節―十一條、十六條）
- (四) 斬首による死刑は普通は獄に於て斬首され、次いで公衆に曝らされる（第六節―一條）
- (五) 犯人及び其家族を奴隸とすること（第六節―一條、十節―一條）
- (六) 犯人（唯獨り）を奴隸に處分すること（第二節―二條、四節―十條、五節―十六條）
- (七) 徒流刑（福建、廣西）
- (八) 徒流刑、湖南、山東等極邊不健康地に送られ、驛舎に於て過激勞働をせしめられる。
- (九) 雲南、廣東地方及び不健康地廣西への流刑（第六節―六條、其他）
- (十) 棒、笞又は鞭による折檻（第九節―二十條、十節―十一條、其他）

- (十二) 財産の没収(第四節—十條)
 (十三) 牲畜九頭により算定される罰金、罰棒一ケ年、半ケ年、三ヶ月(第十節—十一條、十四條、其他)
 (十四) 免職

(十五) 禁錮(判決を持つところの第六節—一條、其他)

(十六) カンギユを科すこと(梟架)

本法は一つの位階に依つて其刑罰の輕減を許してゐる(第六節—六條)。支那に於ける死刑は皇帝により裁可されて後に適用されたものである。凡ての死刑の宣告(其れはむしろ屢々不問に附せられてゐた)は、一件書類と共に審判廳に送られ、此處に於て其等は改められたのであつた。其の宣告が(審判廳により)確定され、而して犯罪が特に重要にして而も特殊性を帯びてゐるものである時には、例へば、自分の父親又は夫を殺害する等のものは直ちに皇帝に上達し、皇帝の裁可後に死刑は執行される。死刑を科せられる犯罪が普通一般的性質のものである場合には、皇帝に上達するのは秋まで延期す。審判廳は秋までに事件の大意、及び被告者名簿の準備を整へて秋に至つて決裁を皇帝に仰いだのである。(註)

註 事件が審査され確然と決定される報告の仕方に關しては、理藩院の第二法規中刑法に再々述べてある。

普通刑罰は一つの位階に依つて輕減された。斬首の刑は絞殺に輕減され、絞殺は體刑及び流刑に輕減された。諸々の判決確定後は犯人の名簿は刑罰執行の爲めに本國(支那)に送られた。皇帝の確然たる決裁に依つて死刑を宣告された者は、常に冬至前の十二月第一日に刑が執行された。其時まで死刑宣告を受けた者は獄に投ぜられて居たのであ

る。其の宣告に曰く「監禁後、獄中にて絞殺、又は斬首若くば命令確たる判決の來るまで獄に投すべし」と。

絞殺を宣告された犯人が若し釋免されるならば、犯人は被殺害者の親戚に牲畜九頭三回を支拂ふ義務あり(第十二節—二十一條)。

死刑に問はれる犯罪をなしたる者が、犯罪の露顯せぬ以前に高等法廷に來て其の罪を語り、罰輕減せられん事を歎願し、而して死刑の科せられざらん事を請願する時には犯人は百回の笞刑を科せられ、其の家族は奴隸となり財産は被害者に與へられる(第十二節—二十二條)。上に述べた様に該法規は、家族の一員が犯した罪に對しては全家族が其の責任を負ふべきを認めてゐる。(第四節—十條、六節—一條、二條、十二節—十六條、十二節—二十二條)。

「刑事上の犯罪」を爲したる蒙古人は、牲畜九頭九回を與へて自分自身を贖償し得。若し、彼が又自分の家族を贖償せんと欲せば、之は被害者の同意の上で許可される。支那人が殺される時に其の犯人が自らを贖償せんと欲せば、又自己の家族九才以上の各員に對し牲畜九頭二回を支拂つて自己の家族を贖償する義務がある。(第十二節—二十三條)九才に未だ達しない所の子供等は審理されない(竊盜に對して第十二節—十八條)。

犯人が罰金を支拂ふに足る動物の頭數を所有してゐないならば、其罰金は體刑に代へられる。各動物一頭の代りに二十五回の笞刑であるが、合計一〇〇回以上には上らない(第十二節—九條)。牲畜九頭は馬二頭、牝牛二頭、牝牛二頭、三才牛(牡)二頭及び二才牝牛一頭より成り、牲畜五頭は成長した牝牛一頭、牝牛一頭、三才牝牛一頭及び二才牝牛二頭より成つてゐる。

宗教の選擇に對する犯罪、僧尼の誓約及び訓戒に對する犯罪。

人間の死後、馬を殺すこと、山岳、跋躄を妨害すること、旌旗をつけた棒を立てる事、ホダツク（白絹ハンカチーフ）を懸ける事等は禁じられて居る。此法を破る者は、其の違反を報告した者の爲めに牲罰五頭が科せられる（第十節—二條）。王公及び其妻の墓を掘り開く者は、其の主犯は斬首、財産没収を宣告され、犯人の家族は己が所有物を持参し、埋葬地所有者の許に奴隸となり、共犯者は、答刑百の罰を科せられ、台吉及びタブネンの墓を掘り開く者は其の主犯は財産没収後絞殺を宣告、其の共犯者は答刑の罰に處せられ、埋葬地の所有者の爲めに各々牲罰九頭二回を科せられる。（註）

註 埋葬地は蒙古に於ては稀にしかなく、そしてそれ等は私人に屬してゐる。

上級官吏の墓を掘り開く者は、其主犯者は答刑百回、牲畜九頭三回の罰に處せられ、其の共犯者は答刑百回、尙ほ各人は埋葬所有主の爲めに牲罰九頭を科せられる。普通官吏の墓の發掘者は、其の主犯は答刑百回、牲畜九頭の罰に處せられる（第十節—二條）。

喇嘛僧及び教徒は僧院長の許可なくして病人の附添ひ、及び宗教上の勤めの爲めに僧院を離れる事は禁じられて居る。僧院より外出する許可を得た者は、自分を招待した人と共に僧院を離れ、僧を招待した人は同一日に僧を還へし、僧院長の許に渡さねばならない。僧院を許可なくして離れ、僧院外で夜を暮らす者は、喇嘛僧及びバイヂンは其罰牲畜九頭三回（第十一節—三條）。未婚婦人の家で夜を暮らす者は、喇嘛僧及び教徒は自らの地位を剝奪され、答刑百回に處罰され、彼等を招き入れた蒙古婦人は又同様答刑百回の處罰を受け、支那婦人は刑事法廷に起訴される。姦通を犯す者はシバガンタサは其地位を剝奪され、百回の答刑、僧院長は牲罰九頭三回、チサツク喇嘛は牲罰九頭二回、

テムチ及び其他の者は牲罰九頭に科せられ、ゲールング及び教徒は牲罰五頭に處せられる（第十一節—三條）。上記の名稱ある各僧は、僧院に入るを禁じられて居る婦人を自己の部屋に入れ、其處に置くは亦同様な罰を科せられる（第十一節—四條）。自分の家に竊盜犯、強盜犯を隠匿する喇嘛僧は前者と同様に處罰される（第十一節—六條）。換言すれば、それ等の犯人の共犯者と見做されるのである。禁止されてゐる色彩、及び自己の地位に該當せざる衣を纏ふ者は、喇嘛僧は牲罰九頭、教徒、オーバシス、シバガンタスは答刑八十回に處罰せられる（第十一節—一條）。

B、國家及び政府に對する犯罪

國を離れ、外國に逃亡する者が其を追跡する人に對し武力抵抗を試みるならば、其の主犯者及び共犯者は、即刻斬首され、よし彼等が單なる抵抗を試みなくとも、其主犯者は即刻絞殺され、若し彼等が逃走中に追跡者に傷害を加へるならば、即刻斬首され、よし人々に傷害を加へなくとも、抵抗を試みなかつた者に對すると同様な罰を加へられる。若し逃走中彼等が追跡者に危害を加へず、直ちに引返すならば彼等は答刑百回の罰が科せられる。そして以前の所有主に返還されるのである（第九節—一條）。外國に逃亡する人々に援助を與へる王公、台吉、及びタブネンは地位を剝奪され、官吏は絞殺されて財産は國庫の利益の爲め没収される（第九節—六條）。一般蒙古人は斬首、財産は没収される（第九節—六條）。

一旗より他旗への出奔者は受け入れ得ず。元の旗に返還されねばならない。出奔者は答刑百回に處罰され、かゝる出奔者を隠匿する者は、何人を問はず起訴される（第二節—十條）。逃亡奴隸が國內に於て捕縛されるならば、彼所持せるものの半分は捕縛者に、他の半分は奴隸所有主に與へられ、奴隸は答刑百回を科せられる（第九節—三條）。

逃亡者監視の任にある王公、台吉、タブネンは逃亡者の遠く逃ぐるにまかせるならば罰俸一ケ年（第九節一五條）。逃亡者を隠匿する官吏は免職となり、笞刑を加へられて、更に逃亡者の利益の爲めに牲罰九頭三回を科せられる（第九節一十一條）。放逐された犯人を隠匿する者は、笞刑百回、尙三年の放逐（流刑）を科せられ、若し隠匿が善意になされたものであれば、笞刑八十回の罰。官吏は免職起訴される。王公、タブネン、台吉は罰俸一ケ年に處せられ、何等それを知らずしてなしたものであれば、罰俸半ケ年に處せられる。

C、公衆保安及び道德に對する犯罪

天然痘を病んでそれを他人に感染せしめる者は罰せられ、若し被感染者が死ぬ時は牲罰九頭三回。若し回復すれば牲罰九頭二回に處せられる（第十節一七條）。狂人は最近親の監視下に置かれ、若し一人の親戚も居ないならば其時は什長の監視下に置かれる。若し見張り不足の爲めに狂人が逃走し、人を殺すならば、其監視人は笞刑百回の罰に處せられる（第十節一八條）。悪しき行爲をなす人々は旗人と共に一緒にせず、家族及び財産を所持させて湖南又は山東に放逐される（第十節一七條）。一般蒙古人同志の姦通は、姦夫は姦婦の夫の爲めに牲罰九頭五回に處せられ其の姦婦は「夫の手に依り殺されるべし」。若し姦婦の夫が姦婦を殺さざる時は牲罰を王公に支拂ふ事になつて居る。何人を問はず、他人の妻を愛撫する者は牲罰九頭三回に處せられる（第十節一十四條）。一般蒙古人の妻と姦通を犯す第一位及び第二位の王公は牲罰九頭九回、貝勒、貝子及び公は牲罰九頭七回、そして台吉、タブネンは其の夫の利益の爲めに牲罰九頭五回に處せられる（第十節一十五條）。王公の妻と姦通をなす一般蒙古人は寸断に斬り殺され、王公の妻は斬首され、蒙古人の家族は奴隷に賣られる（第十節一十六條）。

D、官吏の犯罪

人口統計を作成する場合に人口数を隠蔽する支配的（札薩克）王公、台吉、タブネンは罰俸三ケ月、統計作成中に於て人口数の照合を怠る協理台吉、旗の將軍、梅倫は牲罰九頭三回、チャラン・チャングイン及び佐領チャングインは牲罰九頭二回及び副官は告發者の利益の爲め牲罰九頭、伍長及び什長は笞刑八十に處せられる。（註）

註 札薩克台吉は支配的王公であり、行政を司る（菜地又は一地方の）タイヂである。協理台吉は札薩克補佐役であり、ホーシヨン・チャングインは將軍、即ち（地方の指揮者）梅倫チャングイン（一地方に二人居る）はホーシヨンチャングインの補佐役であり、チャラーン・チャングインは聯隊長、スムン・チャングインは騎兵中隊の指揮者である。

漂泊してゐる喇嘛僧、及び其他の人々を秘そかに匿つて置く者は、軍士官はツフンより伍長に至るまで刑事裁判所に起訴され、王公、台吉、其他は罰せられる（第二節一七條）。（註）

註 ツフンは一軍國の指揮官、ツフンは軍團指揮官の補佐役。

遠征に召集された時、隊伍に加はらない者は峻嚴に罰せられる（第四節一八條）。兵士は勿論、隊長も敵に背を向け逃げる者は、又同様に峻嚴に罰せられる（第四節一十條）。會議に出席さざる王公、台吉、タブネンは罰金半ケ年の俸給、遅刻せし者は馬一頭の罰金を科せられる。尙遅刻するホーシヨン、チャングインは罰馬五頭、什長は罰牡牛（三才）一頭を夫々科せられる（第四節一三條）。兵士の武器及び旅装の不足缺乏に對しては札薩克王公は罰金半ケ年の俸給、台吉は牲罰五頭、兵士は二才牡牛一頭の罰（第四節一四條）。逃亡捕獲に於ける怠慢に對しては札薩克

王公、及び台吉は罰金一ヶ年の俸給、ホーシヨン、梅倫チャラン及び索木チャングイン、副官は勿論、凡て牲罰九頭三回に處せられ免職、伍長、什長は笞刑百回に處せられる(第四節一二條)。逃亡者捕獲に於ける怠慢に對し又は逃亡者を追跡し、結局不成功に終つた事に對しては其責任者チャングイン及び副官は免職された上に罰金を科せられる前者は牲罰九頭三回、後者は牲罰九頭二回を科せられ、伍長は牲罰五頭の上に更に笞刑百回を加へられる(第五節一十七條)。職務中の不在に對してはスムンチャングイン、副官及び兵士には前と同様の罰金が科せられる。

E、個人に對する犯罪

殺人 他旗の人民を故意に殺す王公、台吉、及びタブネンは、被害者が所屬する旗に對して人間一人に對し人間一人を與へ、被害者の利益の爲めに罰金を支拂ふ義務あり。第一及び第二位の王公は馬百頭、具勒、具子及び公は馬七十頭、台吉及びタブネンは馬五十頭の罰、一般蒙古人は監禁後斬首され、犯罪を幫助した共犯者(事實上の共犯者)は監禁後絞殺され、彼の財産は被害者の家族の利益の爲めに没收される。其の犯行に事實上幫助を爲さなかつた共犯者(犯罪を默許した者)は、家族及び財産と共に隣りのセイムの台吉の許に奴隸として渡される(第七節一一條)。從屬者を、又は怨恨の爲に奴隸を又は泥醉せる奴隸を故意に殺す者に對しては第一位及び第二位の王公は牲罰四十頭、具勒、具子及び公は牲罰三十頭、台吉及びタブネンは被害者の兄弟を利する爲めに牲罰九頭三回、そして被害者の家族は其旗を去り、自己の欲する如何なる處へなりとも行き得る權利を有す。誤つて人を殺した場合は、其事實を届出ねばならぬ。しかし罰金は科せられる(罰金九ヶ月の俸給、其の家族は依然其旗に留るのである。怨恨より奴隸を殺すか、又は泥醉の奴隸を殺す場合は、ホーシヨン及び梅倫チャングインは牲罰九頭二回、チャラン及びスムンチャン

グイン及び副官は牲罰九頭二回、一般蒙古人は被害者の家族の利益の爲めに牲罰九頭を科せられ、其家族は其の旗を去る權利を有す(第七節一二條)。騒動に於て人を殺すか、又は人に傷害を與へ(五十日間内に)、被害者が死に至るならば、加害者は絞殺せられる(第七節一三條)。(註)

註 これと同様の條項はフリアート法にも見られるが刑罰は異なつてゐる。

證人又は從者が、同一旗に屬する人である事を立證する如き人を誤つて殺す場合にも前同様の刑罰が科せられる(第七節一五條)。他人の妻を故意に殺す者は絞殺に處せられ、喧嘩口論に於て又は亂闘に於て誤つて人を殺すならば(義母に牲罰九頭三回が科せられ、同様な牲罰は、自己の妻の行爲が生んだ原因により、其の夫が勝手に己が妻を殺す場合も科せられる(第七節一六條)。新たにやつて來た逃亡者を殺す者は、其の首謀官吏は絞殺され、一般蒙古人は監禁後斬首される。又其の共犯にあつた者は、牲罰九頭三回に處せられる(第七節一八條)。竊盜に引續き殺人罪を犯す者は次の如く罰せられる。官吏、又は一般蒙古人が單獨か又は一團となつて家畜其他を盗み、被害者の隣人が、夫を追跡するのを犯人が抵抗し、殺人を犯すならば、其の主犯者は即刻斬首刑、其の家族家畜は被害者に與へられ、共犯者は家族と共に守備地に於ける兵士の奴隸の如く、南方地方に放逐され、財産は被害者に與へられる。若し竊盜犯が捕縛に際して傷害を加へたが、結局相手が死に至らないならば、主犯者は監禁後斬首、財産及び家畜は被害者に與へられ、家族は秋審に於て宣告が一罪級減せられるまで同一旗に留められ、判決確定後湖南山東に放逐され、驛舎に於て激しい勞働をせねばならない。其の共犯者は家族財産と共に同様な方法で放逐される。家畜竊盜中になせる殺人は、犯人は即刻斬首、斬り落された首は公衆にさらされる(第六節一五條)。

F、個人の自由に對する犯罪

一四六

今茲に考察しつゝある時代の蒙古法律は奴隸制度、及び半自由農奴制を認てゐたのである。登録簿に登録されてゐた蒙古人は賣ることは出来なかつたが、登録されてゐなかつた蒙古人は彼が在住してゐる旗の人々のみ賣ることが出来たのである。此の規則に違反する者は、賣買兩當事者とも嚴罰に處せられ、札薩克、協理、台吉及び家長は罰金に處せられた(第二節二十三條)。若し蒙古人が奴隸に賣る意圖を以つて、男又は女蒙古人を誘惑するならば、其が成功しようと不成功に終らうと誘惑者は管刑百回を科せられ、牲罰九頭三回を科せられる。一方被誘惑者は管刑百回に處せられる(第十節十三條)。若し外旗の蒙古人が奴隸に賣る意圖を以つて男、又は女支那人を誘惑し若し賣られんとする者が其事實を知らないならば、主犯者は絞殺刑に處せられる。其れが成功しようと不成功に終らうとも、共犯者は管刑百回を科せられ、其上牲罰九頭三回を科せられるのである。若し誘惑者が被誘惑者の同意を得て賣つたのであれば、犯人は管刑百回に處せられ、其の上牲罰九頭三回の罰金に處せられる一方被誘惑者は管刑百回を科せられる(第十節十三條)。

G、傷 害

何人を問はず他人の眼を潰す者は牲罰九頭三回に處せられる。何人を問はず他人の腕、又は足を挫折せしめる者は牲罰九頭に處せられる(第七節十五條)。若し王公、官吏及び蒙古人は、自己に屬する奴隸に傷害を加へ、又は奴隸の鼻又は耳を切り落すならば、第一位及び第二位の王公は牲罰九頭五回、具勒、具子、公は牲罰九頭四回、台吉、タブネンは牲罰九頭三回、官吏は牲罰九頭二回、尙ほ一般蒙古人は牲罰九頭に夫々科せられる。若し此の傷害が因となつ

て被害者が死に至るならば、犯人は怨恨による故意の殺人として起訴される(第七節十九條)。何人を問はず喧嘩口論に於て相手の眼に傷害を加へ、若しくは相手方の腕又は足を挫折せしめる者は牲罰九頭三回に處せられる。然し惡意にあらざる場合は唯牲罰九頭を科せられるのみである(第七節十條)。

H、言葉又は行爲による侮辱

何人を問はず流産を惹起せしめる行爲をなす者は牲罰九頭、何人を問はず騒動に於て理由なく他人の齒をぶち折る者は牲罰九頭、何人を問はず拳又は鞭棒を以つて人を毆打する者は牲罰五頭、何人を問はず帽子の房又は尾を引握ぐ者は牲罰五頭を夫々科す(第七節十條)。若し具勒が政府の命を受け、支配的王公より派遣された使者を毆打すれば牲罰九頭三回に處せられ、一般人は牲罰九頭を科せられる(第二節十八條)。第一位及第二位の王公に侮辱を加へたる一般蒙古人は、牲罰九頭三回、他の王公に對し同様の侮辱を加へたる者は牲罰九頭二回、台吉及びタブネンに同様の侮辱を加へたる者は牲罰九頭を科せられ、他人の背に侮辱を加へたる者は同様の罰を科し、上級官吏に侮辱を加へたる者は牲罰九頭、梅倫、チャングインに侮辱を加へたる者は牲罰五頭、チャン・チャングインに侮辱を加へたる者は牲罰三頭、スムン・チャングインに侮辱を加へたる者は被侮辱者の利益となる牲罰に夫々處せられる(第十節十三條)。

I、財産に關する犯罪

強盜及び劫掠 一人二人又は二人以上の者が盜竊中に殺人を犯すならば、其の主犯者及び共犯者は斬首刑に處せられそれ等の頭(首)は公衆の前に曝される。若し彼等が人々に傷害を加へるのみならば、其の主犯者及び共犯者は斬首

刑に處せられ、家族財産は共に被害者に渡される。若し彼等が傷害を加へたばかりで竊盜せざれば、主犯者は監禁後斬首刑に處せられ、主犯者の財産は被害者に與へ其家族は湖南、山東に放逐され、驛舎に於て過激勞働をさせられ、共犯者は財産と共に被害者に與へられ、其の家族は同様の地方に放逐される(第六節―一條)。單獨で殺人又は傷害を加へることなく劫掠をなす官吏、又は蒙古人は其家族及び財産と共に山東又は湖南に放逐され、勞働を強ひらる。若し二人三人又は三人以上の者が劫掠を犯すならば、其の主犯者は監禁後絞殺刑に處せられ、其の財産は被害者に與へられて、家族は刑罰を輕減されたる後は湖南、山東に放逐される。其の共犯者には同様な刑罰を科せられ、家族財産共に同様に處分される(第六節―二條)。若し劫掠犯が死刑に相當せざるならば、主犯者は牲罰九頭三回、共犯者は牲罰九頭に夫々處せられる(第六節―四條)。

丁、竊 盜

家畜竊盜に對する刑罪は盜難にかゝつた家畜の數に従がひ種々變つてゐる。馬三十頭以上の數を竊盜する者は、主犯者及び共犯者は秋審開廷に於て刑罰を輕減される事なく監禁後絞殺される。竊盜に於て積極的役割を買はなかつた共犯者(默認者)に對する刑罰は一罪級低められ、雲南、廣東及び不健康地に放逐される。家畜二十頭より三十頭までを竊盜する者は、主犯者及び共犯者は監禁後絞殺を宣告され、秋審に於て其宣告は輕減されない。十頭より二十頭までの家畜竊盜をなす者は、主犯者は監禁後絞殺され、共犯者は放逐される。六頭より九頭までの家畜竊盜をなす者は、其の主犯は雲南及び其他不健康地に放逐され、積極的共犯者は、湖南、福建に放逐され、然らざる共犯者は、答刑百回に處せられる。三頭より五頭までの家畜竊盜者に對しては、同様の刑罰が科せられる、馬二頭を竊盜する者は

主犯者は湖南、山東に放逐され、共犯者は百回と宣告され、九十回の答刑を科せられる。異種類の家畜竊盜に對するその刑罰は、次の如く算定される。羊四頭は有角動物一頭、駱駝一頭又は馬一頭に相當するとなすのである。若し四頭以下の羊が竊盜に罹かつた場合は、其の主犯者は答刑百回、共犯者は答刑九十回と宣告され、八十回に輕減される(第六節―六條)。

一ヶ年に二回竊盜罪を犯す者は、二重の刑罰を宣告される(「同數だけ」)が、たとひ一年以前に異なつた竊盜罪が爲されてゐたとしても、犯人は唯一つの竊盜罪にのみ刑罰が宣告される(第六節―八條)。若し、台吉が竊盜罪を犯せば、彼は台吉の地位は剝奪され、普通の平兵士の地位に落される。犯人の家畜は被害者に又犯人に屬する農奴奴隸に與へられる―犯人の最も近い關係者に(第六節―十一條、十二條)。若し台吉が迷へる家畜を隱匿すれば、自己の地位は剝奪されるが、若し改悛すれば先の地位は六年の後に特別の恩典を以つて返還されるかも知れない。金、銀、黒貂、布及び食料を盜む者はそれ等と同一種類に屬する物品か、又はそれに相當する價値物を以つて返還されねばならない。若し盜難にかゝつた物が二歳牡牛一頭の價値に相當するものであつたならば、其の罰金は牲畜九頭三回若しそれが羊一頭に相當するものであつたならば牲罰九頭、若しそれが羊一頭よりも價値の劣るものであれば三歳の牡牛一頭の罰金となす(第六節―三十四條)。何人を問はず、豚又は犬各一頭を竊盜する者は牲畜五頭の罰に處せられる。何人を問はず、鷺、鴨、鶏を竊盜する者は、其の損害を填補する以外に二歳牡牛一頭の罰金に處せられる(第六節―三十五條)。竊盜犯を陰匿、引渡さぬ王公、台吉、タブネンは罰金半ヶ年の俸給、若し職務について居らぬならば牲罰九頭に處せられる(第四節―十二條)。

官吏が怨恨の故を以つて家に火を放ち、その爲めに死をもたらすならば犯人は絞殺に處せられ、一般蒙古人が同様な犯罪をなすならば、監禁後斬首、財産は被害者に與へられる。一般蒙古人は笞刑百回に處せられ、財産は被害者に與へられる(第十節—十條)。何人を問はずステツブに火を放ち、野生動物を燻らして穴より追出さしむる者は、牲罰九頭に處せられる。若し家畜が其の爲め焼死するに至れば、罰金以外に其の損失を補ふ事になつてゐる、若し人間が焼死すれば、犯人は牲罰九頭三回に處せられ、若し過失にて火災を惹起せしめる者は牲罰五頭を科せられ、焼死した家畜の價値を支拂ふ事になつてゐる。若し人が焼死すれば牲罰九頭を科せられる(第十節—九條)。

四、裁判制度及び訴訟手續

裁判權は行政權より分離して居ない。それは密接な關係を保持してゐる。第一審(初審)は、札薩克王公又は台吉(一旗の行政官—一地方の行政官)が之を審理し、札薩克の判決に對する控訴は會盟の議に委託され、會盟の判決に對する上訴は理藩院に委託されるのである。該廳は事件を調査したる後、判決を改變すべく會盟長に訓令を發するか、又は若し事件が重大なものであれば、それを審判すべき上級官吏の派遣方を皇帝に請願するのである。先づ最初は札薩克に上訴し、次いで盟長に控訴せず直ちに理藩院に控訴することは嚴に禁じられ、それに對しては刑罰を以つて脅威してゐる(第五節—二條)。支那に於て、犯罪をなす蒙古人は支那の法律に従ひ、蒙古に於て犯罪をなす支那人は蒙古法律に従つて裁判される(第七節—十九條)。

蒙古人は自らの事件は自らが出訴せねばならないのであつて、局外が出訴する事に幹旋する事は禁じられて居る(第七節—一條)。王公によつて裁判された事件の再審要求は出訴し得ない。法廷に於て、裁判される事件は兩當事者(原告被告)の私的妥協によつて解決する事は出來ないのである。此の違反に對しては、王公には牲罰九頭三回、一般人には牲罰九頭を以つて脅威を與へてゐる。原告が所屬する旗民と被告が所屬する旗民との仲裁を通じて公に和解する事は認められて居る(第七節—十三條)。

疑はしき場合に於ては宣誓が證言であると認識して居る。例へば、犯罪人であると疑ひを掛けられて居る人に對して、何等の證據となるべきものがない場合は宣誓をさせるのである(第六節—二條、七節—五條、十二節—十六條)。犯罪遂行者の捜し出しに對しては、追跡に頼らねばならない(第六節—二十七條)とされてゐる。搜索は現場證人の居る場所に限つて認許されて居る。

家畜の形に於ける罰金牲畜九頭の中一頭は王公が收受し(第七節—三條)、告發者は罰金の半分を收受するのである(第七節—四條)。犯人が所屬して居る札薩克の使者は、三才牝牛一頭を收受し、被害者が所屬する札薩克の使者は、十一頭の中一頭を收受するが、多くとも三頭は收受しない(第七節—二條)。罰金を徵集する使者は犯人より三才牝牛一頭を收受する(第七節—一條)。

第二項 理藩院第二蒙古法規

吾々は當面に與へられた仕事を飛躍さす爲めには、唯私法、刑法及び裁判權に就いてのみ暫らく意を停めて觀察し

よう。是等の部分は第一法規とよく共通して居る條項を包含してゐるからして、蒙古、及び西藏の行政組織、及び政府の問題、軍事法規、僧侶等に關する條項、並びに露國との關係に就いては觸れない。

註 之等の概観は既に第一法規に於て説明した。

一、私 法

財産及び債權に關する法

此問題に就き、本法規中に記されてゐる條項は、蒙古人の基本的生業—家畜牧養—を保護せんとする傾向のある事がわかる。支那人は國境を越へて、蒙古人の區域にまで入る事を禁じられ、蒙古人は自分等の牧草地—農業の爲めの土地—を賃貸するを禁じられて居る。此規則に違反する者には嚴罰が科せられて居る（第五節—一六五、一六七條）蒙古人に屬する區域の耕作地及びジホー（ジホール？）の最高行政將軍下の地方に於ける支那人の賃借耕作地は、行政將軍の許可を得て後に、其の嚴重なる監督下に置かれ得るのである。最も嚴重なる監督下、及び支配下に置かれた賃貸區域の耕作地は、科爾沁、郭爾羅斯及び敖漢の王公政府に承認されて居つた。土地の賃貸借は其地方の長、及び民政吏により是認された契約を結ぶ事によつてのみなし得た。而してそれが登録簿に記載後公布されて、牧草地の管理人たる王公は賃借人に對し、借地權を認證する證明書を交附するのである（第一節—一七四條）。豫め支拂ふ借地料の一部は、手附金と言はれて居る。若し借地料が支拂ひ不履行に至れば、其の土地は返還せしめられる（第一節—一七五條）。貸借金の擔保物の如く土地を擔保とする事、又は擔保物として保持する事は禁じられて居る（第一節—

二七四條）。若し斯の如き處置が豫め取られて居れば、問題が発生した時は次の如く解決されるのである。何人を問はず、土地を既往に所有し、而してそれを三年間耕作せし者は尙四ヶ年、最大限五年間（註）耕作するを認められて居る。之は該負債が借地料で支拂はれ、而して其土地は所有者に返還されると言ふ状態の下に（第一節—一七六條）註 三年間は利子の爲めに其土地を耕作するも差支なく法律が言ふ如く三年を経過すれば利子の高は貸した元金を陵駕するであらうから（それ程に蒙古に於ては利率が高い）三年経過すれば即ち其の土地は借金を返済した上で尙ほ四—五年間耕作を繼續し得るのである。

蒙古に於て農業に従事する凡ての支那人は、借地料（地代）の支拂を命じられてゐる（第一節—一七九條）。第一法規の條項は、自身に割當てられた牧草地を踏みこへる事を禁じてゐるが、第二法規ではそれが更に繰返へされてゐるのである。

A、商業 取引

蒙古人は何人も當局の許可なくして牧草地を離れることは許されて、いない。一區分に屬する蒙古人は其區分の指揮者の許可なくして其處を離れることは出来ない。何人を問はず商業をなさんと欲する者は其區の指揮者に請願せねばならない。指揮者は各々十人、及びそれ以上より成る一團に對して特別の官吏を任命する。該官吏は指揮の爲め彼等と共に行商に赴く（第二節—七十六條）。支那商人は理藩院の許可を得てのみ許可濟の一定地方に行き得る。支那人は蒙古人に利子取得の爲めに銀を貸す事は禁じられて居り、（金貸し）此の規則に違反する場合は無利子で唯元金のみが貸主に返還され、貸主自身は本國（支那）に放逐される。

g、家族及び相續誌

一五四

結婚—蒙古に於ける支那人は、蒙古の娘又寡婦と結婚する事は禁じられて居る。此規則に違反するものは其結婚は取消され、妻は兩親の許に返還されるのみならず、夫婦は刑罰に服さねばならない。即ち、兩人は三ヶ月間頸枷を附せられ、百回の笞刑を加へられ、支那人は郷里に放逐される。一方、當局（台吉及び聯隊指揮官）は、取締り怠慢の故を以つて罰せられる（第一節—四八三條）。同一種屬間の蒙古人の結婚は禁じられてゐる（第一節—四八一條）。蒙古王公が許嫁となつた自分の娘に對し、支拂はねばならぬカリムは、やがて妻となるべき者の父親の地位に従ひ變化する。若し、彼が第一位の王公であれば、婚約の決定後、駱駝一頭、馬四頭、羊四頭、更に結婚の直前には牝牛六頭、馬六頭及び羊六十頭を支拂ひ、祝宴に於ては三十六の食膳が準備されねばならない。若し王妃となるべきものの父親の地位が低ければ、其のカリムは即ち彼が第五位、又は第六位王公の地位であれば、其れに従つてそれだけ減じられ、婚約の決定後馬二頭、羊七頭、結婚直前には馬二頭、牝牛二頭及び羊二十頭を支拂ふのである（第一節—四七一條）。他の官吏並びに一般蒙古人によつて支拂はれるカリムは馬二頭、牝牛二頭及び羊二十頭より成つてゐる（第一節—四八一條）。若し花押となるべきものが婚約をなし、結婚前に死すればカリム全部は返還され、若し花嫁となるべきものが死すれば—カリムの半分は返還される（第一節—四八一條）。滿洲及び蒙古王公の娘は結婚を與へられる。第一位王公の娘は結婚と共に彼女の乳母夫妻、家婢八人、農奴五家族其他を。第六位王公の娘は、彼女乳母夫妻、家婢三人、農奴三家族、滿洲王公の第七位の娘及び（蒙古の）台吉、及びタブネンの娘は農奴三家族を與へられる（第一節—四七九條）。他人の許嫁を誘拐する者は、第一位及び第二位王公は其の被害者に農奴十家族を與へねばならない。他の

王公は七家族を與へ、許嫁は返還される。一般人は牲畜九頭を與へ、許嫁を返還する（第一節—四八二條）。若し蒙古人が妻を離婚すれば、妻に結婚を返還する義務があるが、若し結婚が消耗されてしまつたならば、何物も返還する必要はない（第一節—四八四條）。

C、養子

世襲的稱號を有する台吉、及び塔布囊及び王公の王子は直系の相續なき時は、彼等の民族中より立派なる人物を選択し、養子となすべき權利を有す。養子となつた者は台吉の稱號、及び相續財産を受理する。死せる台吉の妻は夫の死後相續人を貰ひ受ける事を許されてゐる。若し同一氏族中に貰ひ受くべきものが居らないならば、其區の役所の許可を得て他氏族中より選擇し相續人を貰ひ受ける事が出来る。然しながら、かゝる選擇された相續人は、唯財産を相續するに止まり、養父稱號は相續しないのである（第一節—六一條、六三條）。正妻は夫の死後、其の妾妻を賣る事は禁じられてゐる（第一節—六四條）。妾腹より生れた子は正妻の子と同様に見做される（第一節—六四條）。

D、相續財産

相續人は男子にして直系子孫に限られてゐる。之等の者に次ぐ者は、兄弟、最後には同一氏族となるのである。復歸財産は公衆の貧困救済の爲めに備へて其區の指揮者の處置に委かせられて居る。直系の子孫なき時は、遺言は認められるも、相續人の指定は同一氏族以外であつてはならない。而して、當局の認定が必要とされてゐる。直系子孫を有せぬ人の遺言が同一氏族より相續人を指定してゐる事は、其の指揮者及び其區の王公が其れを確認せねばならないのである（第一節—六三條）。棄兒及び奴隸の子は如何なる場合と言へども相續人とは見做されない。（第一節—六三條）。

二、刑法

刑罰の制度

第二法規が科してゐる主要な刑罰は次の如きものである。(註)

註 引用したのは法規の諸部分及び諸條項を示したもので、其の刑罰はしかし唯典型的なものであつて、上に述べた様に細大洩らさず集めたものでない事に限定されるのである。

- 一、家族の奴隸化を伴う死刑(第二節一一條)
- 二、寸斷に斬り殺される死刑
- 三、斬首刑(第三節一六條、七三條)
斬首刑後首は常に公衆に曝らされる
- 四、絞殺刑(第三節一九條、七三條)。死刑は上に述べた如くに即刻に科せられるか、又は監禁後、即ち秋審に於て確と判決ある迄で延期されて科せられるかとするのである
- 五、過激労働を伴う不健康地への流刑
- 六、雲南、貴州、廣東、廣西地方への徒流刑
- 七、福建、湖南地方の徒流刑
- 八、驛舎に於ける過激労働を伴う山東、湖南地方への徒流刑(第三節一七三條、七四條)

- 九、家族と共に山東、湖南地方へ徒流刑(第三節一九條)
- 十、頸枷(第三節一七八條)
- 十一、笞刑及び罰金(第三節一〇七條)
- 十二、杖刑(第三節一〇七條)
- 十三、鞭責(第二節一四條、三節一〇五條)
- 十四、棒切による折檻(第三節一〇五條)
- 十五、投獄(第三節一七七條)
- 十六、僧の各員に對する品位の剝奪(第四節一七一條、八五條)、榮稱又は稱號の剝奪(第二節一二二條) 地位又は官職の剝奪(第三節一六、一八三條)
- 十七、全財産の沒收(第三節一六、一八三條)
- 十八、不動産の沒收(第二節一一條)
- 十九、從僕(農奴)(第二節一一條、三節一七五條)
- 二十、家畜の罰金(第三節一八〇條、四節一六九條)。奴隸化(第三節一二二條、第四節一八一條)
- 廿一、贖償

法廷が或る犯罪に對する適當なる刑罰を之等の法規中に發見困難なる場合、國家の一般刑法に從つて判決されねばならない(第三節一九四條)。

蒙古に於て、犯罪を犯した支那人及び支那に於て犯罪を犯した蒙古人は、地方法律に従つて裁判される（第三節—九五條）。（註）

註 強盜に關しては特殊な條項が存在してゐる。其他等々。

數種の犯罪がなされた時には事件は併合せられず、又併合裁判もなされない。然し犯罪人は其の重要な犯罪に就いて裁判される「裁判は諸犯罪の重要性に従がつて爲すべきものにして、犯罪の數に依りてなす可からず」（第三節—六三條）。十歳未満の小兒のなす犯罪は責任を問はれない。然し、十歳より十五歳までの小供の犯罪は罰せられないが、贖償金を支拂はねばならぬ（第三節—六五條）。若し、死刑又は放逐を宣告された犯人が養ふべき老父、又は老母、叔父、叔母を持つて居り、而も、彼の聯隊の指揮官が彼の將來の操行を保證するならば、死刑又は流刑は頸枷四十日に輕減され、尙百回の笞刑を加へられる。

偶然の殺人に對し死刑を科せられたる犯人の贖償は、國庫に牲畜九頭（馬）を與へ、其他被害者の親戚に九頭の馬三回を與へるならば贖償は認められる（第三節—一五四條）。刑を他の刑に変更する事は認められて居る。太棒、又は細棒による毆打は笞刑に輕減され、毆打に對しては毆打であるが過度の勞働は輕減され得る。即ち一ケ年間の勞働は二十日間の頸枷に、一年四ケ月の勞働は三十日間の頸枷に輕減される。其他、各等級に對しては五日輕減されるのである。國境宿營に一般兵士として放逐された犯人は、頸枷七十日に輕減され得る。遠隔地への徒流刑は、頸枷七十五日に、海岸地の徒流刑は頸枷八十日に、空氣惡しき遠隔な不健康地への徒流刑は、九十日の頸枷に輕減される、（第三節—一〇七條）。

俸給ある王公、台吉、タブネン及び官吏の罰金は俸給（銀又は布）を返附して國庫に支拂ふ事になつて居り、個人に對しては家畜で支拂ふ。尙ほ之れ以外の蒙古人は國庫にも又個人にも家畜を以つて罰金を支拂ふのである（第三節—一〇九條）。罰金を支拂ひ得ない犯人に對しては笞刑に変更され、動物一頭につき二十回、動物二頭につき五十回三頭につき七十五回、四頭につき及びそれ以上の頭數につき百回の笞刑に変更される。百回以上の笞刑は科せられぬ（第三節—一一三條）。九牲畜の罰金は馬二頭、牝牛二頭、牝牛二頭、三才牝牛二頭及び一才牝牛一頭とより成つてゐる。牝罰七は馬一頭、牝牛一頭、牝牛一頭、三才牝牛一頭及び二才牝牛二頭より成り、牝罰三は牝牛一頭、三才牝牛一頭及び二才牝牛一頭より成つてゐる（第三節—一一五條）。

A、宗教に對する犯罪、宗教制度、宗教宣誓及び其教義

本法規は棺の掘開（墳墓の渦潰）に關し詳細なる條項を包含してゐる。王公、台吉、及び其の妻の墓を掘り開くに就いては、犯人が棺に達せざる以前に捕縛される時に於ても刑罰の宣告を受ける—主犯者は監禁後、絞殺、共犯者は山東及び湖南に流刑となり、驛舎に於て過激勞働を強制される。若し棺に達すれば犯人は凡て絞殺刑にされ勝ちである。主犯者は即決、共犯者は監禁後絞殺、若し棺を開き屍を見るならば、主犯者は斬首刑、共犯者監禁後、絞殺、若し死體の部分くを離散せしめ、其の神聖を潰すならば犯人は凡て死刑を宣告される。私人の墓を掘り開ける罰に就いては以上の如くに峻酷なものではない。第一回目は主犯者は笞刑百、並びに牝罰九頭三回、共犯者は笞刑九十、並びに牝罰九頭二回に處せられ、第二回目は主犯者は山東、湖南に徒流刑、共犯者は笞刑百、並びに牝罰九頭三回に處せられ、第三回目は彼等流刑—主犯は遠隔地に徒流刑、勞働を過度に強いられ共犯者は山東、又は湖南に徒流刑、第

四回目は主犯者監禁後大體絞殺に處せられ、共犯者は空氣悪しき遠隔地に徒流刑である(第三節一七三條)。

凡での僧院には、喇嘛僧の一定の職員が定められて居り、登録簿に記載され、登録簿は保存し理藩院に提出する。僧院に一定以上の職員を置き、登録簿に記載されてゐる以上に教徒を入れる事は禁じられてゐる(第四節一一八條、七六條、八二條)。若し僧院に一定数以上の職員が居るならば、院長は免職された上に牲罰九頭三回を科せられる。同様の刑罰はゲルング及びバンデイに科せられる(第四節一八二條)。奴隸はバンデイとなり得ず、又兵士は教徒となり得ない。此の規則に違反するものは僧の各員は上記の方法を以つて罰せられ。一般蒙古人は答刑百を科せられる(第四節一八一條)。僧院長の許可なくして僧院を離れ、僧院外に於て夜を送る喇嘛僧は牲罰九頭三回に處せられ、社會の監督下に置かれる。斯かる喇嘛僧に隠れ場所を提供する俗人は夫々法廷に起訴される(第四節一六九條)。婦人は僧院に入るを禁じられて居り、婦人の進入を許す院長テムチゲールング、及びバンデイは罰せられる。一院長は牲罰九頭二回、テムチは牲罰九頭を科せられ、其の婦人及び夫は罰せられる(第四節一八五條)。未婚婦人の家で夜を過ごす喇嘛は其地位を剝奪され、其の上答刑百を科せられる。若し婦人が蒙古人であれば、婦人は答刑百を科せられ、若し支那人であれば起訴される(第四節一七〇條)。姦通を犯す尼は職を奪はれ答刑百に處罰される。僧院より逃走する喇嘛僧及びバンデイは地位を剝奪され、處罰される。第一回目は答刑六十回、第二回目は八十回、第三回は百回科せられ、僧より除外される(第四節一八七條)。竊盜犯たる喇嘛僧、及びバンデイを隠匿すれば竊盜犯の如く處罰される(第四節一八六條)。喇嘛僧を捕縛し法廷に起訴せねばならぬ時には先づ地位を剝奪されねばならぬ。而して若し犯罪が構成されねば彼の地位は返還される(第四節一八八條)。

B、國家に對する犯罪

反逆人、他國への逃亡者、及び追跡者に抵抗を試みる者は裁判せず死刑に處す。反抗せず身を委かせる者は一其の主犯者は斬首刑、他の者は絞殺刑。何等の損害も引起さず、自發的に引返へつた逃亡者は答刑百に處せられる(第三節一四二條)。逃亡を默認する王公、台吉及びタブネンは其地位を剝奪され、彼等の農奴は奪取される。官吏は大體に於て絞殺に處せられる。一般人は斬首刑、及び財産を沒收される(第三節一二九條)。

C、官吏の犯罪

タメンガ河岸の内、札薩克に於て放牧してある政府所有の馬郡が、十分の一又はそれ以下に減すれば、札薩克の行政官は罰俸半ヶ年、其の補佐役たる者は各々牲罰五頭に處せられる。それ等は政府所有の畜群中に加へられる。減数が十分の二となる時は、彼等は前同様の罰二倍に處せられ、減数が十分の二を超過する時は起訴され、彼等は凡ての減少した馬の數と同數の罰金に處せられる(第一節一四七條)。若し戸口統計に遺漏のある事が發見されると、統計の責任者は逃亡を隠蔽した故を以つて起訴される(第一節一五七條)。若し統計に於て人口數の隱蔽甚だしければ各旗王公の首長連・タイヂ、タブネンは各々隱蔽數十人に對し罰俸三ヶ月に處せられ、其の補佐役及び上級官吏は牲罰九頭三回、騎兵中隊の指揮官は牲罰九頭二回、上官代理人は牲罰九頭、下士什長は答刑八十回に處せられる(第一節一五九條)。武器及び武器點檢に於て秩序悪しければ、聯隊の指揮官は罰金六ヶ月分の俸給、タイヂ、タブネンは牲罰九頭五回に處せられる(第二節一八八條)。戰鬪中敵前より逃走する者には嚴罰が科せられる(第二節一一條)。王公、タイヂ及タブネンにして遠征に當り軍團に参加せざる者は其地位、品位を剝奪された上其軍團に加へられる。

若し、彼等が軍隊をして遠征に出動せしめないならば死刑を宣告される。若し参加に遅刻する者は處罰される(第二節一三四條)。若し死刑を宣告された犯人が看守怠慢の爲めに逃走すれば、**チャングイン**及び副官は其地位を奪はれ處罰される。前者は牲罰九頭三回、後者は牲罰九頭二回、下士官は管刑百、普通の兵士は管刑八十を科せられた上に彼等は凡て職を免ぜられる。若し死刑を宣告されざる者が逃走したのであれば、**チャングイン**及び副官は前と同様の牲罰を科せられ、下士官は管刑八十、普通の兵士は管刑五十に處せられる(第三節一二八條)。若し國境守備隊が逃亡者を逃げるに委かせるならば、其中隊長及び上官代理は免職となり、前者は牲罰九頭三回、後者は牲罰九頭二回、下士官は管刑百、牲罰五を科せられた上免職となる(第三節一三〇條)。什家組合の何人が竊盜をなせば、什長は其怠慢の故を以つて馬一頭の罰金に處せられるが、若し彼が犯人を發見し報告すれば什長は何等の責任も課せられない(第三節一七一條)。王公、**タイヂ**、**タブネン**、**札薩克**は彼に従屬する、**タイヂ**の監督不行届ある時は、**タイヂ**の犯したる罪の重要性に従ひ、罰金六ヶ月より二年間の俸給に處せられ、一般蒙古人に對する監督不行届の點ある時は牲罰九頭より牲罰九頭三回まで科せられる(第三節一一〇、一一一條)。

D、社會に對する犯罪

「寛恕すべからざる惡戯を好む傾向を示す」官吏並びに一般蒙古人は、山東、湖南に徒流刑に處せられ過激な勞働を強ひられる(第三節一八三條)。

傳染病に感染せし者は、健全なる者の家に出入する事は禁じられ、之を犯す者は馬一頭の罰金に處せられ、被感染者が惡化する様になれば牲罰九頭、尙ほ惡化した者が死するに至れば牲罰九頭三回に處せられる(第三節一八七條)。

何人を問はず旅行者に兩宿りを殊に冬季に於て提供するを拒否し、旅行者をして凍傷に罹らしむれば牲罰九頭、若し然らざれば其の罰二歳牡牛一頭を科せられる(第三節一八七條)。一般人の妻と姦通を犯す第一位又は第二位の王公は牲罰九頭九回を科せられ、其他の四位の王公等は其の罰九頭七回の牲罰を科せられる(第三節二二一條)。台吉並びに**タブネン**は姦婦の夫の利益になるやうに牲罰九頭五回を科せられる(第三節一七五條)。双方合意の上で一般蒙古婦人が王公と姦通を犯せば、前者は寸斷に斬り殺され、後者は斬首刑に處せられる(第三節一七六條)。奴隸が台吉の正妻、又は妾妻と姦通を犯せば兩人共罰せられ、前者は死刑の判決が言ひ渡され、後者の場合に於ては百回管刑に處せられる事になる(第三節一七七條)。同階級の婦人と姦通を犯す一般人は、一ヶ月の頸枷及び百回の管刑を科せられ、其姦婦は管刑百に處せられ、而も贖償されるのである。若しそれ以上に一般人が駈落ちすべく婦人を誘惑するならば、二ヶ月の首枷に處せられ、山東又は湖南に流刑(第三節一八七條)。狂人が他人を殺害したり又は自殺するならば親戚、又は狂人の世話人たる長は監督不行届の故を以つて管刑八十回に處せられ、前者の場合は狂人は監禁される(第三節一三八條)。

E、個人に對する犯罪、個人の自由に對する犯罪

何人を問はず誘惑又は欺瞞手段によつて、自由蒙古人、人妻、妾妻、又は貰ひ子又は孫を奴隸に賣る者は管刑百に處せられ、更に牲罰九頭三回に處せられる。若しそれが本人の同意を得て奴隸に賣つたのであれば、賣られた者も同様の刑罰を科せられる。若し本人の同意を得ずして、男又は女支那人を奴隸に賣るならば、監禁後絞殺され、若し本人の同意を得た上の行爲であれば、管刑百に處罰され、其の上に牲罰九頭三回に處られる(第三節一七〇、一八〇條)。

兵士登録簿に記載されてゐる蒙古人は彼の所屬區以外に賣られ得ない(第三節一八一條)。

F、殺 人

本法規は故意の殺人と然らざる殺人とを明かに區別してゐる。或る事件に於ては、罰に何等の區別もつけてゐないものがある。他旗より來たる人を故意に殺す者は、殺害の動機は何たるやを問はず罰せられる。王公、台吉、タブネン、札薩克は牲罰九頭を科せられる。其の中六頭は被害者の利益となる牲畜及び他の三頭は旗長の利益となる牲畜を科せられる。台吉、タブネン、ノン札薩克(支配的でもなく又行政官でもない)は牲畜九頭五回に處せられ、一般人は國家の一般刑法に依つて死刑を宣告される(第三節一條)。若し王公、台吉、又はタブネンが双物を以つて彼等の臣又は奴隸を殺すならば、それが怨恨の爲めであらうと、又忿怒の余りであらうとも又は泥酔の上であらうと、其の理由の如何を問はず罰せられる。即ち第一位及び第二位の王公は馬四十頭の罰、其他の王公は馬三十頭の罰、太子、タブネンは被害者の利益となる牲畜九頭三回の罰、被害者の家族は其地を去り他に行く事が許されてゐる(第三節一二條)。奴隸を殺す札薩克、又は聯隊の指揮官は其罰牲畜九頭三回、騎兵中隊の指揮者及び上官代理人は牲畜九頭二回の罰、一般蒙古人は被害者の利益となる動物(牲畜)九頭の罰に處せられる(第三節一三條)。官吏又は一般人を殺す者は判決確定するまで監禁し、絞殺を宣告される。夫が妻を虐對し遂に死に致すならば前記と同様死刑(絞殺)に處せられる(第三節一五條)。竊盜中人を殺す者は斬首刑に處せられ、死刑執行後其首は公衆の前に曝されるのみならず財産は沒收される(第三節一六、一八條)。主人を殺す奴隸は寸斷される(第三節一四條)。自己の奴隸、又は臣下を偶然に殺す王公は牲畜九頭二回の罰を科せられ、一地方又は聯隊のチャングインが自己に屬する奴隸

を殺せば、牲罰九頭二回、奴隸を殺す騎兵の指揮者、上官代理人は其の牲罰九頭又一般人は殺人に就き即刻報告すれば牲罰五頭ですみ、然らざれば殺人犯と見做される(第三節一六、一七條)。偶然に自己の妻を殺す者は妻の爲めに牲罰九頭を支拂ふ事になつてゐる(第三節一八條)。若し、官吏又は一般人が他の頭を斬り落せば共に牲罰九頭二回に處せられる(第三節一〇條)。若し狩獵に於て偶然人を殺すならば其牲罰九頭三回である(第三節一十一條)。

G、傷 害

若し何人が亂闘に於て人に傷害を加へれば、それが因となつて五十日以内に死に至れば犯人は監禁後絞殺を宣告される(第三節一九條)。換言すれば、殺人犯として罰せられるのである。若し健康體に鋭利なる刃物を以つて有害ならざる、傷害を加ふれば罰せられる。王公、台吉、タブネンは罰金俸給六ヶ月分、無俸給の其等の者に對しては牲罰九頭、一般人は牲罰五頭(第三節一二條)。奴隸に故意に重大なる傷害を加へ、又は不具に至らしめれば、即ち鼻を斬り落すか、又は耳を斬り落すかする者は處罰される。第一王公、第二王公は牲罰九頭四回、他の王公は牲罰九頭三回、台吉及びタブネンは牲罰九頭二回、官吏は牲罰九頭、一般人は牲罰五頭を夫々科せられる(第三節一三條)。故意ならずして他人の目を潰し、又は腕、足を挫折せしめる者は處罰せられる。官吏、又は一般人は被害者の利益となる牲畜九頭二回を科せられる。若し傷害が危険ならず、又不具となるに至らないならば、犯人は馬一頭の罰金に處せられる(第三節一四條)。亂闘に於て人を不具たらしめた者は牲罰九頭三回、若し不具が重大でなければ牲罰九頭(第三節一五條)。姪婦を毆打し、早産(流産)せしめる者は牲罰九頭に處せられ、姪婦を棒又は鞭のとり手を以つて毆打し、腕又は足を挫折せしめる者は牲罰五頭を科せられる(第三節一五條)。

II、言葉又は行爲による侮辱

齒をたき折り、又は辨髪を老る者は牲罰九頭、帽子の房を奪り取る者は牲罰三頭（第三節—十五條）。一般人が第一王公、第二王公を「敢へて公に讒謗し又は中傷」すれば牲罰九頭三回に處せられ、他の王公に侮辱を加へる者は牲罰九頭二回、台吉、タブネン及び官吏に侮辱を加へる者は牲罰九頭、地位低き官吏に侮辱を加へる者は牲罰七頭、驍隊の指揮官に侮辱を加へるものは牲罰五頭、騎兵中隊の指揮官に侮辱を加へる者は被侮辱者の利益となる牲罰三頭を夫々科せられ、人の蔭にまはつてする侮辱は一個人に對する侮辱と見做される（第三節—一八〇條）。

I、財産に關する犯罪

強盜、掠奪（註）

註 強盜と掠奪との本質的な差違は第一法規にも又第二法規もなされてゐない。

殺人を伴う強盜、掠奪に就いては吾々は既に述べて來た。傷害を伴う強盜、掠奪の犯罪に對しては其の主犯者及び共犯者は斬首刑に處せられ、財産は被害者の家族の爲めに沒收される（第三節—一七條）。台吉が斯る犯行をなせば、主犯者は監禁後死刑を宣告され、共犯者は首枷一ヶ月處せられ笞刑百を加へられ、而る後ウルムチに放逐され勞働を強制せられる等（第三節—二二條）。掠奪せず唯傷害を加へた強盜は、判決確定まで監禁され、然る後死刑を宣告されるが、宣告の場合は輕減され、犯人は家族と共に山東、湖南に流刑され過激勞働を強ひられる（第三節—一九條）。犯人が台吉である場合は主犯者は監禁後死刑を宣告され、共犯者は一ヶ月の首枷、笞刑百を加へられた

後、近隣の軍團に放逐され監督下に置かれる（第三節—二三條）。一團となつて傷害、又は毆打を加へる事なく、而も強盜を働く者は監禁後絞殺に處せられ、財産は被害者の利益の爲めに沒收される。刑罰が輕減された場合に於ては山東、湖南に流刑、勿論共犯者も流刑である。單獨に之と類似の襲撃をなす者は前と同一地方に徒流刑に處せられる（第三節—二四條）。蒙古に於ける強盜、及び掠奪に關する事件に於て犯人が凡て蒙古人なる時は蒙古法に従がひ裁判され、犯人の凡てが支那人なる時は支那法に従つて裁判される。蒙古人も共に犯行に参加して居れば犯人はもつと嚴しき法律に従つて裁判される（第三節—三一條）。

J、竊 盜

本法規は國家の財産と個人の財産を明瞭に區別して居る。法規は皇帝の宿營より國家の所有馬を竊盜する者に對して刑罰を設けて居る。即ち馬五頭以上の竊盜に對する刑罰は絞殺、三頭より五頭までの竊盜に對しては過激勞働を課して居る。皇室林よりの木材伐採（放逐）、國家が所有する畜群よりの家畜竊盜（動物九頭までの竊盜は放逐、それ以上の竊盜は絞殺）—之等の竊盜に對する罰は個人財産の竊盜に對するものよりもつと峻嚴さを帯びて居る（第三節—三二條、三五條）。個人財産の竊盜、何人を問はず三十頭以上の家畜を竊盜する者は罰せられる。主犯者は監禁後絞殺、他の共犯者は放逐（流刑）される。若し十頭より二十頭まで竊盜する者の主犯者は監禁後絞殺を宣告され、積極的共犯者は流刑—不健康地に於て過激勞働に服せしめられる。他の共犯者は山東又は湖南に流刑、若し六頭より九頭まで竊盜をなす者は主犯者は不健康地に流刑其上過激勞働を強ひられる。積極的共犯者は河南、福建及び其他の地方に流刑、他の共犯者は體刑に處せられる。若し五頭より三頭まで竊盜する者は、主犯者は湖南、福建其他の地に流

刑、積極的共犯者は山東又は湖南に流刑、他の共犯者は管刑百に處せられる。二頭以下を竊盜するものは主犯者は山東、湖南に流刑、積極的共犯者は管刑百、他の共犯者は管刑九十を科せられる(第三節一三六、四一條)。小さな家畜に關しては、羊四頭又は若い牡牛四頭、小牛四頭、若き駱駝四頭は各々馬一頭、牡牛一頭又は駱駝一頭と同一視され、この比例に従つて刑罰は算定される。然しながら、若し盜難にかかつた羊、仔牛、其他が四頭よりも少ない場合は、主犯たる竊犯は管刑百、共犯者は管刑九十、又は八十回の管刑を科せられる(第三節一四二、四三條)。若し、犬、豚、鶏、鶩、鴨等を各一頭を竊盜するものは、最初の二つに對する牲罰は五頭、其他のものに對しては各一匹に三才の牡牛一頭の罰金、而して盜難にかかつた動物は返還される(第三節一四四條)。一より十ランの價值ある銀製品を竊盜する者は主犯者は九十の管刑、共犯者は管刑八十、又は七十の管刑に處せられる。十ランより四十ランまでの價值ある銀製品を竊盜する者は、主犯者は管刑百、共犯者は九十又は八十の管刑、若し盜難物が四十より七十ランまでの價值ある物であれば、主犯者は湖南、又は山東に流刑、共犯者は百又は九十の管刑に處せられる。盜難物が七十より百ランの價值あるものであれば、主犯者は河南又は福建及び其他の地方に流刑、積極的共犯者は山東又は湖南に流刑、他の共犯者は百の管刑に處せられ、盜難物が百より二百二十ランの價值あるものであれば、主犯者は雲南、貴州、其他の地方に流刑、他の共犯者は管刑百に處せられる。盜難物の價值が百二十ランを超過する時には、主犯者は監禁後絞殺を宣告され、共犯者は流刑、或る者は雲南、貴州、其他の地方に、他の者は山東、又は湖南に流刑勞働を強ひらる(第三節一四五、五十條)。竊盜をなす台吉は家畜竊盜に關する條項により罰せられ(第三節一四五、五十條)。榮號を奪はれて資格は返還され得ない(竊盜罪ありと決定されると)(第三節一五七條)。親戚より竊盜する台吉は罰

せられ、其の罰金は親族關係の隔たりに従つて増加され(牲罰五頭より牲罰九頭三回まで)尙ほ牲罰に加ふるに盜難に罹かつた財産の回復が加るのである。若し竊盜犯が盜難物を回復し得ざる場合にして、而も罰金の支拂不能となれば彼の最近親である首長である台吉より其の損害は徴收される(第三節一七〇條)。

K、放 火

他人の家に怨恨又は復讐の故を以つて火を放ち、若しそれが故に何人かを死に致すならば、それに對する刑罰一官吏は絞殺、一般人は監禁後死刑其の上に財産は死せる者の家族に與へられる。若し火災の爲めに唯財産のみが喪失すれば犯人たる官吏は地位を剝奪され、一般人は管刑百回に處せられる。犯人の財産は被害者の利益の爲めに沒收される、(第三節一八三條)。火を放ち燻めて穴より野生動物を追出さしめる罪に對する罰金は牲罰九頭、若し其れが故に何人かが死すならば罰金は牲畜九頭三回、不注意にステツプに火を放つ事に對する牲罰は五頭、若しこれが爲めに何人かが死すならば、其の牲罰は死せる者の家族の利益となる動物九頭、若し斯る火の爲めに家畜が滅亡すれば其損害は支拂ふ事になつてゐる(第三節一八四條)。

財産の損害及び財産の喪失惹起

若し何人かが故意に他人の動物を射殺し、又は刺殺すれば、犯人は牲罰九頭が科せられる。若し何人かが故意にあらず他人の馬に傷害を與へ、而してそれが死すれば犯人は馬二頭を與へる事、若し傷害を受けし馬が回復すれば、犯人は二才牡牛一頭を支拂ふ事(第三節一八九條)。(註)

註 一六四〇年の法規九十一條參照

三、裁判制度及び訴訟手續

一七〇

司法と行政とは密接なる關係を結んでゐる。第一審は札薩克（旗長）に告訴す可きである。札薩克の判決、又は宣告に不服の場合は該事件は第二審なる盟長に控訴す可きである。控訴に於て盟長の判決に不服の場合は理藩院に相當の手續を爲し得るのである。それには該事件に關する札薩克、及び盟長の文書の寫しが添付されねばならない。該廳は該事件を審理し、若し必要ならば札薩克、又は盟長に該事件に就き取らねばならぬ方法を勸告し判決の變更を命ずる。然しながら、事件が重大なる時には該事件を審議する特別辯事大臣の派遣方を皇帝に上達す（第三節一八二條）札薩克及び盟長を無視し直接該廳に出訴する事は犯罪を構成する。これに對し台吉及び官吏は牲罰九頭三回を科せられ、一般人は笞刑百回を科せられる。

該廳は事件を審理する義務があり、若しそれが普通の事件であれば、夫々の台吉又は盟長に送達す。しかし事件が重大なものであれば、該廳は特別辯事大臣の派遣方を願ふ事が出来る（第三節一八三條）。該廳は唯單に台吉及び盟長の宣告に對する控訴を審理する権利のみならず、又該判決に公平を缺くならば、それ等のものの審理をなす権利をも有してゐる（第三節一八四條）。死刑を宣告された犯人に關する一件書類は理藩院に送附され、特に重大にして秋審まで延期をなし得ない事件に於ては、中央政府の刑事部及び民事訴訟法廷の官員を招き共に事件を見なほし判決の裁可を得る爲めに皇帝にそれを上達す（支那に於て死刑は皇帝の裁可を得てのみ執行される）。確定判決が爲されるまで死刑執行が延期される事件に關しては、理藩院が六院全部、及び民事訴訟法廷及び其れ等と關聯してゐる。他の會

等より成立した正式會議に於て審理する爲め刑事最高法院に該判決を送達する—此會議は事件を審理し、而して確定判決を與へる爲めに秋期に召集される（第三節一九三條）。蒙古人は法廷に於ては個人的に訴へねばならないのであつて、第三者の介入は許さず、若し其れを犯すならば馬一頭の罰金に處せられる（第三節一九一條）。盟長の判決に對する控訴の場合、若し審理後其れに就き不服に何等かの根據なき事が判明すれば控訴者は罰せられる。即ち其の控訴が第一位、第二位王公に對するものであれば、牲罰九頭、他の王公に對するものであれば、牲罰五頭であり、他の武官に對するものであれば馬一頭の罰金（第三節一八六條）。

竊盜の調査は追跡の手段による（第一節一九三條）（第三節一二三、一二二條）。若し其の足跡或るキャンブより放たれた矢の距離の地點に導かれて居れば、其のキャンブの所有者は宣誓をさせられて事件は解決する。若し足跡が放たれた矢を越へた所に導くならば如何なる疑問も起らず、従つて宣誓は必要である（第三節一二九三條）。搜索は疑問視されてゐる人の家に於ては爲されても差支へない。然しながら、證人の前でなされねばならない。何人を問はず搜索を拒否する者に竊盜犯と見做される（第三節一五六條）。證人の證言に就いては本法規は極めて重要性を與へてゐる。或る事件に就いては宣誓によつて解決がつくが、特に直接證據となるべきものがなく、而も疑問視されてゐる時には本人は犯行の不知を確證する宣誓をなし得る。若し、彼が宣誓をなせば釋免され、若し頭を打ち振り、其れを拒否すれば犯罪ありと宣告される（第三節一一六、一一七條）。王公、台吉及びタブネンは特に重要な事件を除いては宣誓に立たしめられ得ない（第三節一二四條）。

吾々は二つの蒙古法規を第一法規は可成り詳細に、第二法規は唯其の中興味ある部分のみを簡單に研究をした。そ

して吾々は何よりも先づ兩法規が蒙古人の純粹の規程集（慣習法の蒐集）ではなかつた事を明記せねばならない。支那側の法規が是等に大なる影響を與へてゐたのである。然しながら、それと同時に又其の中に斷片的なものであるにしろ、或る程度まで完成して尙今日僅かではあるが知られてゐる。蒙古慣習法の姿の原始的な制度を見出すのである。それは過去の記録にある若干のをぼろげな事件を説明してゐる。（註）

註 ホツドニエフ氏著「佛教僧院の生活様式概観」一八八七年 七頁参照。

支那の影響は行政法のみならず、最も刑法に及んでゐる。一六四〇年の法規の刑罰條項の中に吾々は當時の蒙古人の生活様式、及び遊牧蒙古人の性質と常に相一致せざる澤山の慘酷な刑罰（例へば自由の剝奪）、夥多なる死刑の宣告、寸断に斬殺する死刑、絞殺、首枷、及び種々なる方法による流刑、曝首等々を見出す。然し其れと同時に又此處には蒙古法の或る制度が明瞭に表示されてゐる。例へば、既に成吉思汗の大法典中に出會したものであり、又一六四〇年の法規、及びフリアート民族の法律に於ても屢々適用されてゐる牲畜九頭により算定される罰金、家畜竊盜に對する嚴罰、掴み合ひの争鬪に於て相手方に傷害を與へ、又は不具ならしめ其後五十日以内にそれが原因となつて死すに至れば、殺人犯と同一視する其の考へ方、此の判決方法はフリアート慣習法の中にも見出されるのである。足跡が何人かのキャンプより放たれた矢の内部に導かれてゐる時には、追跡に對する宣誓等である。然しながら、勿論征服者支那は私法の範圍内に尙ほ多くの習慣法を取入れるべく余議なくされた。遺憾な事には兩法規中には唯僅かの私法に關する條項のみしかなく、殊に第二法規は一六四〇年の法規よりも可成り少ないのである。之には極めて意義深いものがあるのだ、兩法規中に取入れられて居る私法の條項は甚だ僅少で唯人民の接觸間に起る最も必要なる事件

に對してのみ設けられてゐるだけでなく、之等の條項は特に支那人と蒙古人との關係を律してはゐるが、彼等蒙古人自身の間の私法の性質を帯びる諸關係には正式の法規なく其のまま取殘されてゐる。蒙古刑法に於ける必然的ギヤツプを律せんとした、第二法規の刑法部分の條項ですら、支那の刑法によつて補足されてゐるのである。かゝるが故に第二法規を蒙古法規の補足的根源となす事は、私法の中には規出し得ない事なのである。之等凡てのものは吾々を此の如き結論に導く、私法の問題に就いては、蒙古人は以前の如くに慣習法の條項、及び蒙古の過去の法典を適用してゐたと言ふ事である。此の想定はシャビンスク部の蒙古人が尙ほ十七世紀の初期の法典（註）喀爾喀ヂロムを適用してゐると言ふ事を述べてゐる、ヂヤムトサラノーにより確證されるのである。

註 チヤムトサラノー及びツルノツフ兩氏の著書「蒙古民族成文律記録の展望」ホツドニエフ氏著「蒙古及び蒙古人」参照。

しかも、私法に關する之等の數個の條項中に於て、吾々は又或る興味ある若干の表示を發見するのである。かくして、吾々は此處に一定價格のカリム—花嫁の爲め、又花婿、又は花嫁が死亡せる場合、それが返還の準備としてのカリム—は一六四〇年の法規及びフリアート法の命令と類似のものであると言ふ點を發見するのである。一六四〇年の法規に於て、唯序文に書かいた養子に關する規則は第二法規に於てはよりはつきりと限定されてゐる。其の上に相続財産の相續順序は一般にフリアート法の表示と同一である。而るに、一六四〇年の法規に於ては、此の問題に就きなされてゐるのは唯慣習に關係づけてゐるだけに過ぎない等。斯くして、理藩院の蒙古法規は蒙古慣習法の若干の條項を包含し、確立したものであつて、慣習法の若干の制度を明白に説明する限りに於て、一つの興味あるものを提供し

てゐるのである。之等兩者の最も興味深い部分の内容を説明する事の必要を何故に重んじたかと言ふのは、之が爲めなのである。一七八九年の蒙古法典と元王朝の一三二〇年の蒙古法典との關係は興味深々たる問題である。レボツゼツト氏（一八一五年の蒙古法規の翻譯の序文に於て）は、一七八九年の法典は過去蒙古の諸汗の發した布告に基くものだと確かに語つてゐる。然し一三二〇年の法典を手にしてゐるわけではないのだから、吾々は此の發表論文を立證し此問題を解決する事は出來得ない。

第貳編 ブリアート人の慣習法

第一章 ブリアート人

「参考書」ミラー著「シベリア王國の叙述」。フィシャヤ著「シベリア歴史」。アードレービツチ著「シベリア歴史」スバスキイ著「ブリアート人若しくはフラツト人」。「シベリア使節」（一八二四年第一卷）。ライエフ著「ブリアート人」（地理學協會誌一八五八年版第二號）。ホドゴルホンスキイ著「ブリアート人」（別卷）。クロートヴスキイ著「ホリ・ブリアート人」（一八九九年版）。セレブレニコフ著「シベリア征服及びイルクーツク州の初期の殖民、トランスバイカルに於ける土地所有權の研究の爲の委員會の資料第五卷」（クーロムジン委員會）。ホゴダノフ著「ブリアート歴史の抜萃ロシア地理學協會の西シベリア區の記録第卅八卷」。ストチャポフ著「ブリアートオーローと氏族共同社會ロシア地理學協會のシベリア區誌、第三、四卷」。ヴァギン著「シベリアに於けるスベランスキイ伯の活動の歴史的資料第二卷」。プロトチエンコ著「シベリア國境地第二卷」。プラトスキイ著「イルクーツク州のバラガンスク郡に於けるブリアート人生活のスケツチ」（シベリア問題一九〇六年版第二號）。ジャムツアラノ著「ブリアート人の正義概念」（シベリア問題一九〇六年版第二號）。ハンガロフ及びクレメンツ共著「北方ブリアート人の共同狩獵」（ロシア人種誌に關する材料第一卷）。ハンガロフ著「ブリアート人の法律慣習」（人種誌評論一八九四年版第二卷）。クドル著「トランスバイカルのブリアート人」。